金の星

Z32-B88

国立国会
8. 3. 28
図書館

第七號　七月号　第六卷

大正十一年六月十三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　大正十三年六月九日印刷納本　大正十三年七月一日發行

Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak

漫畫 カルピス 滋強飲料

大力蟻松の話

一平畫伯廣告漫畫試案

一、蟻五郎『君はどうしてそんなに強く大きくなつたのだ』蟻十郎『この頃はなほカルピスの容器を舐めて居るからさ』

二、蟻五郎『僕の所のワイフが卵で騙つてるんだ』蟻十郎『カルピスを分けてやらう。あれは産婦の滋養によく、その脳兒がよく育つそうだ』

三、蟻五郎の妻梨子『父赤砂糖ですか、あなたは働きがないから赤砂糖ばかりしか運んで來ない』蟻五郎『道ふこ今日はもつと甘いカルピスといふものだ』

四、梨子は無事出産『子供は蟻松と名付けた、腹の中からカルピスで育つた蟻松は生れ落ちる時から力強く、蟻なぞは一人で運ぶので仲間の褒め者』

社會式株產製スピルカ元產製 飲料●食料品●酒●煙草

花の色でも
水の色でも
雲の形でも
氣持ちよく現せる

王様クレイヨン
キングクレイヨン
王様水彩繪具

最寄の文具店にて品切の節は直接御申込下さい

發賣元 東京工業株式會社
東京市本郷區眞砂町三七
振替口座東京四二九六五

金の星

世界少年少女

第一編　新刊

ロビンソン漂流記

（四六判箱入美本　内容約百七十頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて來るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程澤山讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですから、この本を讀まない者は、一生の不幸だとさへいはれてゐます。

第二編　新刊

ナポレオン物語

（四六判箱入美本　内容約百六十頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

『ナポレオン物語』は卽ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服すべき榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント、ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語を、わかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな反響を與へるでせう。

第三版

社編

女名著大系

第三編　新刊

ドン・キホーテ

（四六判箱入美本　内容約百七十五頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

イスパニヤのある村にクイザノといふ男がありましたが、毎日書齋にこもつて騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひました。そこで痩馬をひつぱり出して、それに乘つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編　近刊

コロンブス物語

（四六判箱入美本　内容約百七十頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心慘澹して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力とには、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。

發行所　東京市外田端三五一番地　金の星社

振替東京五九五九六番

丸善インキ

丸善インキ
丸善インキ
丸善インキ
丸善インキ

アテナインキ
アテナインキ
アテナインキ
アテナインキ

このお店にも文房具店にもあります

野口雨情先生著

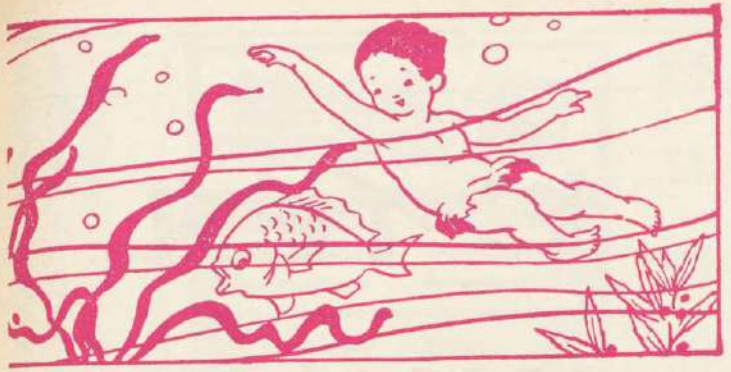
童謡集 青い眼の人形

裝幀 蕗谷虹兒畫伯
挿畫 寺内萬治郎畫伯
武井武雄畫伯

總絹表紙箱入美本、紙數約二百三十頁、定價壹圓八拾錢、郵送料十五錢

雨情先生の童謡中特に傑作のみ八十篇を撰んで一冊となしたもの。しかも、目もさめるばかり美しい裝幀に飾られた本書は、童謡界最初の模範的出版であります。賣切れぬ内御購讀下さい。

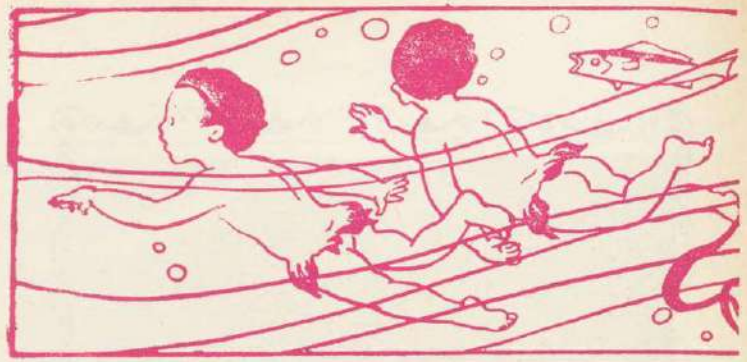
東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番
電話小石川五三八七番



目次

（第六卷・第七號）

歸れよ小鳩（表紙・原色版）……寺内萬治郎
不思議のランプ（口繪・三色版）……秦西童話名畫
はぐれ島（童話）……（一）野口雨情
同作曲……（二）本居長世
魔法探し（童話）……（六）豐島與志雄
王女になつた人魚の話（童話）……（一五）森川一朗
らふそく魚（童話）……（二一）小島政二郎
孫悟空と牛魔王（童話）……（二八）楠山正雄
ホシローヒルム（蚕とりの卷）……（三四）寺内萬治郎
ファトメを救ひに（童話）……（三八）藤森淳三
ねずみ（捨島童話）……（四九）大場繪津
水の呑めない蟻（飛島童話）……（五三）伊藤一雅



すいっぽん（一頁小話）……秋山文
ラム王の一生（童話）……（六六）武井武雄
旗口（見童謡）……（六八）鈴木春太郎
十五少年漂流物語（長篇）……（七四）霜田史光
狐火（童話）……（八五）川崎春二
ソロモン王の姫君（童話）……（八九）永橋卓介
蚊帳つり（童話）……（九八）若山牧水
乞食の騎士（世界名作童話）……（一〇〇）三宅房子
まきり（童話）……（一一二）野口雨情選
春の雪（幼年詩）……（一二六）若山牧水選
芋ほり（綴方）……（一二六）齋藤佐次郎選
（附錄）
誌上講演 どちらが偉い？……（一四四）沖野岩三郎
長篇童話 猿になつた王子の話……（一二一）中島孤島
挿畫……寺内萬治郎 武井武雄 藤森虹兒 水島爾保布

不思議のランプ

（泰西童話名畫その五）

アラビヤン・ナイトの中の話として有名な『アラヂンの不思議なランプ』の一節です。少年アラヂンは魔法のランプを掘出して來て、それに灯をともしたのです。

▼野口雨情先生著○中形版上製箱入頗る美本○定價金一圓二十錢送料十三錢

重版發賣

童謠作方問答

▼童謠を作る人、又は童謠を教ふる人、或は又苟も童謠を口する諸士の必ず一讀すべき書として江湖に愛讀されつゝ有る本書の重版は眞に同好の諸君の一大歡喜せる處と聞き及ひたり。

重版いよ〳〵出たて忽ち高評を博し日々注文激增しつゝ有る本書を見よ

青我葉も吹いくと風しょも良と書を抱しょ

蕗谷虹兒先生新著 第二輯 **悲しき微笑** 版畫界の第一人者が心をこめて筆を執れる空前の美本 金一圓九十錢 送留十五錢

西條八十先生著 新らしい **詩の味ひ方** 詩を作らむと欲する人は是非本書を讀まざるべからず 金一圓六十錢 送料十五錢

水谷まさる先生著 小曲詩集 **寶石の夢** 語るに由もなき女學生諸嬢の胸を一管の麗筆に托して歌へるもの 定價金九十錢 送料十一錢

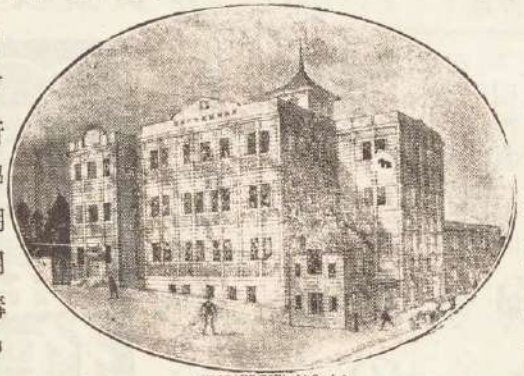
下田惟直先生著 小曲集 **胸より胸に** 少女畫報の主筆として名聲高き著者の第一詩集である 定價金一圓卅錢 送料十三錢

水谷まさる先生著 少女 **詩の作り方** 詩や小曲を初めて作らうと思ふ人は是非本書を讀まねばならぬ 定價金八十錢 送料十一錢

交蘭社 東京振替○神田区南神田二番地七 東京神田区神保町九番地

■ 天下青少年の登龍門 ■

會長、正三位 尾崎行雄
學監、理學博士 山內繁雄
文學博士 遠藤隆吉


（本會事務所設計圖）

目下新學期開講中
入會の最好期は今也!!
講義錄見本つき會則
——申込次第無料進呈す——

大日本國民中學會あり!!

天下の青少年諸君意を強うして可也

諸君は學校萬能の迷夢より醒めなければならぬ、中等教育を受くるには必ずしも中學校に入るを要しない、諸君と居乍らにして中學校に學ぶことが出來るのである。大日本國民中學會の卓説をつくせる講義錄は學校以上の學校、教師以上の教師として諸君に臨むであらう。

本會二十二年の試練と經驗とはこゝに次の如き獨自の特色を獲得せり。

- 講義の新いこと……模範的通信教授法として推奨せらる。
- 會費の廉いこと……全科の學費一ヶ月分の遊學費にも達せず。
- 學制の正いこと……正確に中學校令に從ひ全く中學校と同樣也。
- 指導の良いこと……通信教授に永き經驗を有するを以て指導鋭切を極む。
- 講師の善いこと……中等教育者として令名ある實際家を選ぶ。
- 卒業の早いこと……僅か一ヶ年半の短日月にて卒業の榮冠を得らる。
- 基礎の固いこと……創立以來二十二年國家的卒業として一般に認めらる。
- 成功の確なこと……本會の門より出でたる成功者の多きこと謂ふを用ひず。

東京神田河岸
大日本國民中學會
振替口座（東京四一〇〇番 名古屋四二八〇番）
電話神田（三〇〇二番、三〇〇二番、三〇〇四番、特殊牛込五〇九五番）

復興版出來

童謠の作り方

葛原鹿先生著

四六判總布製 二百六十頁 定價金壹圓六拾錢 送料金八錢

兵を用ふるものは先づ兵を知らねばなりません。童謠を作るのでも同じことです。只漫然と作つて居るのでは何時までたつても上達はしないでせう。本書は童謠詩人であつて且つ兒童教育に深い理解のある著者が最も親切丁寧に童謠の作り方を説明せられたもので、發行以來非常に評判のあつた本です。震災で一時品切れになつて居ましたが今度復興版が出來ました。何卒本書によつて一人でも多く新らしい詩人の生まれることを望みます。

標準
日本お伽文庫
普及版

日本童話〔上下〕
日本傳説〔上下〕

新らしいいろ〳〵變つたお話を讀んだり作つたりする前に先づ日本古來の童話傳説を知ることは國民性の問題から言つても大事なことです。本書はその意味で故文學博士藤岡外先生、文學博士松村武雄先生、赤い鳥の鈴木三重吉先生、東京高師の馬淵冷佑先生が協同で著はされたものです。

定價 金六拾錢
各冊 送料金六錢

東京銀座二丁目 培風館 振替東京 三二六一七

高級繪雜誌『ミソラ』七月（第二卷第七號）

○海の唄……（表紙）……寺内萬治郎
○草の上……（童畫）……竹久夢二
○雀の使ひ……（童謡）……野口雨情作　寺内萬治郎畫
○仔牛……（童謡）……逢崎龍作　清水良雄畫
○ひよこの母アさん……蕗谷虹兒
○わたしの人形……武井武雄
○エノクごつこ……（聖書童話）……沖野岩三郎作　寺内萬治郎畫
○かくれんぼ……（童畫）……鈴木淳
○風りん……（童謡）……陶山篤太郎作　竹久夢二畫
○かへる……（童話）……田中寅作　松政德次郎畫
○赤い馬車……（童謡）……逢崎龍作　鈴木保德畫
○海水浴……（童話）……小川あつし作　耳野三郎畫
○救主の話……（聖書童話）……山野虎市作　寺内萬治郎畫
○砂のお城……（童畫）……小林和郎
○田舍のお家へ……（裏表紙）……寺内萬治郎
△附錄ミソラ曲譜……（寺内萬治郎裝幀）
△雀の使ひ……作曲）……弘田龍太郎
△仔牛……（作曲）……小松耕輔

一冊定價四十錢　郵稅壹錢五厘

大阪市西區土佐堀二丁目三番　ミソラ社　振替大阪一二一九六

島崎藤村先生著

童話集ふるさと

定價壹圓　郵稅四錢
フランス式裝幀

卅四版

「はしがき」から――『人はいくつに成つても子供の時分に食べた物の味を忘れないやうに、自分の生れた土地のことを忘れないものです。假令その土地がどんな山の中でありましても。そこで今度、自分の幼少い時分のことや、その子供の時分に遊び廻つた山や林のお話を一冊の小さな本に作らうと思ひ立ちました。あの「幼きものに」と同じやうに、今度の本も太郎や次郎などに話し聞かせるつもりで書きました。それがこの「ふるさと」です。』

東京南紺屋橋町　實業之日本社發行　振替東京六番三二

金の星

七月號

通卷第五拾六號

西川勉新譯

メエテルリンク童話集

（四六判三二〇頁裝幀美、定價金壹圓五拾錢　送料拾錢）

素ばらしく面白い童話集が出來ました。世界に有名な童話は澤山ありますけれども、メエテルリンクの童話位、世界から歡迎されたものはありますまい。

その有名なお話しの中から、殊に各國々の少年少女達によろこばれる、（青い鳥）（尼の身替り）（犬）（青髯爺さん）、（十二人の盲人）等の本當に面白いものばかりを、皆樣におなじみの最も深い西川先生が書かれたのです。各篇には澤山の繪を入れ、三色刷も添へてあり、それに色刷の箱入りですから、それはそれは奇麗な本であります。此の童話集は、是非皆樣に讀んでいただきたい本です。

野口雨情先生序
時雨音羽新著

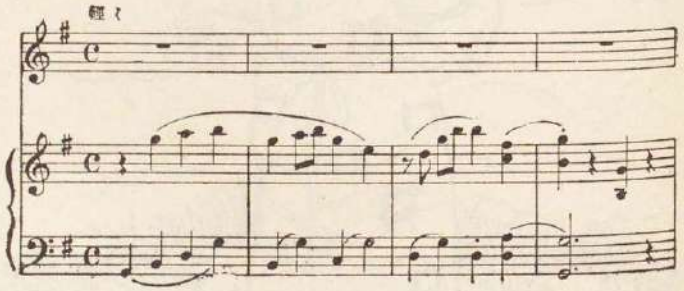
民謠集
うり家札

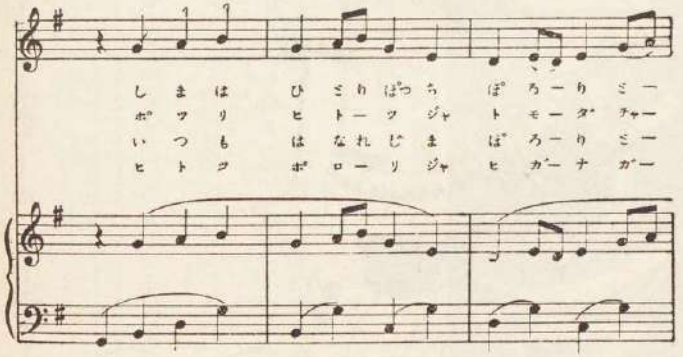
新形美本
定價八拾錢　送料四錢

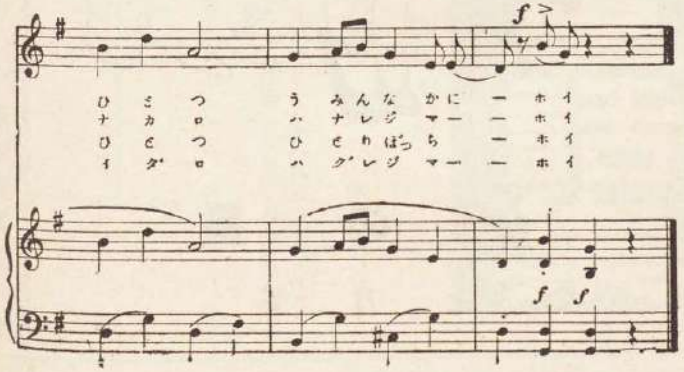
發行所　東京神田錦町一ノ一　振替東京一九三三二五　米本書店

はぐれ島

本居長世作曲


軽く

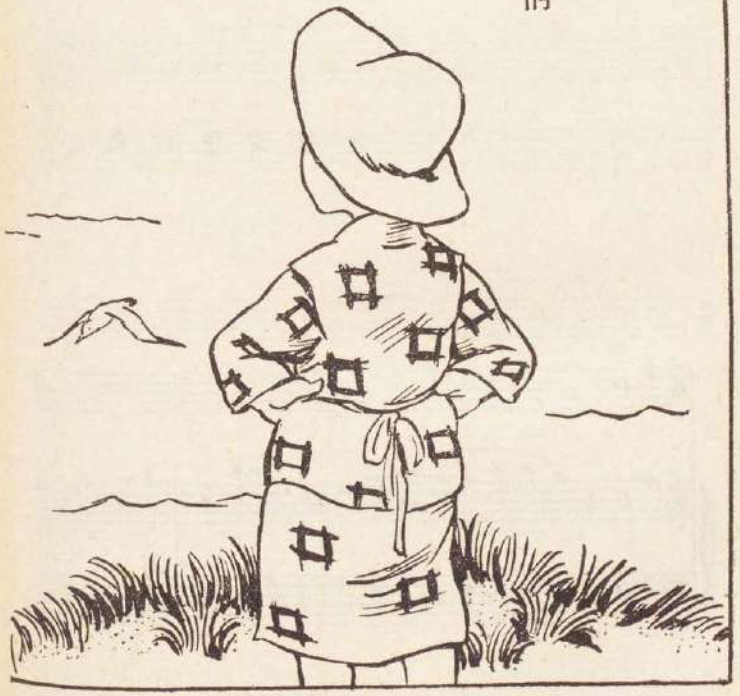

しまは ひとりぼっち ぼろーりミー
ポツリ ヒトーツジャ トモーダチャー
いつも はなれじま ぼろーりミー
ヒトツ ポローリジャ ヒガーナガー


ひとつ うみんなかに ーホイ
ナカロ ハナレジマー ーホイ
ひとつ ひとりぼっち ーホイ
イダロ ハグレジマー ーホイ

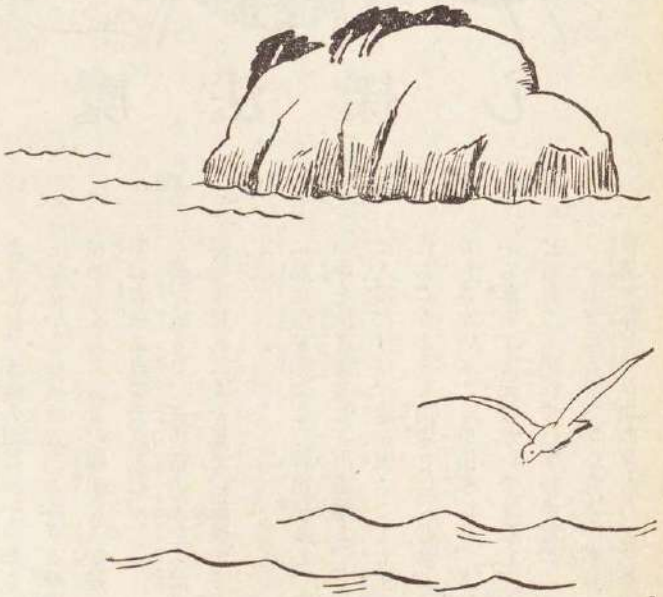
はぐれ島

野口雨情

島はひとりぼっち
ぼろりと一つ
海ン中に　ホイ
ぼろり一つぢや
友達ヤなかろ



離れ島　ホイ
いつも離れ島
ぼろりと一つ
ひとりぼっち　ホイ
一つぼろりぢや
日が永いだろ
はぐれ島　ホイ



魔法探し

豐島與志雄

むかし、ペルシャに大變えらい學者がゐました。天地の間に何一つ知らないことはないといふほど、あらゆる學問をきはめつくした人で、國王や人民達から非常に尊敬されてゐました。

所が或る日、高い塔の上から濠の中に落ちて死んだ人を見て、彼はかう考へました。

『鳥は空を飛ぶことが出來るし、魚は水の中を泳ぎ廻ることが出來る。それなのに人間だけは、空を飛ぶことも出來ず水にもぐることも出來ない。なぜだらう。もしさういふことが出來たら、人間は塔から落ちても死なないですむし、水の中に落ちても溺れずにすむのだが……』

そしていろいろ考へた末、彼はふと魔法使の話を思ひ出しました。子供の時お

祖母樣から聞いた話で、自由自在に空を飛んだり水にもぐつたりするといふのです。けれどそれはたゞ話に聞いただけで、いくら彼が學者でも、まだ魔法だけは知らないのでした。

『話にある以上は、實際にあることかも知れない。私はもう世の中のあらゆる學問をしつくしたのだから、これから魔法を學んでやらう。』

さう決心して彼は、いろんな古い書物を調べたりいろんな人に尋ねたりしましたけれど、どうしたら魔法が使へるか更に分りませんでした。けれども、魔法使の話が傳はつてるからには、何處かにさういふ者がゐるに違ひありません。

そこで彼は、王樣や人々に別れを告げ、多くの旅費を用意して驢馬に乘つて、魔法使を探しに出かけました。

幾年も彼は旅を續けました。魔法使の住居を遠くから來た旅人や方々の學者に尋ねたり、自分で探し廻つたりしましたが、どうしても分りませんでした。しまひには、用意の旅費もなくなつてしまひ、驢馬を賣り拂つた金も使つてしまひ、乞食のやうな旅をしなければならなくなりました。それでも彼は決心を變へませんでした。どうにかしてその日その日の食物を手に入れながら、方々の土地を歩き廻りました。

更に幾年かの後、彼は或る廣い廣い森の中に迷ひ込みました。いくら行つても森ばかりで、人の姿はおろか、人の通つた足跡さへも見えません。何千年たつたとも分らない大木が立並んでゐて、その枝葉の茂みで空を隱してゐて、晝は日の光も見えず、夜は月の光もさゝず、地面には落葉が堆く積つて、氣味の惡い苔などが生えてゐます。彼は落ちてる木の實や苔の間の茸などを食べ、所々に湧き出てる泉の水を飲み、疲れると一枚の毛布にくるまつて落葉の上に眠り、そしてたゞ眞直に歩いて行きました。け

れどやはり、どこまで行つても森ばかりです。

さうして幾日かたつた後、彼は木の實をかぢりながら歩いてゐますと、ふと向ふに、晴れやかな日の光を見出して、小踊りせんばかりに喜びました。長い間の疲れも忘れはて、急いでやつて行きますとまあどうでせう、森の中に大きな池がありまして、澄みきつた綺麗な水が一杯たゝへてゐまして、池の縁やまはりには、眞白な花が一面に咲き離れてゐてその上に晴々とした日の光がさしてゐるのです。彼は久し振に日の光を見て、暫くはぼんやりつゝ立つてゐましたが、やがて氣がついてみると、池のまはりの木には小鳥が鳴いてゐるし、花のまはりには蝶や蜂などが飛び廻つてゐます。深い森の中にそんな天國のやうな場所があらうとは、夢にも思はなかつたのです。彼は先づ池の清い水を飲み、それから日の光にあたつて、あたりの景色を眺めましたが、そのまゝいゝ心持になつてうつらうつらと眠つてしまひました。

眼をさますと、もう夜になつてゐました。月の光がさしてゐて、池の面が水銀のやうに輝き、白い花が氣味惡いほど眞白に浮出して見えます彼は木影に坐つたまゝ、夢心地でぼんやりしてゐました。

すると、方々から綺麗な女達が出て來ました。みんな腰から上は眞裸で、腰にいろんな色の薄絹をつけてるのです。森の中から出て來のは綠色の絹をまとひ、水の中から出て來のは水色の絹をまとひ、白い花の咲いてる叢から出て來たのは白い絹をまとひ、そしてその女達が池の綠の青草の上に集つて、歌つたり踊つたりし初めました。彼は喫驚して息をこらして眺めてゐましたが、やがて、それは書物にあつた森の精や水の精や花の精達だと覺つて、なほよく見るために、木影から少し進み出て行きました。とたんに、精女達の一人が彼の姿を見付けて、何か相圖をしたかと思ふと、皆の姿は煙のやうに何處かへ消え失せてしまひました

彼はあつと口と眼とを打開いたまゝ、其處にぼんやりつゝ立つてゐました。

暫くすると、後ろの方の大きな木の茂みの中から恐ろしい聲が響きました。

『お前は何者だ。』

彼は喫驚して振向きましたが、何の姿も見えない

で、大木の枝葉が黒々と茂つてるばかりでした。がまたその中から、恐ろしい聲が尋ねました。

『お前は何者だ。何しに此處へ來たのか。』

そこで彼は、聲の主は屹度森の王で精女達の主人だらうと思つて、丁寧に答へました。

『私はペルシャ第一の學者で、天地の間に何一つ知らないことはないのですが、たゞ魔法だけを知らないものですから、こんどはそれを學ばうと思つて、魔法を知つてる人を方々尋ね歩いて、此處までやつて來た者でございます。』

『さうか。』と恐ろしい聲は答へました。『此處は人間のやつて來る處ではない、また魔法使の住んでる場所でもない。然しお前の熱心に免じて、魔法めいた術を少し教へてやつてもよい。その代りお前に一つ尋ねたいことがある。お前は天地の間に何一つ知らないことはないと云ふが、それでは、空の星の數は幾つであるか、そしてお前の頭の髪の毛は幾本であるか、それを答へてみよ。』

彼は困りました。いくら學者だからといつて、空の星の數や自分の頭の毛の數は知りませんでした。彼が默つてゐると、恐ろしい聲はまた云ひました。

『何一つ知らないことはないと云つておきながら、それくらゐのことも知らないのだな。それでは三日の間待つてやるから、それまでに答へをせよ。もし三日の間に答へられなかつたら、この池は底無しの池だから、この中に身を投げて死んでしまへ。はつきり答へられたら、お前の望み通り、自由自在に何にでも姿を變へる術を教へてやる。』

『承知しました。』と彼は答へました。

それから彼は三日の間、空の星は幾つであるか、自分の頭の髪毛は幾本であるか、一生懸命に考へました。然しそんなことは、いくら考へても分りやうはありませんし、また一々數へることも出來ません。

あたりは深い森であり、前には底無しの池があり、

池の縁には白い花が咲いてゐます。けれどたゞそれきりで、もう空が曇つて、日の光も月の光もさゝず蝶や小鳥も飛んで來ず、精女達も出て來ませんでした。

彼は池のとほりに坐つて、兩手を組み歯をくひしばつて、三日の間一生懸命に考へましたが、空の星の數も自分の頭の毛の數も分りませんでした。

三日目の夜になると、彼はもうとても駄目だと思つて、悲しさうに立上つて、ふらふらと池の縁までやつて行き、思ひ切つて眞逆樣に池の中に飛び込みました。とたんに、空の星の數と自分の頭の毛の數とがはつきり分りました。それは大變な數でした。もうその數を云ふだけの隙がありませんでした。彼の身體は底無し池の中に眞逆樣にずんずん沈んでゆきます。そして上の方に、池の面や白い花や急に晴れた空や月の光などが、ぼんやり見えまして、花の間には精女達が歌ひ踊つてゐます。彼はだんだん深く沈みながら、それらの景色をぼんやり眺めてるうちに、いつしか氣が遠くなつてしまひました。

……だいぶたつてから、彼はふと我に返りました。見ると、自分はいつのまにか、幾十年前か前に出た家に戻つてゐて、寢床の上に寢てゐるのでした。髪の毛は眞白になり、手足は痩せ細り、腰は立たず、ひどく年をとつて死にかゝつてるのでした。彼は喫驚して眼を見開きましたが、森の中のことを思ひ出すと、急いで星の數と頭の毛の數とを云つて、そのために不思議な術を得て、死なない前に自分の身體を石にしてしまひました。

石になつた彼の身體は、やがて家の人達に見出され、それから大變な評判になつて、王樣の耳にまで聞えました。王樣は石になつた彼を宮殿に運ばせて魔法探しに出てからのことをいろいろ尋ねられましたが、彼はもう石になつてしまつてゐましたので、何一つ口を利くことが出來ませんでした。それで、不思議な魔法めいた術のことも、空の星の數も頭の毛の數も、誰にも傳へられずに、たゞ彼の石の身體だけが、永く殘りまして、學者達から尊ばれ拜まれてゐます。（をはり）

王女になつた人魚の話

森川朗一

一

人魚の娘達は浪も立たない深い海の底で靜かに暮してゐました。人魚の家と云ふのは珊瑚や眞珠ですばらしく綺麗に飾り立てられた御殿で、そこには兩親はじめ、澤山の姉妹がゐました。

人魚の娘達は歌を歌ふことが上手で、そしてどれもこれも皆美しい顏

を持つてゐました。この美しい人魚の娘達が海の上の方に浮び上つて、踊るやうにして泳ぎながら惚々とするやうな歌を歌つてゐると、其處を通り掛つた船の上の人々は誰も彼もうつとりとそれに聞き惚れて、中には思はず海に飛び込んでしまふ者さへあるとの事でした。

さうした人魚の娘達が海の上に浮び上つて人の眼についてゐたのはずつと昔のことで、人魚達が人の眼についた爲めに種々な災難を受けたものですからその親達は今では危んで娘達を海の上まで遊びに出さないやうになりました。これは娘達にとつて何とつまらないことだつたでせう。海の底の御殿は綺麗で、何の苦勞もない暮しではありますが、美しい聲で歌を歌つても、聽いて呉れる者は親か姉妹か、でなければ魚達だけでしたから、毎日退屈な日ばかり續きました。

人魚達にとつて一番羨ましくあこがれてゐるのは人間でした。人魚は體に人間で腰から下が魚の形でしたから、どうかして本當の人間になつて、陸の上で暮しがして見たいとは誰しも願ふ所でしたが、魚の尻尾が人間の二本の足に變らない限りはどうしたつて人間のやうに陸へ上つて暮す譯には參りません。

人間を見たと云ふのはもう幾十代も前の人魚達で海の上へ出ることを止められてからは、親から子、子から孫と順々に語り次ぎにされて來た話より外には、人間と云ふものを知らなかつたのです。

五人の姉妹のうちでも末娘は一番綺麗で歌も上手でした。末娘は殊に人間になりたい望みで胸の中は滿ち〳〵でゐましたから、暇さへあればその姉達や親達に向つて、

『人間の話をして聽かせて下さい。』と、せがむのでした。

すると親達も姉達もいつも極つたやうな話――人間の暮しの樂しいことや、おいしい食物、美しい着物、樂しい音樂又は春夏秋冬變る美しい陸の上の景色のことなど、本當やら嘘やら取り交せて話して聞かせるのでした。末娘はいつも同じ話であつても、それを聞くことが何よりの樂しみでした。さうして聞いてゐる時、末娘の眼は憧憬の爲めに美しく輝き、胸は高鳴るのでありました。

或日のこと、末娘は鯨の所へ行つて訊ねました。

『鯨さん、お前さんはそんな大きな體をしてゐて、不自由ぢやないかね。』

『や、これは人魚のお嬢さんでしたか、どうして〳〵體が大きいからつて一寸も不自由ぢやありません。近頃は人間の乘る船が馬鹿に大きな恰好をして海の上を走るので、私なぞは怖くて仕方がありません。慾を云へばもつと體が大きい方がいゝと思ふ位です。』

『人間の乘る船つて、お前さんは見たことがあるのかね。』

『そりアお嬢さん、ありますともさ。私はこの體で幾萬里でも泳いでゆきますので、そして御承知の通り時々水の上へ浮んで呼吸をしますから、そんな時、よく人間の乘る船の通るのを見ることがありますよ。』

『船の上の人間はどんな樣子をしてゐて？』

『男は黒い恰好のいゝ服に帽子を冠つてゐるし、女は赤や青でピカ〳〵する綺麗な着物に美しい帽子を冠つてゐましたよ。』

『歌は歌はないの。』

『歌ひますともさ、先日も私の見た船の後尾で、水色の着物を着た天使のやうな女のひとが、それはそれは美しい聲を顫はせて、樂しさうな節の歌を歌つてゐました。

こゝまで聞くと末娘はもう人間が羨ましくてなりませんでした。そして一度でいゝから、自分も一と目人間の乘つて通る船を見たいと思ひました。

『鯨さん、私お前さんにお願ひがあるわ。』と末娘はおづ〳〵しながら云ひました。

『どんな事ですか。』と鯨は云ひました。
『あのね、今度私を連れて行つて下さらない？』
『何處へですか。』
『その人間の乘つて通る船の見られる處へさ。』
それを聞いた鯨は大層驚きました。
『そ、それはいけません。私がお嬢さんをお連れしようものなら、王樣からどんなお叱りを受けるか知れません。外の事なら何んでも肯きますが、そればかりは肯くことが出來ません。』
『でも、誰にも隱してそつと見せて下さればいゝでせう。私だつて誰にも話しませんわ。』
『隱したつて駄目です。あなたのお父樣やお母樣には、千里の先も見える眼を持つてゐますから、屹度見られてしまひます』
かう云はれて末娘は落膽して、そのことは思ひ切らねばならなくなりました。
『ぢア鯨さん、お前さんがたんと見て來て私に話して聞かせて下さいね。』
『えゝ、その位の事ならいくらでもいたします。正直者の鯨に斷られたので、人魚の末娘はすごすごと家に歸りました。

二

また或日のこと、末娘はいつものやうに歌を歌ひながら家を出てふわり〳〵と泳いで行きますと、遙か向うの方に、上からすつと、下つて來る白いものがありました。
『おや、妙なものが降りて來たわ。』と末娘は不思議に思つてそれに近づいて見ますと、岩蔭の海草が群がつてゐる間に、その白いものは沈んだやうであります。
『魚にしては見なれないし、それに形も大きいやうだが、はて、何んだらう。』と末娘は不思議に思つて、群がつてゐる海草をそつと押し分けて尙も近づいて見て、人魚の娘はあつと驚きの聲をあげてしまひま

した。

人魚の娘が驚くのも道理、それは白い着物を着た人間だつたのであります。末娘が恐る〳〵近づいて見ますと、それは美しいお嬢さんで、着物や首飾りなどの立派なことから察して見ると、話しに聞く王女ではないかと思ひました。

『まアお可哀さうに、もう命がなくなつてしまつたのか知ら。』

末娘は眼に涙を浮べながら、王女らしい人間の死骸をそつと抱いて見ました。すると、どうやら兩腕に感じるのはいくらかの溫味でした。

『あゝ、さう〳〵人間は溫かいうちはまだ命があると云ふ話だつた。』と人魚の娘は思ひ出して何んとかしてこれを助けて上げる方法はないものかと考へました。

『さうだわ、いくら考へたつて水の中ぢやとても助けられないわ。これはどうしても水の上へお上げしなければとても駄目。』と氣が付きましたので、早速水の上に浮び上らうとしましたが、ふと親達に堅く止められてゐることを思ひ出して、今迄一度だつて親達や姉さん達に叛いたことのない娘のことですから、思ひ迷つてしまふのでありました。けれども人間と云ふものは神樣の次に尊いものであると云ふことを心に深く感じてゐた末娘は、

『さうだ、尊い人間をお助けするのだから惡いことはあるまい。かうしてゐても氣に掛る。』ときつと決心しまして、すぐ樣大急ぎに人間を兩腕に抱へたまま、水の上へのぼつて行きました。

人魚の棲んでゐる所は幾千尋とも知れぬ深い〳〵海底でしたから、人魚がいくら一生懸命になつて浮び上つても可成の時間がかゝりました。でもやつとの思ひで水の上に浮び上つて見ますと、上には青い廣い空があつて、雲間からは太陽がきら〳〵とさしてゐました。もう夕方近くらしく波の上は太陽の光

に照らされて、まだ美しく輝いてゐるのでした。

始めて水の上の景色を見た人魚の娘は、その大きな美しい景色にうつとりと見惚れてしまひました。ふと氣がついて見ると、兩腕の中の王女さま——人魚の娘は王女さまに違ひないと思つたのです——はぐつたりしてゐました　そしてもうどうやら先刻感じた溫味もなくなつて、冷え切つてしまつたやうに思はれました。

『あゝ、どうしたらよいだらう。折角此處まで來たのに……水の上へ浮んだばかりでは仕方がない。どうかして陸へお上げしたいものだ。』と思つて見ますと、遙か向うに水の上に黑く續いて見えるのはどうやら話しに聞いた陸らしく思はれます。

『あそこまで泳いで行かう。』と獨り言を言つて、人魚の娘は王女を抱へたまゝ、又一生懸命に泳ぎ出しました。やがてその陸に着いて波打際の砂の上にやつと王女を横にした時は、もう周圍はとつぷりと暮

れて、空には美しい星がちら〳〵と輝き出しました。そして陸の高い所にもちら〳〵と光の見えるのは人間の住居らしく思はれました。人魚の娘に陸に這ひ上つて、枯草を集めて王女の上に掛け溫めて置いて、自分はすぐに海底へ沈んでゆきました。そして海の底から藥草を取つて來て、王女の口を開けて飲ませました。

『王女さま、王女さま、しつかりなさいませ。』と云つて人魚の娘は心を盡して介抱いたしましたが、王女が水に入つてからもう大分時間がたつてゐましたので、遂に生き返らずに、冷え切つた死骸はさながら人魚の肌のやうでした。

『私達なら冷たくつたつて何んでもないのだけれど。』と、人魚の娘は思ひました。

海の上は暗くなつて、波の音がざぶん、ざぶんと岸の砂を嚙んで居ました。人魚の娘は始めて淋しい、悲しい思ひをいたしました。この儘家へ歸つたら、屹度兩親さまや姉樣方にどんなに叱られるであらう。鯨の云ふやうにお父さんお母さんの眼が千里の先まで届くとしたら、今私がかうして陸へ來てゐるのも知つていらつしやるだらう。して見ると隱して歸つたとて駄目なこと、そのお刑はどんなひどいものだか解りアしない。

『あゝ、私はこの儘王女樣と一緒に死んでしまひたい。』と人魚の娘は思はず獨り言を言ひました。

するとその時、ふと眼の前に如何にも神々しい姿をした女の方が立つてゐるのを見ました。その頭の方からは御光がさしてゐましたので、人魚の娘は思はずその威光に打たれて、はつと頭を下げました。

『お前は本當に死にたいのか。』と透き通るやうな、そして力のある聲が頭の上から聞えました。

『はい……』と云つて人魚の娘は、情ないやら悲しいやらで、涙がこみ上げて來ました。

『さほど死にたいなら命は貰つてゆく。いゝかな、お前の命はもうお前のものではなくて私のものなのだよ。』さう神樣の聲がまたしました。人魚の娘はもう言葉も出なくなつてしまひました。すると神樣は一段と優しい聲で、

『併し、お前が人間を助けようとした必に賞でて、暫らくの間お前を人間の妻にしてやる。』

『えッ？』人魚は餘りの言葉に、嬉しさと驚きとが一緒になつて叫びました。

『今日から一年の間お前をこの死んだ王女の身替りとして人間にしてやる。然し堅く斷つて置くが、一年後の今日が來たら、海へ入らなければいけないよ。若しこれに叛くとお前の兩親や姉達は勿論のこと、お前と交際つた人間は皆災難を受けることになるからさう思つて居るがよい。』

人魚の娘は常々人間の暮しがして見たくてならなかつたものですから、

『はい〳〵、その事は堅くお守りいたします。』と云つてお受けいたしました。

ふと氣がついて見ると神樣はもう姿が見えません。おやと思つて自分の體を見ると、何時の間にか腰から下の魚の尾はなくなつて、白く優しい二本の足になつてゐるのでした。人魚の娘は嬉しさの餘り二三度小踊りしました。すると何んとなく向うの方ががや〳〵として人が大勢來る樣子です。人魚の娘は急に自分が裸でゐることが恥しくなつて、慌てゝ王女の着てゐた着物を脱がせて自分が着ました。そして王女の體を波の中へ押しやつて、

『王女さま、暫らくの間お妻をお借りいたします。あなた樣は何卒安らかに天國にいらしつて下さいませ。』と小聲で云ひながら、砂の上に倒れてゐました。

打ち返し、打ち返し來る波は、忽ち王女の體を元の海底へ持つて行つたことでせう。その代り王女と妻も顔も寸分違はぬ人魚の娘は、ぢつと砂の上に倒れて人の來るのを待つて居りました。（つゞく）

らふそく魚

小島政二郎

皆さん、今日は一つ、私がお祖父さんから聞いたお話をいたしませう。

江戸時代のことださうです。その頃、或山の中に、蠟燭を知らない村がありました。その村の名主さまが、或年江戸見物に來て、蠟燭に灯の附いてゐるのを見てビックリしました。

『アーレまあ珍らしい。流石お江戸は將軍さまのお膝下だけあつて、あゝいふ重寶なものがある。高いものかしら。』

さう考へたので、恐々

『お商人さん、その灯の附いてゐるものは高いもんかね。』

『いえ、この方は一文に三本でございますよ。』

『そりや又安いことだ。錦繪や淺草海苔の土産は雖

も彼も持つて歸るから村でも珍らしがるまい。私はこれを一つ土産に買つて歸らう。さぞみんなは驚いて喜ぶだらう。――では、百本程賣つて下さい。』

かういふ譯で、名主さまは、蠟燭をどつさり土産にして歸つて來ました。それを五六本づつ紙に包んで、上に『らふそく』と書いて村の人達に配りました。しかし、その時、わざと使ひ道を敎へませんでした。

ところが、貰つた方では大騒でした。

『らふそく？　らふそくとは一體何だらう。なあ、右隣の婆さんよ。お主知つてゐるか。』

『左隣の爺さんよ。お主の知らないものを何で私が知るものかよ。お主の知らないものを私が知つてゐたら、お主に恥をかゝすやうなものだからな。――時に、今度は右隣の婆さんよ。お主は知つてゐるか。』

『左隣の婆さんか。なんで私のやうな物知りがそんなものを知るもんかな。そんなものを知つてゐる位なら、とうの昔に落ちぶれて博士になつてゐただらうよ。――時に、今度は右隣の爺さんよ。お主知つてゐるか。』

『うんにや、知らぬ。』

かう云つた工合に、隣から隣へと聞き合せて見ましたが、まだ知つてゐるといふ者に出逢ひませんでした。そのうちに、月一回づつある村の寄り合ひが、嘉兵衞爺さんの家で開かれることになりました。

その席上でも

『お主知つてゐるか。』

『うんにや、知らぬ。』と、『らふそく』の話で持ちきりでした。

すると、中から作十といふ男が

『なあ、嘉兵衞さん。』と、この家の主で、今年九十九になる、村一番の物知りに話しかけました。『一體、らふそくちうものはなんに使ふもんかね。』

『何聞くかと思つたら、そのことか。あれをお主は

知らぬのか。あれを知らなければ死んでしまつた方がいゝぞ。』

『うんにや、知らぬのは私ばかりではないから死ぬには當るまい。村内の者は一人も知らぬよ。』

『そんなら、みんな死んでしまへさ。』

『そんなこと云ふものでない。知つてゐるなら教へて下され。』

『知つてゐるなら、とは失禮な。いつか教へてやる時もあらう。今は默つてゐなされ。』

『そんな意地惡をするものでない。聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥といふことがある。私は恥を忍んで聞いてゐるのではないか。』

『高慢なことは云はぬものだ。まあ、默つて引ッ込んでゐなされ。』

『いんにや、引ッ込まぬ。教へてくれるまでは引ッ込まぬ。』

すると、芋作といふ年寄が

『よせ、作十。年寄の者に逆ふでない。まあ、嘉兵衛どん、お主も歳甲斐のない若い者と口喧嘩なんかしてはいけない。』と留める傍から、杢右衛門といふ年寄が

『實は嘉兵衛どん。私もこの歳し、面目ないが、やつばりらふそくといふものなんになるのか知らぬのだ。』

『なんだ、杢右衛門どん、お前さんも知らぬのかい。それはお前さん食べ物だがね。』

もく はあ、食べ物といふと何だね？』

『これは魚でがす。』

『魚？』

『らふそく魚と云つて、江戸の人は日に三本四本位食べます。』

さく十『けれども、魚にしては鱗もなんにもない』

『魚と云へば鱗があるやうに思つてゐるのは大間違だ。魚にだつて鱗のないものもあるさ。』

『けれども、どうも魚のやうでない。』

『まあ默つてゐろ。これ、おかん、らふそく魚を持つて來て御覽。』

『これがお前さま、魚かなう？ えかく綺麗な魚があるもんだな。この尖つてゐるのは何でがす？』

『それは嘴だ。』

『あれ、こゝに穴がある。』

『そりやアお臍だ。』

『どうして食べるのかね？』

『さう、煮ても燒いても食べられるが、今夜のやうな寒い日には味噌汁が一番うまからう。』

『では、一つ拵てみんなに食べさせてくれまいか。』

『あゝ、よいとも。これ、おかん。味噌汁を拵へてその中へこのらふそく魚を折つて入れて熱いところを皆さんによそつて上げておくれ。』

やがて、らふそく魚の味噌汁が出來上りました。

『さあ、皆さん。遠慮なく食べて下さい。』

『有り難うがす。ぢやアまあ御馳走になります。何だか江戸の人の食べるものだと思ふと 食べない前から喉がグビ／＼鳴つて唾が溜まつて來る。』

『何だか嘉兵衛どん、ピカ／＼光つた玉が浮いてゐますぞ。』

『それは魚の油だ。』

『どんなものだか、私が先に吸つて見よう。――おや、これはをかしな匂がする。――飲み込んだら、なんだか喉がヒリ〳〵する。』
『行儀の悪い。ものを食べる時は默つてゐさつしやい。』
『これがハア旨いものかな。――して見ると、旨いものと云ふのは、まづいものだなあ。』
そんなことを作十が云つてゐるかと思ふと、こつちの方では、李右衛門が
『私のお椀の中にらふそく魚が二つ這入つてゐるが、えかく細くなつて來た。』
『ハテ痩せたかな。』
『これは駄目だ。』
『どうした？　味が變つたか。』
『みんな齒にくつついてしまつた。成程嘉兵衛どん、作十が云ふ通り、何だか變な匂がする。お〻心持が惡くなつて來た。成程旨いものはまづい物に違ひない。これは駄目だ。江戸の人の食べるものは田舍者の口に合はない。――あ〻胸がムカ〳〵して來た。』
あつちでもこつちでも氣持の惡い人が出來ました。すると、その時、表で
『今晩は。』といふ聲が聞えました。
李右衛門が
『はい、お出でなさいまし。』と迎へに出て、『やあ、名主さまがござらつしやつた。――丁度い〻ところへお出でなさいました。實はあなたから江戸土産にいたゞいたらふそくを味噌汁にして今みんなで食べてゐるところでがす。あなたも一杯いかゞでがす。』
『蠟燭を味噌汁に？　誰が一體そんなことを指圖したのです。』
『嘉兵衛どんが教へたでがす。』
『あれまあ、嘉兵衛どん。歳甲斐もなく馬鹿なことを教へるものでない。――みんな、そんなものを食べてはならない。食べ物ではないぞ。』

みな〳〵『えッ、食べ物でない。』
さく十『それ見なさい、嘉兵衛爺、人のことをさんざん叱つて、物知顔をして置きながら、食べ物でもないものを食べさせて……。道理で、心持が惡くなつたのだ。――それはさうと、名主さま、これは一體なんにするものでがす？』
『これは夜になると灯をともすものだ。』
『ヒヤアそりやア大變だ。灯をともすものを食べて、お腹の中を火傷したらどうしよう。煙草でものんで火と火とかち合つたらお腹の中で火事が始まるだらう。どうしたらよからう。』
『仕方がない、水へ這入らう。』
『それがい〻。首へ繩を附けて井戸へぶら下るかな。』
『馬鹿なことを云ふな。井戸なんかへ這入れるものか。』
『ちやァ鎭守樣の池へ行かう。』
『成程、それがい〻。』
そこで、みんなは總立ちになつて、鎭守の森をさして駈けつけました。
さうして、そこの池へボカボカ飛び込んで、首だけ出して
『あ〻〳〵、ひどい物を食べさせられて、大變な目に逢つたものだ。しかし、かうして水に漬つてゐたら、さつき食べた蠟燭の火も消えたらう。』

（をはり）

孫悟空と牛魔王（つゞき）

楠山正雄

一

牛魔王はそんなことは知りませんからさんざん龍王の御馳走になつて、いよ〳〵暇乞をして歸らうとして門を出ますと、辟水金睛獸が見えません。龍王も驚いて、家來たち殘らずを集めて、

『牛大王の金睛獸を誰が盗んで行つたらう。お前たちは見張をしてゐないといふ法はないではないか。』

と叱りました。みんなはおそるおそる膝をついて、

『まことに申しわけもございません。しかしどうもわたくしどもの仲間に大それた盗みをするものはない筈です。もう殘らず御宴曽の席へお給仕に出てゐたので、一向表に氣がつきませんでした。』

龍王も首を傾げながら、

『子供たちの中に、そんないたづらをするものはない筈だし、一體どこの何者が入りこんで來たものか全く油斷はならないぞ。』と、いひました。

すると龍王の孫たちが、

『おぢいさま、分りましたよ。さつき見なれない變な蟹がお座敷の中を這つてゐたのを、僕たちが見つけて、追つかけまはしたでせう。どうもあいつが怪しいと思つたのだ。』

牛魔王は默つて話を聞いてゐましたが、この時はたと膝を打つて、

『なるほどそれだ。先刻わたしのところへお迎へのあつた時、昔ちよつと知つてゐた孫悟空といふやつが、久しぶりで出しぬけにやつて來て、「こんど唐の三藏法師の供をして天竺へ經文を取りに行く途中だが、火焰山の火に道を塞がれて通ることが出來ない、どうか芭蕉扇を貸してくれ」といひますから、もとから恨みのあるやつだし、うつかり貸してなくされても困ると思つて貸さないといふと、おこつて打つてかゝつて來ましたから、相手になつてゐる中に、お使が來たので勝負の途中ですてゝやつて來たのです。しかし元來がなか〳〵惡ごすい猿のことだから、いかさま蟹に化けてこちらの樣子をさぐりに來たものでせう。そして歸りがけに金睛獸を盗んで家内のところへわたしの姿に化けて行つて、今頃はもう芭蕉扇をかたり取つてゐるかも知れない。』

かういふとみんなは、今更のやうに顔に見合せて、

『すると孫悟空と申しますと、昔天宮で大へんな亂暴を働いて追ひ出されたといふ神變不思議なやつではありませんか。』とたづねました。

『うんその孫悟空だ。』と牛魔王はいひました。

『やれ〳〵恐しいやつが入りこんだ來たものだ。』とみんなは青くなりました。

龍王はその時牛魔王に、

『それでは早速奥樣のところへお歸りにならなければなりますまいが、乘物がなくなつたので困りましたね。どうしたものでせう。』と心配さうにたづねますと、牛魔王は笑つて、

『いや、その御心配には及びません。それではさやうなら。』といふかと思ふと、水を左右に切つて道をあけて、忽ち碧波潭の外へ躍り出ますと、黄色い雲

を呼んで飛び乘つて、見るまに翠雲山芭蕉洞へ歸つて來ました。

洞の門まで來ると、中では羅刹女が胸を押へて、痛い〳〵と大聲で泣き叫びながら、ころげまはつてゐました。門の傍には辟水金睛獸がのそ〳〵草をたべてゐます。牛魔王は大聲に、

『どうだ。孫悟空は逃げてしまつたか。』とたづねました。

すると腰元たちがさもうれしさうに、みんな走り出て來て、牛魔王を出迎へながら、

『大王樣のお歸りでございます。』と口々に喚きました。すると奥から羅刹女が髪を振り亂して、夜叉のやうなこはい目を光らせながら駈け出して來て。頭から嚙みつくやうに牛魔王に向つていひました。

『この碌でもないぢいさんは、どこでのそ〳〵してゐるのだ。ごらんなさい。お前さんの油斷をねらつて、あの惡猿めが金睛獸を盜んで、お前さんに化けてやつて來て、うま〳〵寶物をかたり取つて行つたではないか。』

牛魔王は齒を食ひしばつてさもくやしさうに、

『畜生、やはりしてやられたか。よし、すぐ行つて取り返して來てやる。早く得物を持つて來い』

そこで腰元たちが羅刹女の使ふ寶劍を二振持つて來て、牛魔王にわたしました。牛魔王は宴會に着て行つた長い袍を脫ぎすてゝ、身輕な姿になつて、兩方の手に寶劍をつかんで、その儘芭蕉洞を飛び出すと、まつしぐらに火焰山をさして駈けて行きました。

二

しばらく行くと、途中で、孫悟空が大きくなるだけ大きくなつて、一丈二尺までも伸びた芭蕉扇を持てゐましてそのくせ大得意に、にこにこしながら、えんやら〳〵肩に擔いで火焰山に向つて行くところを見つけました。牛魔王は、

『おや〳〵猿め、芭蕉扇を伸ばすことを誰に敎はつたか知らん。』と少し驚きながら、

『あの樣子ではいきなり扇を返せといつたところで素直に返さないには極つてゐるし、うつかりして一燗ぎに燗がれて十萬八千里吹きとばされてもつまらないで行く後からだしぬけに聲をかけて、

『もし〳〵兄き、お待ちなさい、わたしが來ましたよ。』と八戒そつくりな聲色でいひました。

どうもとかく得意になつてゐる時は、足もとをねらはれても分からないもので、さすがの悟空も芭蕉扇が手に入つたうれしまぎれに、僞物の八戒についつい瞞かされてしまひました。

ない。よし〳〵、こつちにも工夫があるぞ。』と口の中でうなづきながら、どうするかと思ふと、體を一搖りゆすつて、見る〳〵耳の長い、嘴の尖つた猪八戒の姿になりました。そして悟空がうんすら〳〵擔

『やあ、八戒の馬鹿、何だつてやつて來たのだい。』

といひました。すると牛魔王の偽八戒は、

『なあにあんまり兄きの歸りがおそいから、お師匠さまが御心配なすつて、どうもさすがの孫悟空も牛魔王にはかなはないのではないか。お前行つて、加勢してやつて來ておくれ、とおつしやつたのさ。』

すると悟空はから〳〵笑つて、

『まあ心配しなさんな。お前さんの加勢を賴むほどでもないのさ。』といひました。

すると偽八戒はわざと不思議さうに、

『兄き、そのお前さんのうんすら〳〵かついで行く大きなものは何だい。』と、たづねました。

すると悟空はますます〳〵得意になつて、

『お前さん、知らないか。これこそ芭蕉扇よ。火焔山の火を消す寶物よ。』

と、いひました。

偽八戒はいよ〳〵驚いたやうに、

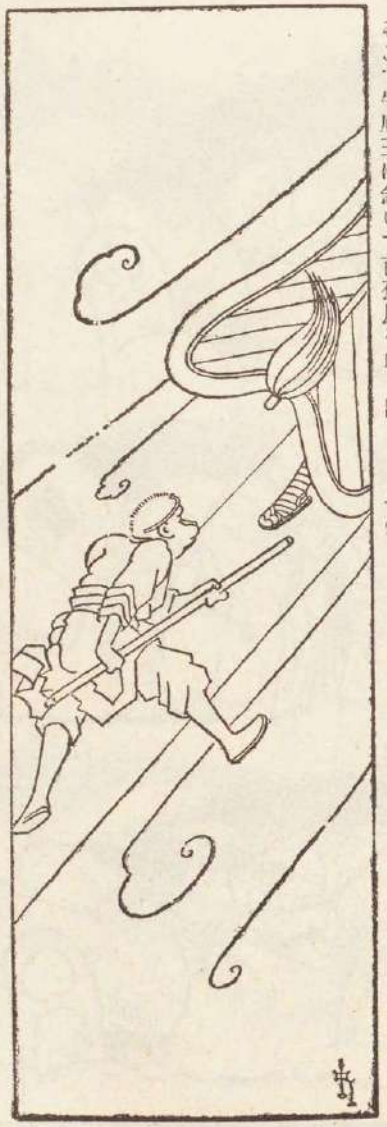
『はてね、よくそれが手に入つたな。』といひました。

そこで孫悟空は芭蕉扇を取りに行つて、牛魔王と戰つた話から、牛魔王に化けて羅刹女を瞞して寶物を取つた始終の話をして聞かせました。すると牛魔王の偽八戒は、感心したやうな顏をして、

『さすがは兄きだ。どうしてわれ〳〵の及ばない當だよ。』とおだてるやうにいつて、『さあ、それではせめてそれを持つだけでも手傳つて上げよう。隨分大きくて、重さうだ。』といひながら、悟空の肩の芭蕉扇に手をかけました。

悟空もうつかり釣りこまれて、

『うんさうか、そいつは御苦勞だな。』といひながら芭蕉扇をわたしました。偽八戒の牛魔王は、心の中で「しめた。」と思ひながら、寶を受取ると早速呪文を唱へました。一丈二尺の大扇は見る〳〵銀杏の葉っぱ位に縮まつてしまひました。牛魔王はそれを口の中に入れると一緒にはんたうの姿を現して、



『惡猿、おれ樣を誰だと思ふ。』とわめきました。

悟空は思はず一聲『しまつた。』と叫んで、いきなり鐵棒を持つて打つてかゝりました。

そこで牛魔王は急いで芭蕉扇を取り出して、一煽ぎ煽ぎました。

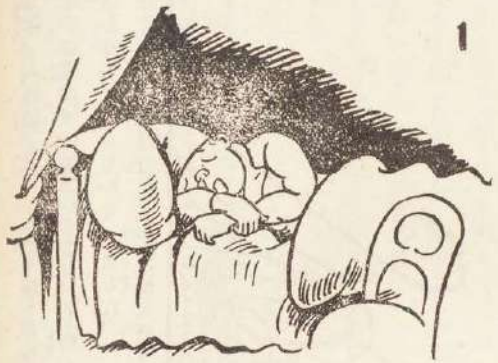
ところが悟空はこの前羅刹女に吹き飛ばされた時靈吉菩薩から定風丹を一粒頂いて飲んでゐましたから、いくら芭蕉扇で煽がれても金輪奈落から生えたやうにびくともしませんでした。牛魔王はよけい慌てゝ、二度も三度もつゞけさまに煽ぎましたが、一向利き目がありません。心の中でいよ〳〵驚きながら、寶物をまた口の中へしまひました。そして二振の劍を兩方の手にびゆう〳〵振りまはしながら負けずに斬つてかゝりました。

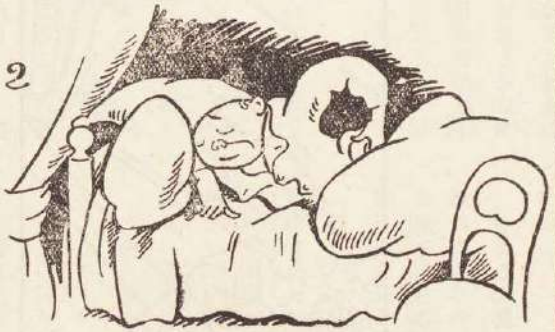
さてこの勝負がどうつくでせう。

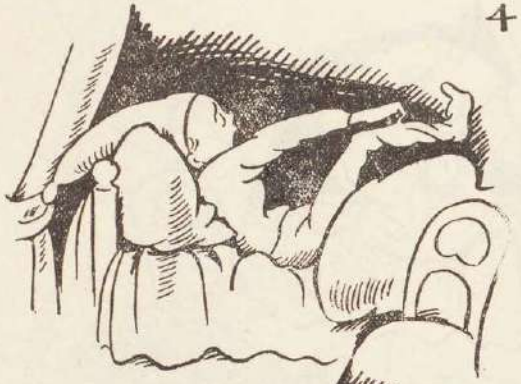
（次號をお待ち下さい）

ポンヒロヒルム

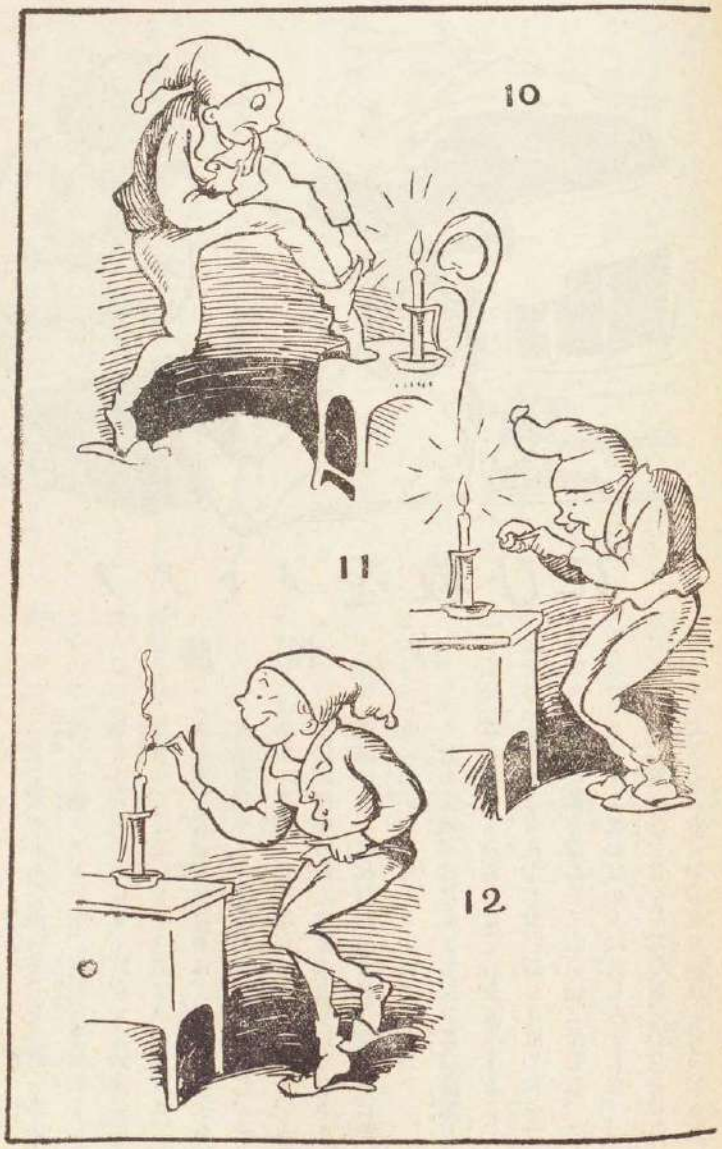
蚤捕りの巻

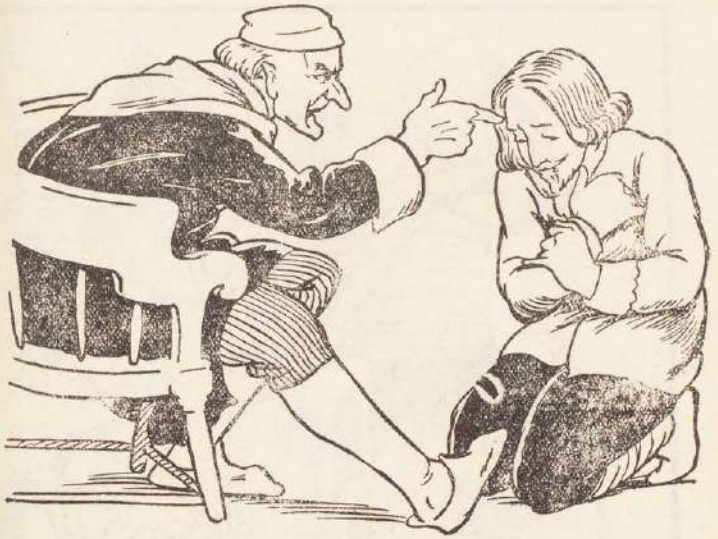






8


10
11
12



ファトメを救ひに

藤森淳三

アラビアのある港街で、その町一番の美しい娘ファトメが、突然行方知れずになりました。それは、彼女が十六歳の誕生日のことでした。ファトメの兄ムスタフがその日を祝ふために、大せい妹のお友達を招いて出來るだけ御馳走をし、そのあとで前の島へ漕いで行つたとき、みんなが夢中で遊んでゐるうちに、たぶん海賊にでも攫はれたのでせう。ふいに彼女の姿が見えなくなつたのでした。

忽ち大騒ぎになりました。喜びは悲しみに變つてみんなはそれをどうすることも出來ませんでした。殊に年取つた彼女の父の歎きはおそろしいほどでした。ムスタフも死ぬばかりに悲しみました。

『可愛い妹をなくしたのは、わたしの罪だ。わたしはいつたいどうしたらいゝだ

らう。』兄は自分自身を責めました。

『お前は仕方のない馬鹿だ。ファトメはわたしにとつてはまたとない老後の慰めなのだ。それを、お前がよけいなおせつかいをしたばつかりに、なくしてしまつたのだ。よいか、わしはお前を呪ふぞ、呪つてやる。然しファトメを再びつれて來れば別だ。その時はお前をゆるしてやらう。』

父のこの恐ろしい呪の言葉に、哀れな兄ムスタフの驚きと、悲しみはどれほど深くなつたことでせう。彼はどうかして、きつと妹を探し出さねばならぬと決心しました。

ムスタフは子供のとき、海賊たちが奴隷を賣買する話を聞いたことを思ひ出しました。それによると何んでも彼等はバルゾーラとかいふ町で市を開くとのことでした。彼はそこへでも行けばわかるだらうと思ひました。しかしその町が何處にあるのか知りません。ただ西　方といふだけで、大へん遠いところだと聞いてゐました。まつたく雲をつかむやうな話ですが、仕方がありません。彼は出發することにしました。

ムスタフが旅の用意を整へて父の前へ出ますと、父は幾分か心を和げてゐました。

『ではお父さん、探し出せるかどうかわかりませんが、ともかく一生懸命探してみます。どうぞ御機嫌よくいらして下さい。』

と弟が申しますと、さすがに父も目に涙を浮べて、『うむ、さうか。そんならこれを旅費の足しにしたらよからう。』

と云つて、金貨の入つた袋を出してくれました。

ムスタフは陸路を西へと進みました。西へ西へと進むうちにいつかはバルゾーラへ着くだらうといふ考へなのです。實際心細い話ですが、それでも馬はよいのが見つかりましたし、それに荷物と云つては何一つありませんから、彼の旅はどん〳〵捗どりま

した。

一日、二日、三日と急しい旅をつづけて四日目の夕方、彼がひとり寂しい街道を馬を進めて行きますと、突然行手にあたつて三人の男があらはれました。彼は、突嗟の間に、三人の男はチャンと武裝をしてゐる頑丈な男だといふことや、また生命よりも金や馬に目をつけてゐるのだといふことを見てとりましたので、

『わたしは決して抵抗はしない。どうでも君たちの勝手にしてくれたまへ。』

と叫びました。三人の者は素早く馬の背から飛下りると、ムスタフの足をしつかり馬の腹に結びつけました。そして、やがて二人は彼を兩脇から挿み、一人は馬の手綱をとり、何も口は利かないで一散に馬を飛ばすのでした。

彼はまつたく悄氣込んでしまひました。父の呪が今こそ彼の身にほんとうになつてあらはれたのです。

からだの自由を奪はれた上に、三人の屈强な男に圍まれてゐるのですもの。たゞ生命だけあつたつて、どうしてファトメを救ひ出せませう。

獸つてムスタフを引つたてた强盜の群は、一時間ばかり歩いたと思ふと、一つの小さい谷に下りました。谷には十五六か、二十位もテントが張られてあります。テントの柱には駱駝や、見事な馬などがつながれてゐます。一つのテントからは立琴の音、そしてそれに合はせて唄ふ二人の男の唄聲とが聞えて來ます。

よほど大せいの强盜がゐるらしいのです。ムスタフは今はもう觀念して、彼等の言葉通りに振舞ひました。

『馬から下りろ！』

縛り目を解くと、一人は目配せで命じました。

彼が馬から下りると、一番大きい、綺麗に飾り立てたテントの中へつれこまれました。金絲で縫取のしてある布團、美しい織物の絨氈、黄金作りの香爐と云つた立派な品々は、若しこれが普通の家の客間にでも置いてあるのだつたら、その家が有福に暮してゐる證據にもなるわけですが、此處ではたゞ勝手に何處からか分捕つて來たのだなと思はせるだけでした。

ふいにテントの入口の幕が上つて、一人の男が入つて來ました。その男は若くて美しく、しかもからたも大きくて、その立派なことは、ペルシアの皇子たと云つても知らぬ人はほんとうにする位でした。見事な飾りのしてある短劍と、ピカ〳〵してゐる長劍のほかには、これと云つて何一つ贅澤な身の飾りは附けてゐない、極くさつぱりした扮裝ですが、その鋭い、しつかりした目付や、すべての容子は威かつくあつても、決して猛々しいところはありませんでした。

三人の男は、すぐムスタフを頭領の前に引出しました。頭領は鷹揚に布團の上に腰を据ゑてゐます。

『捕へて來いとおつしやつた奴をつれてまゐりました。』

頭領はじつと彼の顏を眺めてゐましたが、

『ズリアイカの總督。お前の心にたづねたら、なぜこのオルバーザンの前に引出されたかわかるだらうな。』と、あざ笑ひながら云ひました。

『おゝ頭領！一哀れなムスタフは悶えて申しました

『あなたは思ひ違ひをしてらつしやいます。わたしはまことに不幸な者です。あなたのおつしやるズリアイカとかの總督なんかではありません。』

みんなの者は彼の言葉に一寸驚いた風でしたが、頭領は冷やかに云ひました。

『嘘をついたつて駄目だ。お前をよく覺えてゐる證人を出さう。さうしたらお前も諦めがつかうといふものだ。おい、ズーライマをつれて來い！』

その聲に應じて、一人の婆さんが引出されました。

『ズーライマ、これはズリアイカの總督かい？』
頭領はたづねました。
『はい／＼頭領樣！　それに違ひはございませぬ。この男はズリアイカの總督に違ひございませぬ。』
婆さんの返答に、頭領は怒り聲を振上げて云ひまし

た。
『どうだ、嘘つき奴！　嘘をついて通ると思ふか！　え、忌々しい奴だ、どうしてくれよう……然しお前なんかを斬るのは刀の汚れだ。よし明日太陽が昇つたらお前を馬の尻尾に結びつけて、太陽がズリアイカの岡に沈むまで野を駈廻つてやらう。はッはッは』
可哀相にムスタフは、すつかり絶望してしまひました。
『お父さんがわたしを呪つたせいだ。お父さんがわたしを呪つてこんなにしたんだ。あゝ、わたしは妹を救ひ出すわけにはいかない。』
彼はその場に泣き崩れました。
『お前がいくら空々しいことを云つたつて駄目だよ。』後手に彼を縛り上げながら盜賊の一人が囁きました。『さつさとテントから出ろ。見ろ、頭領がちつと唇を嚙んで、刀を見つめておゐでだ。さあ一晩でも長生きがしたいなら、ぐづ／＼しないで外へ出ろよ。』

盜賊どもが今にも彼をテントの外につれ出さうとしてゐるとき、他の三人の一組が一人の捕虜を引つたてて來ました。
『捕まへて來いとおつしやつた總督をつれてまゐりました。』
さう云つて、彼等は捕虜を頭領の前に引出しました。
捕虜がそこへ引出される途端、ムスタフはちらりとその男を見てまつたく呆氣にとられてしまひました。瓜二つとはこんな時つかふ言葉なのでせう。若しこの男が今少し色が白く、その黑い髯がなかつたら、どつちが、どつちか區別のしようもなかつたでせう。
さすがの頭領もこれには驚きました。
『どつちが本物なんだ？』
二人を見比べながら彼は唸るやうに云ひました。

そして、しばらくはぢつと恐ろしい目付で彼を見つめてをりましたが、やがて總督をテントの外へ引出すやうに目で部下に合圖をしました。

總督が入口の幕の蔭に姿を消してしまふと、頭領はムスタフのそばへ歩みよつて短劍で綱を切りはなし、それから、布團の上に坐るやうに目配せしました。

『どうも大へん失禮しました。彼は俄かに丁寧な口調で挨拶して、『あのいけない奴と間違へてたんです。然し、彼奴をやつつけようと思つてゐた時、君が遇然私の仲間の手に落ちたと云ふのも、何か神樣の特別のお計ひなんでせう。どうかわるく思はないで下さい。』

『いや間違ひとわかればそれで結構です。けれども、どうかわたしを一刻も早く旅立たして下さい。わたしは急ぎのからだなんですから。』

『どうしてまた？　何んの御用ですッ？』

そこでムスタフが、前からのことを殘らず話しますと、

『さうですか、そんなら今夜は私の處でお宿りになつたがいいでせう。馬だつてそんなにのべつに歩かせられては堪りませんよ。その代り明日はバルゾーラへ行く道を敎へて上げませう。』

何が幸福になるか、不幸になるか、まつたくわからないものです。彼はどんなに喜んだでせう。頭領はバルゾーラへ行く道を敎へてやると云ふのですもの。彼はもう妹を探しあてたやうに喜びました。

ムスタフは頭領の親切な言葉に從つて、その晩は大へん手厚くもてなされて、盜賊のテントに安らかな夢を結びました。

翌くる朝、目を覺ますとすぐ、彼は頭領と二人で平和な谷間のテントを後にして、森の中を拔けてゐる廣い路を進みました。

『昨日捕へたズリアイカの總督つて奴はですね、

彼奴の領地内ではわれ〳〵を大目に見よう。決して捕まへたりひどい目に會はしたりはしないと約束してあつたんです。それだのに、彼奴、二三週間前に仲間の一人を捕へて恐ろしい拷問にかけた揚句、たうとう殺してしまつたんです。癪に障りましてね、長い間つけねらつてゐたんですがまあ〳〵して捕へましたよ。今日が日にも片付けちまはうかと思つてますがね。』

賊の頭領のオルバーザンは元氣に物語るのでした。しかし、ムスタフはバルゾーラへ行ける嬉しさでいつぱいになつてゐて、總督のことなぞ、ろく〳〵聞いてもゐませんでした。

二人はずゐぶん馳ました。やがて、オルバーザンは馬を止めて、ムスタフにバルゾー

ラへの道をくはしく教へて、さてお別れの握手をして云ひますには、

『ムスタフ君、君はふしぎな縁からこの盗賊オルバーザンのお客さまになりましたね。私は、君が私達の谷間のことを云ひ觸らして貰ひたくありません。が、それはさうとして君はとんだ災難でひどい目に會つたのだから、私はその埋合せをして上げなくちあならない。さあ、記念にこの短刀を納めてくれたまへ。若し何か救ひが必要な場合には、この短刀をしるしに使ひの者をよこして下さい。すぐ飛んで行つて救けて上げませう。それからこれは旅費の足しにして下さい。』

そしてオルバーザンは財布を取出しました。

『有難うございます。オルバーザンの頭領。あなたは立派なお心掛けの方です。わたしは喜んでこの短刀を頂きませう。然し財布の方はどうかお藏ひ下さい。わたしは相當旅費を持つてゐますから。』

けれどもオルバーザンは彼の言葉は耳にも入れず今一度輕く手を握り、財布は地面の上に落したまゝ風のやうに森の中へ消えて行きました。ムスタフは追驅けたつてとても駄目と考へて、馬から下りて財布を拾ひ上げました。その財布には金貨がいつぱいに入つてゐます。彼はオルバーザンの氣前のいゝのにすつかり感心してしまひました。

彼は一寸目を閉ぢて神樣に感謝のお祈りをすると馬に一鞭くれて元氣にバルゾーラさして進みました。

七日目の午頃、彼はバルゾーラの町の門を潜りました。とある宿屋の前で馬を乘り棄てると早速、宿の主人に尋ねました。

『この町で開かれるといふ奴隷市は何日からでせうか。』

『旦那少し遲うございましたよ。一昨日お終ひになつちまひました。』

この返事に驚いてゐる彼に向つて、主人は更に話

しつづけました。

『いや、まつたく惜しいことでした。旦那はすつかり儲け損ひましたよ。一番おしまひの日、さうですね、もうそろ〳〵市を閉ぢようつて頃に一人のベラボウに綺麗な奴隷が着いたんですよ。何しろ途方もない代物なので、みなわれ先きに買受けようつて騒いだんだが、結局他の奴はとても手が出ない位の素敵な値段である人の手に落ちたんですがね、惜しいことをしましたよ。

もう二日早ければね。』

『一體その美しい奴隷といふのは何歳位でした？そして顏は？　丈は？』

そして宿屋の主人がいろ〳〵くはしく說明するのを聞いて、ムスタフはたしかにその奴隷は妹のファトメに違ひないと見當をつけました彼は轟く胸を押沈め、何氣ない體で奴隷を買ひとつた人のことをたづねました。

『お大盡ですかね、そりあね、このバルゾーラから

四十時間位で行ける處に住んでゐるチイウリつて人なんですよ。何んでも以前には大帝陛下に召出されて、カブダンの總督（水師提督）つてえらいお役をしたと云ひますから、まあ御身分のあらつしやる方なわけでござんせう。然しもうだいぶ年も取つたしされるので、今では唸るほど貯つたお金で樂隱居つて次第でさあ。』

何も知らぬ宿屋の主人は陽氣な聲で答へました。

『たつた一日か、二日位の違ひだつたんだ。これからすぐ馬で追馳けてやらうか？』

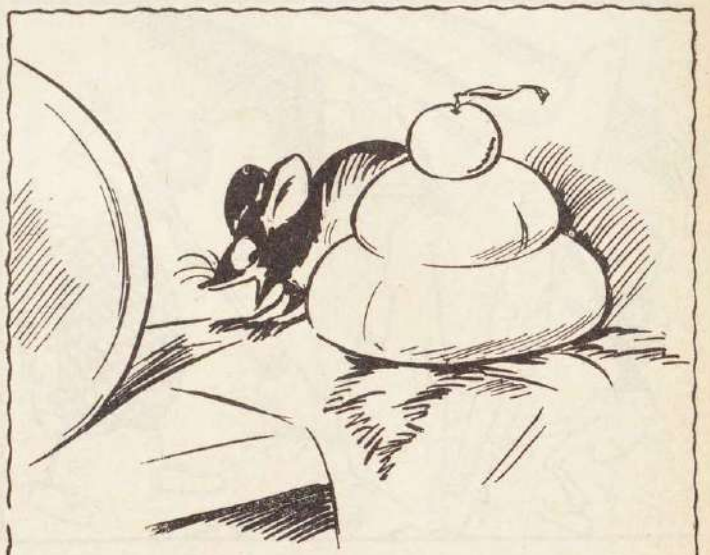
さう考へてムスタフは慌てて立上らうとしたが、しかしとても取戻すなんて出來るわけのものでありません。彼はまた考へ直しました。

うまい思案が浮びました。といふのは外でもありません。すんでのことに生命までなくしかけた、ズリアイカの總督と見違へられたあの一件から思ひついて、ズリアイカの總督になり濟してチイウリの處を訪ね、可哀相な妹を救ひ出さうといふのです。さう考へつくと彼は早速に、二人の下僕とそれから馬とを雇ひました。

さてムスタフは立派な服裝をし、下僕にもちやんとした身裝をさせて、バルゾーラを出て五日目、チイウリの城間近にまゐりました。城は見晴しのよい平野にありました。城の周りには見上げるばかりの土塀が廻つてゐて、建物はほんの少し壁の上に顏を出してゐるだけでした。

ムスタフは髮の毛と髯とを黑く染め、それにある植物の汁でもつて顏を塗つたのです。それでもうすつかり、ズリアイカの總督と同じ褐色の皮膚になりおほせたのでした。支度が出來上ると、彼は下僕の一人に、

『お前はこれからチイウリの城へ行つて、ズリアイカ總督ですが、一晩宿めて頂くわけにはまゐりませんか、と賴んで來い。』と云ひつけました。（つゞく）



ねずみ（推薦）

大場繪津

チヨロチヨロねずみが
チヨイとでてた
お棚のかげから
チヨイと見てた
おひげをうごかし
チヨイとひいた
おたなのおそなへ
チヨイとひいた

水の呑めない蟻（推薦）

伊藤一雅

夏になりましたので、蟻のお家ではそろ〳〵外に出て働く用意にとりかゝりました。

ところがお父さんは大變ななまけ者で、少しも働いて呉れません。

『さあお父さん、今日はお掃除をしますから、手傳つて下さい。』

お母さんは、さう云ひましたが、お父さんは動かうともしませんでした。で、仕方がありませんので、お母さんは朝から手拭を被つて、お部屋お部屋を片附けました。食べ物をしまつて置くお部屋には

去年の夏に一生懸命になつてためた食べ物が、まだ殘つて居りました。お菓子のかけらや、蜻蛉の尻尾などがあちらの隅、こちらの隅に、轉がつてゐました。

そして、表へ出る路も大變にいたんでゐましたので、蟻の子供はお母さんにお手傳ひして、汗だくだくになつて、夕方近くにやつとなほすことが出來ました。

『今日は大變御苦勞だつたね。お蔭でお家の中が見違へるほどすつきりしたよ。明日から又しつかり働いて貰はなきやならんね。』

蟻のお母さんは夕飯の時に、蟻の子供に向つてかう云ひました。

蟻の子供は御飯をはゝばりながら、返事をするかはりに、合點々々をしました。

あくる日は大變にいゝお天氣でした。蟻の子供は朝早くからお辨當を持つて、働きに出かけました。

廣々とした、田舍の通へ出た蟻の子供は、これからどちらの方へ行かうかと、思案をしました。

『さて、どつちの方へ行つたらいゝかな。久し振りでひろ〳〵とした所へ出て來ると、まるで氣がぼうつとなつてしまふな。』

蟻の子供はひとりごとを云ひました。

『まあ今日はぐる〳〵と、そこらを見て來ようよ。一日位遊んだつて、お父さんもお母さんも、何とも云やすまい。』

さう思ひましたが、それでも何も探せなかつたら、お父さんがどんなにしかるだらうかと思ふと、怖くなつて來るのでした。

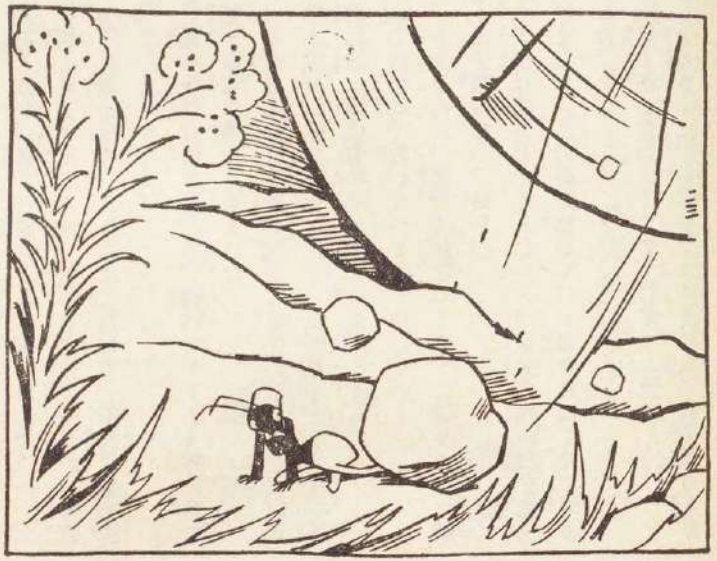
『大丈夫かな。大丈夫かな。』

蟻の子供はさうつぶやいて、すん〳〵歩いて行きました。

時々、馬や牛の糞につき突つたり、水溜に出喰はしてまごついたりして、一日中遊び歩いて、夕方に

お家へ歸つて來ました。
『お母さん只今。隨分草臥れました。お母さん、今日はね、方々歩き廻つたんですが、何も見つかりませんでしたよ。一心になつて探したんですが。』
蟻の子供は、お母さんにさう云ひました。
『さうとも〳〵、さうたやすくあるもんぢやないよ。まあ、出來るだけ一生懸命になつて、働いてお呉れ。』
と、お母さんは云つて、せつせと夕飯の支度をしてゐました。
『さあ、明日はどつちへ行つて見ようかなあ。さうだ〳〵、明日は本氣になつて働かなくちや、お母さんに氣の毒だ。明日こそうんと働いて來よう。』
御飯がすんで直く寢床に這入つた蟻の子供は、こんなひとりごとを云つて居りました。
あくる日も、また大變にいゝお天氣でした。
今日こそはと元氣よく、蟻の子供は朝早くから家

を出て行きました。けれども何もいゝ物を持たないで、夕方にしよんぼり歸つて來ました。
それから毎日々々、朝早くから探しに出て行きましても、夕方に歸つて來た時には、お美味さうな物は、少しも持つて歸りませんでした。それでお父さんの蟻は、今まではお母さんがうまく云つて呉れましたので辛抱してゐましたが、たうとう我慢が出來なくなつてしまひました。
『おい〳〵、毎日出て行つて、これと云ふまい物を見付けないと云ふことがあるものか。何の役にも立たない郎野だな。』
お父さんの蟻はかう云つて、子供を睨みました。
蟻の子供は、大變無理を云ふお父さんだなと思ひましたが、口に出しては云へませんから、だまつてうつむいて居りました。
『明日は目を皿の樣にして、探して來るんだ。お父さんの御馳走が見付かるまでは、歸つて來てはいけないぞ。』



お父さんの蟻が、こんなことまで云ひましたので、子供は非常に困つてしまひました。
『どうしたらいゝだらう。僕は一生懸命になつてゐるんだけれど、これ以上には出來やしない。』と、蟻の子供は口の中でつぶやきました。
そのあくる日です。蟻の子供は元氣なく家を出て行きました。とてもお父さんが滿足するやうな物を持つて歸ることが出來ないと思つたものですから。
お晝近くなつたが、たゞ歩き廻つただけでした。
『これはどうやら、今日も歩き損のやうだよ。』
蟻の子供は、ほんとうにがつかりしてしまひました。道の端にしやがんで、じつと考へ込んでゐるやうにして居りました。
その時、石ころや砂を積んだ車が通りかゝりました。恰度道が惡くて、くぼんだところがありましたので、車がゴトンとゆれました。そのために車の上

の石ころが、砂と一緒にころげ落ちました。
何と云ふ不幸でせう。その石ころの一つが、可哀さうに蟻の足の上に落ちましたので、子供は足を折つてしまひました。
蟻の子供は泣きながら、折れてギリ〳〵痛む足で漸くお家へ歸つて來ました。
お父さんは、子供が歸つて來たのを見ると、いきなり、『おいどうだつた。』と、呶鳴りました。蟻の子供は物も云はずに、ワッと泣き出しました。
『この野郎、泣いたつて判りやしないよ。』
お父さんは、頭からかみつくやうに云ひました。
『足を折つたの、足を。』
子供は泣きじやくりながら、お父さんの顔を見上げました。この聲を聞いて、お母さんはとんで來ました。
『足を折つたつて？　どうして…』
お母さんは、折れてブラ〳〵になつた子供の足を

見て、顔を蒼くしてしまひました。
『まあ可哀さうに、お前。』
『馬鹿な野郎だな、お前は足を折るまで働いても駄目なのか。よし。それぢや俺が出て行つて見よう。俺は體ももとのまゝで、ドッサリ背負つて歸つて來るからな。お前等はウヂノ〳〵待つてゐろよ。』
蟻のお父さんは、こんなことを云ひながら、お家を出て行きました。
子供はお父さんが、何處へ行つたのか知らと、心配してゐました。
『お母さん、お父さんは何處へ行つたんでせうねえ。』
『そんなことを心配しなくてもいゝよ。毎日遊んでばかりゐるんだから、たまには外に出るのも體の爲にいゝからね。』
と、お母さんはあまり氣にもしてゐませんでした。
でも、蟻の子供は、何故かしらん氣になつて仕方もありませんので、足の折れて、ズキン〳〵と痛むのも忘れて、お父さんのあとを追つて行きました。
お父さんはお社の境内の細い道をずん〳〵歩いて行きます。子供は苦しみながらも一生懸命になつてついて行きました。
お父さんは、お社の拜殿の前に出ました。
子供は草の下にかくれて、じいつと、お父さんのすることを見て居ました。
お父さんは、お供へのお菓子の上に上つて、隅の方からたべ出しました。
蟻の子供はそれを草の葉の下から一寸頭を上げて見て、びつくりしてしまひました。
『ひどいや、神樣のお菓子をとるなんて。』

子供は何だか、怖いやうな氣になりました。
『もういゝかげんにお父さん歸るといゝになア。』
いくら待つて居ても、お父さんは食べるのを止めませんでした。それを遂に、蟻の子供は不思議に思つて、そつと、お父さんのうしろへ近づいて行きました。
『うん、これで腹一杯になつた。間抜の野郎つたら、こんな近くにこんなうまい御馳走があるのも知らないのだからな。』
お父さんは、さあ歸らうと立ち上らうとしましたが、さつきからお腹が破ける程食べたものですから、立ち上ることが出來ませんでした。とう〳〵ウン〳〵呻つてしまひました。

『お父さん、どうしたんです？　え。』
蟻の子供は、お父さんが呻り出したものですから、びつくりして、思はず聲をかけました。
お父さんの蟻は自分の後に知らぬ間に、子供が來てゐたものですから、びつくりして、
『お、お前來て居たのか。』
と、云ひました。
『お父さん、どうしたのです。』
『どうも苦しくて、苦しくて、水をくれよ。水を。』
お父さんは、しぼり出すやうな聲でかう云ひました。
これを聞くと蟻の子供は、直ぐに水を探しに痛い足を引きずつて、お社の森を抜け出しました。
お腹も減つて來ましたし、それに足の痛みとで、子供の蟻は、もう目がまひさうでした。それでも元氣を出して歩きました。
暫くして、小さな水溜を見付けました。

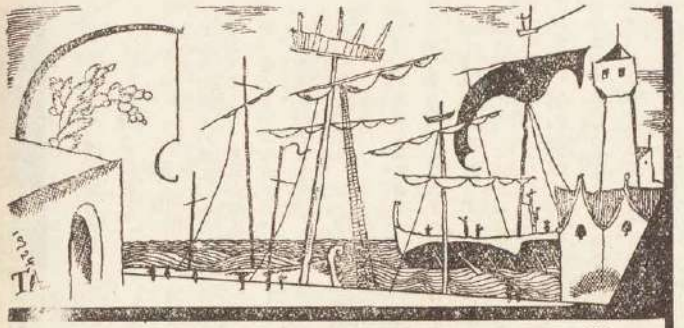
『よう、あつた〳〵。』
子供の蟻は、何もかも忘れてしまつて、かう云ひました。
そして思はず、水に口をつけて、ぐッぐッと呑みました。
『うまかつた。うまかつた。』
さう云つて、どつかり腰をおろして大きく息をつきました。
『どうも氣持がいゝ、せい〳〵して來た。』
あまり氣持がよかつたのでせう、とう〳〵知らぬ間に蟻の子供はそこに寢入つてしまひました。
お父さんの方の蟻は、呻りながら、長いこと子供が水を持つて歸つて來るのを待つてゐましたが、いくら待つても歸つて來ませんでした。
お父さんの蟻は蒼い顏をして、ウン〳〵呻りながら、子供の行つた方ばかり見て、おいしい水を待つて居りました。（をはり）

一頁小話

すいっぽん（少年自作）

静岡市呉服町　秋山　文

山の中の淋しい處に、一つのお寺がありました。そのお寺には、すいっぽんといふ名のかはいらしいお小僧さんが居ました。
すいっぽんさんは、大へんはたらきます。庭をはいたり、水を汲んだり、いろ〳〵な仕事を一日樂しくやりました。また大そうすいっぽ、さんはりこうでした。
或る夜でした。このお寺は山の中なので、狐やいろ〳〵の獣が居ります。すいっぽんさんがふいと目をさますと、外の方で『すいっぽん〳〵』と誰かどよびます。すいっぽんさんは、誰かゞきたかなと思ひながら戸をあけてみると、誰も居りません。『ハハアこれは狐が狸いたづらだな。』とすぐすいっぽんさんは思ひました。
それは、此の山の中の奥にすんでゐる古狐でした。古狐はよく山ですいっぽんさんを見るのでいたづらをしてやらうとしたのでした。
すいっぽんさんに『すいっぽんすいっぽん。』と聞えたのは、古狐が雨戸の尾で「すいっ」とすつてはぽん」とだゝく音でした。
すいっぽんさんは狐がにくらしくてなりませんので、明日の晩きたらきつとあの狐めゝ生どりにしてやらうと、明日の晩を待ちながら寢ました。
その翌日の晩でした。すいっぽんさんは寢床に入つて待つて居りました。其の中にやつぱり昨日のやうに、『すいっぽん〳〵』とばかにしたやうに狐は雨戸を外でたゝいて居ます。すいっぽんさんは、そをつと起きて裏の戸口を出て見ますと、狐は何もしらないで、雨戸を一ル懸命すいっぽん〳〵」とたゝいて居ります。すいっぽんさんは、笑ひたいのをがまんして、いそいで大きなかごを持つてきて、そうつと後から、いきなりかぶせてしまひました。古狐はもうどうする事も出來ません。すいっぽんさんは、頭からぎうつとおさへつけてしまひました。そして、大きな石をおもしにして、其の夜は寢てしまひました。
翌朝すいっぽんさんは、いそいで昨日の處へ來てみますと、まだ狐は居りました。狐はすいっぽんさんを見ると、急におろ〳〵聲を出して『どうか放して下さい〳〵』と幾度もあやまりました。すいっぽんさんはあんまりかれいそうなので、『もう前はたび〳〵此の山の人をだましすだらう。そんな事をするのはほんとに惡い事だ。だから早く此所をにげたら、山の中へ入つて出てこないやうにしなさい。今度何かをしたら、また私がいつてつかまへてしまふから。』と言つて放してやりました。
それからは大そう此の山の人のひようばんになつて、あのかはいらしいすいっぽんさんが狐をつかまへたそうだと、大評判になりました。（をはり）



ラムの王一生 Ⅳ

武井武雄

〔4〕

ラム王がギニビヤの宮殿をあとにして、西へ西へとまゐりますと、晴れ渡つた薔薇色の空の下に大きな波止場がありました。帆柱は林のやうに並び、人は蟻のやうに集つて、海では銅羅鑼を叩いて出帆を知らせるかと思へば、岸では法螺貝を吹いて乗船の合圖をしてゐるといふわけで、大變な賑ひでありました。ラム王は西の方角へ出る船をさがしました。すると西へ行くゴールデンバットといふ船が恰度にも銅羅を鳴してゐましたので、すぐにはしけを走らせてこれに飛乗ると、船はいきなり動きはじめました。

靜かな航海を十日あまりも續けた頃、誰がいふともなく、どうもこの船は人がだん〳〵に減つてゆくやうな氣がする。といふ噂がありました。それにコックの仲間に、港を出る時には、つひ誰も見たことの

はい、青白い顔をした一人のびつこが交つてゐますので、ラム王はこいつが怪しいぞ、と思つてこつそり注意してゐました。すると驚いたことにはこの男の持つて來た珈琲を呑んだものは誰でも、すぐに顔色を變へて甲板に駈け上り、いきなり蛙の樣にズボンズボンと海の中へ飛込んでしまふのを見たのでありました。かういふわけで昨日は三人今日は五人とだん〳〵船の人が減つてゆくのでありました。

ラム王は少し考へがあつたので、そのびつこを呼んで、『珈琲を一杯』と注文しました。びつこのコックはすぐに銀のお盆の上へホヤ〳〵と息の立ちのぼるやつを捧げて來て、恭しく頭をさげました。ラム王はコップをとつて一寸臭いでみると、海草の樣な奇妙なにほひがプーンと鼻をかすめました。こいつはあぶないぞと思つたので、その珈琲を一と息にグツと呑むといきなりラム王は變身の術を使つて、小さなゴム人形になりました。するとそのゴム人形がコロコロコロッと甲板をころがつて、目にも止らない程の迅さで海の中へズボンと落ちこんでしまひました。ゴム人形のラム王はそのまゝ海の面へ小さな白い泡を殘して、底の方へ沈んでゆきました。

海の底には薄紫色をした水萍といふ毒草の藻が一面に繁つてゐて、その藻の間を水萍鬼といふ素敵に脚の長い鬼が一杯、ウロ〳〵マゴ〳〵とさ迷つてゐました。その鬼の中には、昨日まで船で一緒に暮してゐた水夫長や、隣の船客の樣な、なりたての新しい鬼がゐましたので、どうした譯かと思つて聞いてみると、何しろみなりがゴム人形なので、はじめは鬼共も相手にしてくれませんでしたが、漸くラム王だとわかつたので、水夫長が、

『水萍の毒にあてられると、みんな間違ひなく海へ飛込んで水萍鬼といふべら棒に脚の長い鬼になつてしまふんですよ。僕等もつひあの珈琲に水萍の毒がはひつてゐるとは知らなかつたので、かうした淺ま

しい姿になつてしまつたが、もうとても一生人間になれる見込はなし、さりとてこの鬼は死んでも生きてるといふのだから、死ぬわけにも行きやアしない。アーン、アーン、アーン』

と、云ひながら泣き出してしまひました。脚の馬鹿長い蜘蛛の様な恰好をした鬼が、涙を落して泣いてる容子を見て、ラム王も思はずプッと吹出してしまひました。水夫長は尚も言葉を續けて、

『この海には何千年も前からの水萍鬼がギッシリ溜つてゐるんですよ。』

と、云ひました。ラム王は、自分も水萍の毒を呑んでゐるので、人間にかへるとすぐに水萍鬼になつてしまひます。ですからゴム人形の姿をしたまゝ紫の水萍とウザ〳〵する程居る水萍鬼との間をくゞつて、あちらこちらと歩きまはりました。…サテ一體どういふわけで世の中の人間を、かうも澤山の海の中へ引張りこんで、水萍鬼になんぞする必要があるのだらう。そして又第一あの奇妙

なゞつこのコックはどういふ奴なのだらう……と、こんなことを考へてゐると、ふと遙か向ふの方に不思議な形をした塔のやうな家のあるのが見えました。ラム王は、いまゴムの小さい足であるうへに、水の中は素敵に歩きにくいので、この家の前まで來るのに五日もかゝつたかと思はれる程でありました。いよ〳〵家の前へ來てみると、塔の屋根の一番頂邊にとまつてゐる杜鵑の様な形をした青い鳥が、人の來たことを知らせでもするかのやうに、いきなり笛の様な聲で、『クウクウ!! クウクウ!!』と二たび鳴きました。すると家の中では、にはかにザワ〳〵ともの騒がしい氣勢がしましたが、すぐに靜まりかへつてしまひました。

ラム王はかまはず扉をあけて中にはひりました。中は虹の様に綺麗であるのに、どうしたものか虫一匹も居る容子はなく、墓場の様に靜かでありました。ラム王は手當り次第にそこいらを探して居りましたが、ふと小さな寶石箱の蓋のまだよく締まり切つてゐないのが眼にとまりましたので、バキンとその蓋をあけてみると、中には小豆程の大さで極めて光澤のいゝ眞珠が一粒ポロリと置てありました。ラム王は何の氣なしにその眞珠をとつてなめてみました。するといま眞珠へ唾がついたかと思ふ間に、眞珠はいきなりムク〳〵とふくれ出して、牛の様な顏をした大きな妖婆になりました。屋根の鳥の聲を聞いて急に眞珠に身を變へて隱れてゐた妖婆も、折惡しく唾をつけられたので、本性を露さないわけにはゆきませんでした。

『ヤイコレ、ひとの御殿の中へ默つてピョコ〳〵はひつてくる奴があるか。たとへゴム人形でも命のあるやつならいゝ拾ひものだ。今蠟燭の庭へうつていつてヂイヂイ燒殺して、そのお代りに泥棒を一匹慥へてやらう。』

妖婆はさう云つてつかみかゝりました。

『待つて下さい。その前に一寸聞きたいことがありますが、さういふあなたは一體どなたですか。』
『わしか、わしは水萍の精の牝ぢや。』
『それなら、私はお敎へを願ひ度いことがあつてわざ〳〵上つたのですから、さう無暗と燒殺さないで下さいよ。』
妖婆は、お敎へと聞いて急にニタ〳〵と笑ひ顏で、
『さうかい、へゝエ可愛いゴム人形だね、お前は。』
と、云ひながら頭を撫でに手を伸しかけました。ラム王はこんな海氣味惡い化物に撫でられてはたまつたものでないと思つたので、あわてゝ首をひつこめました。
『さてそのお敎へを願ひ度いといふ次第は、何故に地球の表面に住んでゐる罪もない人間をはじから海へ引ずり込んで、あのヒョロ長い水萍鬼ばかり澤山慥へるか。そして又ゴールデンバット號に乘つてゐた水萍の毒を珈琲に盛るびつこはどういふ男か、と只これだけのことなのです。』
『なんだそんなことかえ、ではまづ一寸こゝへ來てごらん。』
と、云ひながら妖婆は一方の戸を細くあけて見せました。そこから見える果てしもない程廣々とした青白い部屋の中には、何億萬といふ人間の赤ん坊の卵がおいてあつて、中にはもう赤ん坊の形になつてゐるのもありました。妖婆は言葉をつゞけて、
『解つたかえ、これはみんな惡人の卵だよ。泥棒だとか、人殺しだとか、火つけだとかね。わしは惡人が大好きなんだ。そこで生れべきものは時節が來れば生れさせなくてはならない。けれど惡人を一人生れさせるには、是非とも地球の上の人間を一人引よせて水萍鬼にしなくてはならない。これで地球上へ一日に生れ出る惡黨が五人や十人では足りない、だから水萍鬼も一日に五人や十人作つてゐたのでは足りはしないのだよ。あのびつこの男はこゝの王樣なんだ、私の亭主で水萍の精の牡だがね、云はゞまあ人間を水萍鬼にする案内役をつとめてゐるのさ。』
ラム王はこれを聞いてびつくりしてしまひました。そこで暫く默つて考へてゐましたが、やがてわざと言葉を柔らげて、
『時にお婆さん、あなたも變身の術を御存じの樣ですね。私もちつとばかりやるのですが一つ二つ二人でためして見ようぢやアありませんか。まづ私が蹄鐵になつてみますから。』と云ひながらすぐに美事な蹄鐵になりました。妖婆は、
『アハ、七千年もこゝにゐる婆さんだよ、たかが子供のやること位はね。』と、すぐに續いて敗けないやうな蹄鐵になりました。ラム王は如何にも感心したらしく、
『何とお手際は鮮かなものですね。では、蹄鐵からすぐにさつきの樣な眞珠になつてあの箱へ飛んでみて下さい。』と云ひました。すると今あつた蹄鐵はあとかたもなく消えて、箱の中にはもう眞珠の粒がキラ〳〵光つてゐました。ラム王は手早く箱の蓋をして、昔の

珊瑚轆轤になり、巧みに穴をあけて針金で口を綴ぢつけました。そして封蠟と手燭とを持つて來て、細い隙間までもすつかり封じてしまひました。箱の中では小さい眞珠のヒソ〳〵と泣いてる聲が聞えてゐました。ラム王は秘密の戸棚をすつかりあけてみました。色々の魔法書の中でまづ水萍の毒を消す呪を知つて、自分の體にかけておいて、もとのラム王にかへりました。そして惡人の卵の擦り潰しにかゝりましたが、これはとても大變なので、ウヨ〳〵してゐる水萍鬼どもを使つてそれを仕事にさせることに致しました。けれどこれはとう〳〵潰し切ることは出來ませんでした。その代り魔法によつてあとへ善人の種を播いて、その卵を殖やすことを始めました。そしてなるべく地球上の惡人に水萍の毒を呑ませて、善人を生れさせる樣にしました。そして今迄の罪もない水萍鬼には一々呪ひをかけて地上に蘇らせてやりました。

こんな譯でラム王はびつこに代つて、この不思議な宮殿の王樣になつたのでしたが、今迄水萍の精どものやつた惡いことを、みんな反對の仕組みに直したので、その後この海からは一寸もいやな唸り聲を聞かない樣になりました。しかしラム王も一生海底に居るわけにもまゐりませんので、ある日寶石箱の側へいつて、そつと耳をつけて中の容子を聞いてみると、小さい眞珠は頻りにメソ〳〵泣きながら、

『もうあなたの魔法で私はすつかり善人になつてゐます。あなたの下婢になつてお仕事を助けますから外へ出して下さい。』と、訴へてゐる小さな聲が聞えました。ラム王が、

『一寸聞くことがあるが、この海に黑耀石の釣針が下つて來たことは無いかい。』と云ひますと、

『そんなものは、七千年この方見たこともありません。』と答へました。

『さうか、僕はそれを探してゐるんだ。それぢやアもうこんな處の王樣なんかやつちやア居られない。お前を出してやるから僕に代つていゝ事をやつてくれ。僕はもう行くから。』ラム王は早速轆轤になつて針金を切り、眞珠の妖婆を出してやりました。妖婆も今は妖婆でなく、にこやかな可愛い婆さんになつてゐました。婆さんはすぐに呪ひでびつこを呼んで、二人で恭しく善人製造の仕事を引きつぎました。ラム王は又もとのゴム人形になつて、

『婆さん。僕の臍の處に小さな穴があるだらう。そこへ麥稈を突込んでプーッと空氣を吹込んでくれないか。』と云ひました。お婆さんがその通りにしますと、ゴム人形のラム王はブクブクと云ひながら海の面へ浮び上つてまゐりました。

すると恰度にも、そこを通りかゝつた日本郵船會社の箱根丸といふ船長が見つけてゴム人形が浮いてるぞといふので釣針で拾ひ上ました。退屈な船の中ですから、各自に大切に可愛がり乍ら航海を續けましたが、つい日本近海に來てから急に此ゴム人形は、どこへか見えなくなつて了ひました。

（つゞく）

旗日（兒童劇）

鈴木善太郎

人物

次郎
姉
よその人

場面――次郎の家の居間。晴れた朝。次郎はかぜひきで寢てゐる。枕元に藥瓶がある。次郎は蒲團の中から、ぢつと天井を見詰めてゐる。十二歳の少年。少し離れて姉が婦人雜誌を讀んでゐる。十三歳の縹緻のいゝ娘。二人とも暫らく默つてゐる。

姉――あゝ！（大きな溜息をして雜誌を閉ぢる。それから膝を崩す。）

次郎――あゝ！、（大きな溜息をする。）

姉――（チラと次郎を振返るが、すぐに又背中を向ける。）あゝ！（又溜息をする。その顏は甚しく不機嫌である。）

次郎――（チラと姉を見て、それから寢返りを打つ。）あゝ！（又溜息をする。その顏に堪へられぬ不快さを表はしてゐる。

姉――（膝に載せた雜誌をいきなり投げ出す。）面白かないわ！　ちつとも面白かないわ！　この頃の雜誌はどうしてかう面白かないんだらう！

次郎――（獨り言する）勝手にするがいゝや！

姉――（又次郎を振り返つて）何だつて？（次郎は默つてゐる）次郎ちやん、何だつてさ。（次郎は眼をつぶつて眠つたふりをする）狸寢入りなんかお止しよ。

次郎――（突然叫ぶ。）頭が痛い！（姉はチラと次郎を見て默つてゐる。）頭が痛い！

姉――かぜを引けば誰だつて頭が痛いもんだわよ。男の癖に、少し位は我慢おしよ。

次郎――姉ちやんが當り散らすから、頭が餘計に痛くなるんだ。（少しじれ氣味に）水を一杯お呉れ。

姉――（怒つて）わたしが當り散らすつて？　いつ何に當り散らしたのさ。

次郎――今雜誌に當り散らしたちや

ないか。

姉――面白かないから、面白かないと云つたんだわ。當り散らした覺えはないわ。

次郎――フム！　ちつとも當り散らさないね。罪のない雜誌を投らなかつたからね。

姉――（頬を膨らして）何とでもお云ひよ！……あゝ、厭だ〳〵！　今日は旗日でお休みだと云ふのに、母さんはお出掛けになつちまふし、次郎ちやんの看病はしなきやならないし。

次郎――（叫ぶ。）水をお呉れつてば！　咽喉が乾くちやないか！

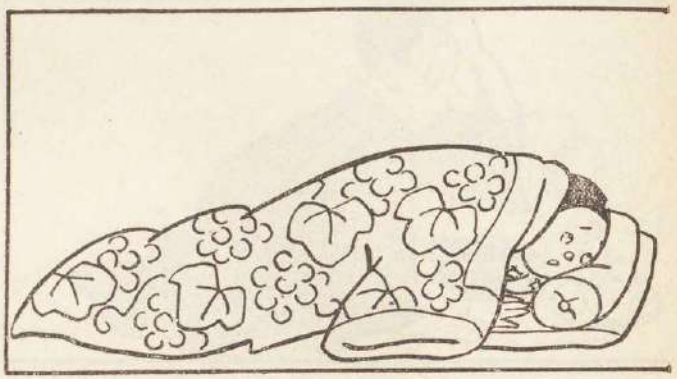
姉――はい〳〵！　わたしはどうせ看病人だから、澤山こき使つて頂戴！（次ぎの間に去る）

次郎――（ちつと姉の行方を見送つて）フフン！　何處へも出掛けられないでいゝ氣味だ！　あんな膨れつ面をしてゐると、おかめが餘計におかめになるから可笑しいや！　母さんが歸つたらみんな云ひ附けてやらア！（戸外から賑やかな樂隊の音が聞え始める。）やア樂隊だな！（潮團み跳ね除けて起き上る。）

（姉出る。）

姉――（驚いて）あら、どうしたの？　そんなに起き出したりしてさ……惡くなつてもわたし知りませんよ！

次郎――（ソコ〳〵に又蒲團へもぐり込む。）



戸外では樂隊の音樂だ。うちでは姉ちやんの音樂か……

姉――音樂だつて？　人馬鹿におしでないよ！（手に持つて來たコップを次郎の枕元に置く。）はい、水！（枕元を離れて窓際に坐る。次郎は默つて一息にコップの水を飲み乾す。）今日はほんたうにいゝお天氣だわ。暖かで、靜かで、長閑だこと。日の丸の旗は門並にヒラ〳〵してゐるし、花は盛りだし、鳥は啼いてゐるし……今日のやうな日を選りに選つて、かぜひきで寢るなんて、お前さんもよつぽどどうかしてゐるわね！

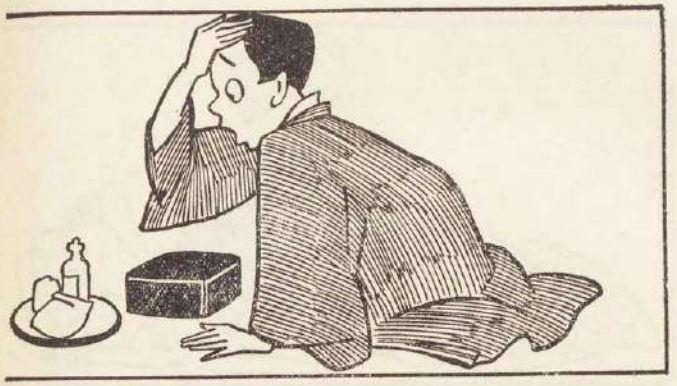
次郎――僕好きでかぜを引きやしないよ。姉ちやんだつて、お正月にお腹をこはして寢たちやないか。

姉――あゝ厭だ〳〵！　こんないゝ日にお友達のとこへも行けないで、次郎ちやんの青ぶくれた顏を見て暮すなんて！

次郎――僕だつて詰らないや！「こんないゝ日」にかうして姉ちやんの膨れつ面を見て暮らすなんて！

姉――（厳しく）何だつて？　次郎ちやん、もう一度言つて御覽！（次郎はチラと姉を見て、それから向ふを向いて默る。）もう一度云つて御覽よ！

次郎――ウム、幾度でも云ふよ。こんないゝ日に、かうして姉ちや



んの膨れつ面を…

姉――（遮って）膨れつ面？　隨分酷い事を云ふのね！　わたしは折角のお休みを潰して、お前さへの看病をしてやつてゐるんだよ。

次郎――それはお互ちやないか。僕だつてもうせん、姉ちやんの看病をした事があらア。

姉――だからかうして今日わたしがお前さんの看病をするのは當り前だつて云ふの？　わたしその爲めにお約束してあつたお友達の處へ行けなからうが、こんな陰氣な家の中で明るい青空を戀しがつてゐようが、それはわたしの我が儘だつて云ふの？

そしてわたしが雜誌に當り散らしたり、音樂を始めたり、膨れつ面をしたり…

次郎――そんなに膨れつ面と云つたのが氣になるのかい？　膨れつ面で惡きやおかめだ！

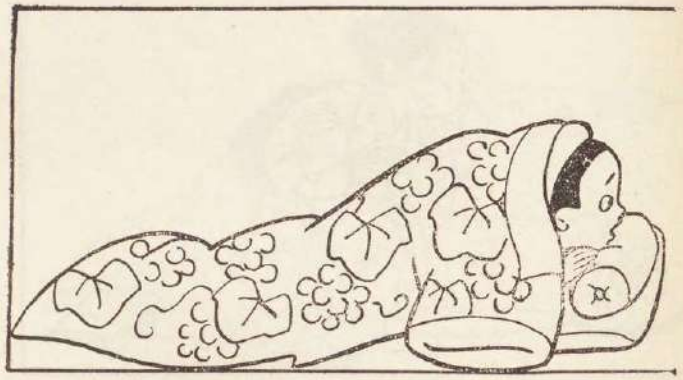
姉――（益々怒つて）わたしがおかめなら、お前さんはひよつとこだよ！

次郎――フム、さうか！　姉がおかめで、弟がひよつとこか。ハハ、！

姉――知らないわよ！　もう誰がお前さんのやうな人にかまふもんか！

次郎――あゝ、いゝよ。

姉――（銳く）覺えてお出で！（出て行く）



次郎――（姉の行方を見送って）おかめの奴、たうとう怒つて出て行きやがつた！　面白いや！（間。）おかめの音樂とひよつとこの音樂の合奏か。ハ、ハ！（間。鳥の聲）鳥が啼いてゐる！　青空が光つてゐる。眞赤な柿の葉だ。菊の花の匂がする。何か食べたいな。（起き上る。「御免なさい」と云ふ聲がする。）お醫者樣だ！（蒲團の中にもぐり込む。又「御免なさい」と云ふ聲。もう一度起き上つて、身裝を直してキチンと寢る。）はい、はい…お上んなさい…

（よその人出る。三十五六歳の男。）

よその人――お父さん今日はどんな工合ですね。さう永く寢てゐちやお困りですね。嫗さんがお萩を作つたから持つて來ましたよ。お口に合ふまいがお父つさん、上つて下さい。（風呂敷包の中から重箱を取り出す。次郎は蒲團をめくつて起き上る。よその人は次郎の顏を覗き込み。）あッ、これは…（キヨロ〳〵と、邊りを見廻す。）

次郎――どなたですか。僕かせを引いたんです…今誰もゐないんです…

よその人――（酷く慌てゝ）えゝ、その…こちらは高木さん…？

次郎――いゝえ、田川です。

よその人――いや、これはどうも…近頃お越しになつたんです

か。

次郎——四五日前です……

よその人——これはどうも、と、飛んだ失禮を……以前こちらにその高木と云ふ人がゐましたんで……その、永い事中氣で寢てゐる人でござんしてな……ではこれは戴いて歸りますよ。（重箱を又風呂敷に包んで抱へる。）では御免下さい。（急いで去る。）

次郎——（間の後）「お父つさん、今日はどんな工合ですかね」か、ハ、ハ、！

（姉出る。次郎は又慌てゝ寢る。）

姉——（以前とはまるで違つた機嫌のいい調子で。）次郎ちやん、一人で淋しかつたでせう。

次郎——ちつとも淋しかないや。

姉——あら、まだ怒つてゐるの？この人は！　淋しがつてゐるだらうと思つて、わたしお菓子を買つて來たのよ。お前さんの大好きな飴チョコだわよ。

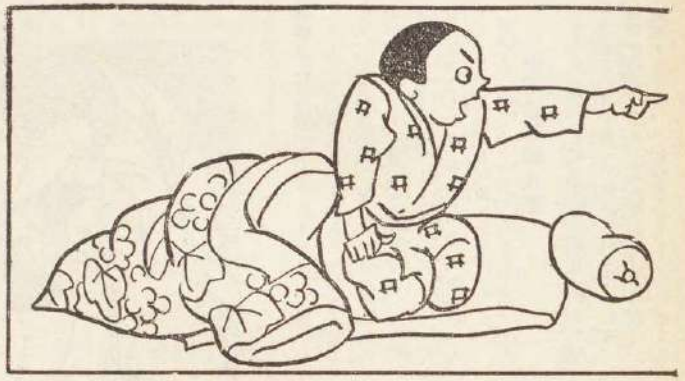
次郎——おかめとひよつとこで飴チョコを食べるのかい？

姉——もうそんな話お止しつてばさ！　仲直りをしようね、次郎ちやん。

次郎——フム、しよう！……姉ちやん！　姉ちやんはお母さんと云はれた事があるかい？

姉——今から母さんなんて云はれて堪りやしないわ。

次郎——僕をこれでもお父つさんと云ふ人があるんだよ。



姉——まさか……（笑ふ）

次郎——（ムキになつて）ほんたうだよ！　今よその人が上つて來たんだよ。そしてお萩を持つて來たんだよ。そして「お父つさん、今日はどんな工合ですね」つて云つたんだよ……

姉——誰が來たの？

次郎——だからよその人がさ……知らないよその人がさ。

姉——そのお萩どこに置いて？

次郎——うゝん、又持つてつちやつたんだよ。姉ちやんなら口惜しがつたらうね。

姉——お前さんぢやあるまいし！……でも隨分慌て者ね！（笑ふ。）

次郎——僕豪いだらう！（指で八字髯を書く）これでもお父さんだからな。ハ、ハ、！（飴チョコを頬張る。）

姉——一寸、お止しなさい！　お父さんは飴チョコなんぞ食べるもんぢやないわよ。

次郎——（龜の子のやうに首をすくめて）さうか！（突然起き上る。眞面目顔で）お父さんの云ふ事は誰でもきくんだよ。（父の顰色な眞似る）綾子！飴チョコをみんな次郎にやれ！

姉——馬鹿！　いやなこつた！

（怒つて飴チョコの包み持つて次ぎの間に走り去る）

次郎——（頭を掻いて）しまつたな……

（戸外から又樂隊の音が賑やかに聞えて來る。）

（幕）

十五少年漂流物語

霜田史光

前號までの梗概、ニュージランドを一周しようとして船に乘込んだ十五人の少年は、嵐のために船が流されて、遂に太平洋の中の無人島へ着きました。止むなく少年達は、こゝで助船の來るまで暮すことになつて、もう一年近くなりましたが、ある日のこと、少年の一人サービスが島の駝鳥を掴へました。

一、妙な呻り聲

サービスが、まるで戰場の勇士のやうに大きな駝鳥の首を抑へて穴から引き出した時、他の少年達はドッと賞め聲を上げました。

『サービス君、それをどうするんだい。』とクロースが訊ねました。

『うん、これか、僕はこれをつれて行つて飼つて置くんだよ。そして馴らして馬の代りに乘らうぢやないか。』

サービスの奇拔な思ひつきは『賛成々々』と云ふゆがあて、遂に洞に逃れて行くことになりました。それから少年達は方々洞の在所を探しましたけれども、そのやうなものは何處にも見當りませんでしたから、止むなく引き返して、今までの洞を掘り擴げようと云ふことになりました。

少年達はまた仕事を始めました。堅い岩を掘り割つてゆくのですから、なか〳〵苦しい仕事ではありますが、いつも力を合せて一生懸命にやりますので、だん〳〵とその仕事は進みました。

『此處を眞直に掘つて行けば海岸へ拔け出られるだらう。』とブリアンは云ひました。本當に、その穴は七八間も岩を掘れば海岸へ拔け出られるやうな所にあつたのでした。

五月三十日の午後にはもう五六尺は掘り進みました。ブリアンはその時トンネルの奥の方で、頻りに鶴嘴で岩を掘り崩してゐましたが、岩壁の向うの方に、何か妙な呻り聲のするのを聞いて、思はずぎよつとしました。急いでトンネルから逃ひ出して、外の少年達へ話すと、ゴルドンは、

『そんな事はないよ、そりゃ君の氣のせいだらう。』

『いや、本當だ。嘘だと思つたら君が行つて聞いて見給へ。』

其處で、ゴルドンが逃ひ込んで行きましたが、ぢきに出て來て、

『ブリアン君の云ふ通りだ。』と云ひましたので、他の少年達も代る〳〵逃ひ込んでその聲を聞きました。後から逃ひ込んだドノバン、キルコクス、ウエッブ、ガーネットなぞは少しもその聲が聞えなかつたと云ふので、嘘だと云ひ出しました。

然し、こんなことを互に云ひ爭つてゐた所で仕方がないので、ブリアン達はまた工事を進めました。夜の九時頃になつて、今度壹聞聞いた時よりも、もつとはつきりと妙な呻り聲を聞きました。その時恰トンネルの中にはひつて來たフハンはその聲を聞くとぐつトンネルを飛び出して、洞の中を怪しい目色をしながら駈け廻りました。少年達は今はもう一人も疑ふ者もなく、その夜は何んとなく、物ものゝしさにぞゝつきながら寢みました。

翌朝は早く起きて、バクスターとドノバンは眞先にトンネルの中へはひりましたが、シンとしてゐて何の聲も聞えません。それから二人は岩壁の頂上に登つて、その邊を殘らず探しましたが、洞どころか、風の吹き入る隙間さへ見當らないのでした。そこで、少年達も妙な聲の在所を探すことは止めて、またトンネルの工事にかゝりました。この日は一日中何の聲も聞えませんでした。たゞ鶴嘴が岩に打ち當るとき、今までとは違つたまるで中が洞のやうな響を立てますので、もしかしてゆく先に本當に洞があるなら、どんなに手數が省けてよいだらうなぞと話し合つてゐました。

その日の夕方、少年達は働らきに疲れて夕飯も食べてゐると、いつも土人ゴルドンの傍に附足を擂へてゐる犬のフハンが、その日の夕方に限つて見えませんので、少年達は不思議に思ひました。

『フハン、フハン。』と喚びたてゝも答へもなければ姿も見えません。ドノバンは湖の方へ、キルコクスは川岸の方へ、また數人の少年達は手分けて方々を探しましたけれども、フハンの姿は一向見えません。やがて九時過ぎになりましたので、森の中へ分け入つて探すことも出來ないので、少年達は心配さうな顏をして皆歸つて來ました。

二、獸と聞ふフアンの聲

少年達はフハンの行方が知れませんので、

落胆してしまつて、一言も聲を立てる者さへなくなりました。

その時、その靜かな時、急にけたゝましい吠え叫ぶ聲が聞えました。少年達はぎよつとして、はて何處からその聲がするのだらうと思つてゐると、

『トンネルの中からだ。』と云つてプリアンが眞先にトンネルの中へ駈け込みましたので、年上の幾人かも續いて駈け込みました。けれども年の少ない少年達は、恐ろしさに蒲團を頭からかぶつて慄へてゐる仕末です。プリアンはぢきに出て來ました。

『どうも變だね。屹度トンネルの向ふに別な洞があるらしいよ。』

『さうだらう。そして何か獸が棲んでゐるに違ひない。』とゴルドンが云ひました。

『僕もさう思つてゐた。明日になつたら皆でよく調べて見ようぢやないか。』とドノバンも云ひました。

また物凄い獸の聲がしました。それと同時にフハンの吠え聲も聞えました。

『フハンは獸と聞つてゐるらしいね。』とキルコクスも云ひました。

プリアンはまたトンネルの奥に這入つて耳を壁に壓し當てましたが、その時はもう何の聲も聞えませんでした。

この夜は少年達はフハンの心配と、物恐ろしさに、誰一人眠りにつくことも出來ないで、夜を明かしてしまひました。

ドノバン等は朝早くから出かけて、岩壁や湖の岸や、その他方々を探し廻りましたけれども、洞の入口を見出すことが出來ませんでした。

プリアン達は昨日のやうに、トンネルの中で岩崩しの仕事を續けました。そして午頃までには二尺ばかり掘り進みました。午後はだん〳〵別な洞に近づくやうな音が鳴響に感じられますので、年下の者は皆洞の外に出してしまひ、年上の少年達は各々武器を手に持つていざと云ふ場合にはどんな恐ろしい獸とだつて闘はうと決心いたしました。

午後二時、

『おゝ！』とプリアンが叫び聲を上げましたので、皆が駆け寄つて見ますと、プリアンが今打ち込んだ鶴嘴は岩壁を崩して向ふの洞へ通じるやうな大きな穴をあけてしまひました。

その時、急にまたがう〳〵ッと云ふ地響きがしたかと思ふと、その穴の中から急に勢ひ込んで飛び出して來た者があります。さては恐ろしい獸が……と思つて少年達が身構へました時、それはフハンだと云ふことが知れました。

フハンはまつすぐに水桶のところへ飛んで行つて、ペチヤ〳〵と水を飲んで、それから御主人のゴルドンの傍に來てじやれつく樣子は、昨日と少しも變りがありません。少年達はこれを見て、別に恐ろしい事もないと察しましたので、プリアンを眞先に、ゴルドン、ドノバン、キルコクス、バクスター、モコーなぞが提灯をさげて、トンネルの中から次の洞に這入りました。見るとその洞は佛人洞とほゞ同じ位の廣さで、外へ出る道は何處だかさつぱり見當りません。その時キルコクスが何かに躓いて叫び聲を上げましたので、提灯をさし出して見ると、それは一頭のジヤツカル（豺に似た獸）の屍體でした。

『これは屹度フハンが噛み殺したものに違ひないね。こゝで昨日からの唸り聲のことも解つた。』とプリアンが云ひました。

それからプリアンは一人でそこを出て、岩壁に沿うて歩きながら、大聲で呼んで見ますと、やつとの事洞の中から少年達が答へち聲を開く事が出來ました。よく〳〵見ると、地の上に小さな穴がありましたので、『ばゝア、

これが洞の入口なのだな。』と合點しました。新らしい洞を見出したので、少年達は大層喜びました。そして此前の倍も勇氣を出して、それを掘り拡げの工事を進めました。

やがて出來上つたので、佛人洞から寢床やいろ〳〵の荷物を移して、そして其處をお勝手の場所にもしました。

、島の名付けと酋長選び

もう心配ごともなくなりました。そして一通り仕事も濟みましたので、その晩少年達はストーヴの周圍に集まりながら、この島の所所に名をつけようと誰かゝ云ひ出しました。すぐにその事は贊成されて、少年達は思ひ思ひにその思ふ所の名を云ひました。決つたものは次の通りです。

ブスロウ號の流れ着いた處は、スロウ灣佛人洞はそのまゝ。その脇を流れてゐる川は少年達の故郷の名にちなんでニユージーランド川。湖は家苫湖。岩壁はオークランド岡。その岡の北の端の、プリアンが始めて登つて東の方を見た所が、幻海臺。陷穽ん見つけた森は、陷穽の森。プリアン達が探檢に出かけ沼に出合つて廻り道をした時見つけた森は沼地の森。ニユージーランド川から南の方の沼地は南澤。探檢隊が飛び石の徒渉を見つけた所は徒渉川。

この外まだ探檢し切れない所も多いので、それは追ひ〳〵名付けようと決まりました。

然し、ポールドキンの地圖に出てゐる鄰だけは名を付けて置かうと云ふ者もあつて北の海岸の鄰は北鄰。西海岸の三つの鄰は少年達の母國の紀念に、佛人鄰、英人鄰、米人鄰などと名付けられました。

けれども、まだ〳〵大事なのはこの島の名です。

『いゝ名を思ひ付いたよ。』とコスターがいひました。

『君がかい？　驚いたね。』とドノバンがいひました。

『まア、ひやかさないで聞かうよ。コスター君、何んと云ふんだい。』と、プリアンが尋ねました。

『僕達は皆チエイアマ學校の生徒だらう。

だからこの島をいつその事、チエイアマン島としたらどうだらう。」

『すてき、すてき!!』

少年達は手を打つて、その名のよい思ひ付きに賛成しました。コスターはさも〳〵嬉しさうににこ〳〵しました。

次にはこの島の首長がゐなければ、何をするにしても都合が悪いからと云ふものがあつて、いよ〳〵少年達の手から王様を選び出すことになりました。

ドノバンは自分がその首長に選ばれたく思ひました。けれども、どうやら少年達の多くはブリアンを選びさうなので氣ではありません。ドノバンにとつては、ブリアンはいつも邪魔物のやうに思はれて、心憎かつたのです。然し、第一番にブリアンは立つて、

『僕はゴルドン君になつて貰ひたいと思ふが諸君どうだね。』と云ふと、少年達は一番の年上でいつも考へ深いゴルドンに賛成しました。

ブリアン黨とドノバン黨とに別れてゐる少年達の上に、ゴルドンが立つことは、一番都合のよいことでした。そして一年經つたら別な人がこれに代ると云ふことにして、ゴルドンを首長の位につくことを承知しました。

次の日から少年達は學問を始めました。學問と云つても、上級生が下級生に教へるのですが、それでも規則正しく、愉快に毎日の授業は進められました。

この間いろいろなことで、ブリアンとドノバンとの意見が合はないことがあつて、或時は危く撲り合ひをする程にもなつたことさへありましたが、そんな時はいつも首長のゴルドンが仲裁にはひりました。

その他の少年達は仲よく寂しいながらも樂しい日を過ごすことが出來ました。

四、冬ごもり

六月の末になりますと、雪は次第に深くなつて三尺四尺も積りました。寒さは激しいし、食べ物もだん〳〵となくなりますので、心細いことゝいつたらありません。今までだつて隨分食べ物のことは心配して、いろいろな鳥や獸や魚などをとつてはその足しにしてゐましたから、まだ殘つては居りますけれど、近頃のやうに漁にも釣にも出られないでは、蓄つてあるものを減らしてゆくより外仕方がありません。次に困つたのは水ですが、それはバタスターの力で、土管を埋めて川水を洞の中に誘き入れることに成功しました。油は船から取つて來たのがありまして、まだ幾月かは心配ありませんが、この冬の末頃には新しく油を作るか、でなければ蝋燭でも作らなければ、燈火を點けることが出來なくなりさうです。そこで、モコーはいろいろの動物の脂肪を大切に蓄へ始めました。

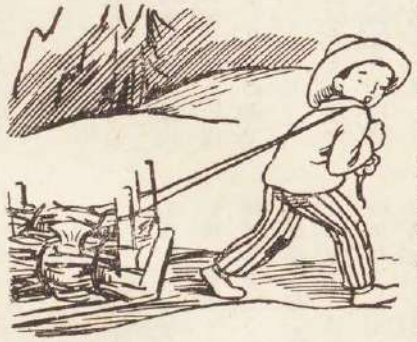
かうして冬ごもりの間、少年達は外へはろくろく出ることも出來ずに、洞の中で勉強をしてゐました。時々薪木を取りにゆく爲めに陷穽の森へ行つたり、車子を造さにし、橇を作つて薪木を積んで曳いたりしました。

七月一杯はごく寒くて、零度以上五度以下十七度位まで下りました。それでも八月になると、どうやら寒さも衰へてきましたので、運動不足の少年達にもう我慢がし切れないでスロウ灣の方へ行つて見ようと云ひ出しました。そして八月十九日には雪と氷で固くなつてゐる沼地や森を越えて、スロウ灣にゆきました。そして幻海臺に登つた時は、ブリアンがいつか立てた古い英國旗を新らしいのと取り換へました。

九月になると日一日と暖かくなつて、春らしい氣候が空の色にさへ見え出しました。九月十日になりました。あゝ、九月十日。その日は數へて見れば、スロー號がこの離れ孤島に着いてから丁度半年目の日でした。如何に心を合せて慰め合つてゐるとは云ひながら、少年達の故郷を思ふ心、助け船を待つ心、またそれが來ない悲しみ、それらはどんなにつらい思ひでしたでせう。よく年下の少年が皆の前を避けて、一人、一人、そゝと隅によりかゝつて泣いてゐるのを見ることは幾度もありました。いくら氣強くしてゐても少年です。父もなつかしく、母も懇しく、また生れた土地も懇しいでせう。

九月の中頃からは急に大風が出て、海も鳥も大荒れに荒れ出しました。それはスロウ號が流れ着いた時と同一位の激しい暴風でしたそれは幾日も〳〵も續きましたので、少年達は折角暖かになりかけて喜んでも、外へ出ることはもとより、魚や鳥や獸の一匹もとることが出來ませんでした。

その間にも少年達は丸つきりりんでもゐないで、バタスターの心付きで車を作りました。



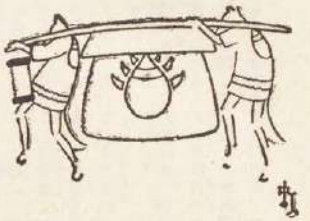
車と云つても、船から持つて來た絞車盤の齒の處に木を埋めて、その上を鐵の輪で締めて輪にしたもので、どうやら車は出來上りました。かう云ふことは、いつもバタスターの得意とする所でした。

十月の始めとなると、激しい風も止んで、久しぶりに太陽が顔を出しました。その笑ひ顔のやうに光つた姿を見た時は、少年達はまるで故郷にでも歸つたやうな悦びで、一日中外を歩き廻つたり、魚釣りや、鳥打ちや薪採りになどに行きました。

またガールドキンが作つた陷穽や、保蹄やはり綱で獸を獲つたりしましたが、それでもジャッカルのために、時々その保蹄を踏にちられたり、折角の獲物を竊まれたりしました。

この月の二十六日に大笑ひをさせたことがありました。それはサービスが永い間一生懸命に飼つてゐた駝鳥を引き出して、乘つて見ようと云ふことになりましたので、少年達は皆湖の岸に出てそれを見てゐました。

サービスは駝鳥に手綱をつけ、その背にひらりと乘つたまではよかつたのですが、駝鳥は背中のサービスが邪魔だ云はぬばかりに、一度大きく一ゆり搖ると、サツとサービスを振り落して、一目散に森の方へ駈けて逃げてしまひました。見てゐた少年達はどつと笑ひました。（つゞく）



狐火

川崎春二

ある城下の町から三里ばかり隔てた山の麓の村にお槇といふ美しい娘がありました。お槇は美しいばかりでなく、大そう親孝行な娘でしたから、その邊での評判娘になつてゐました。

この城下に大島榮之進といふ若武士がありましたが、その娘の評判を聞いて是非自分のお嫁さんに欲しいと思ひました　そこで、家來の次郎作を呼んで娘を自分の嫁に貰れるやう計らつてくれ、と頼みました。

家來の次郎作は、そんなことには不馴れでもありますし、また立派な武士ともあらう者が、評判を聞いたとけで　百姓の娘などを嫁に貰ひたいなどゝは、ちと困つた話だと思ひましたが、言ひ出すと後へは退かない性質の主人のことですから、不承々々に引受けて、

『かしこまりました。けれども、若し先方で不承知の場合には何といたしませう。まさか力づく、權柄づくで承知させる譯にも參りますまいが……』と、申しました。

「いや〳〵、まさか不承知とは申すまい。先方に取つては願つてもない幸福だから。』

『でも、さうばかりは參らないかもわかりません。ですから何うしても承知しない場合は、どうぞいさぎよくお諦めを願ひます。』

次郎作はどこまでも後々のことを心配いたしました。それは榮之進の平生として、自分の意ひが通らないと隨分亂暴をしかねないことを呑込んでゐましたし、また使ひの役が立たないなどゝ言つて、えらい迷惑をかけられることも苦にしたからです。

『心配することはない。まづ名主の富衛門に言付けて承諾させれば譯もないことだ。お前がくどく心配するには及ばない。』と、主人の榮之進はもう一人定めに定めてゐるやうな口振りでした。

次郎作は、とんだことになつたとは思ひましたが、『これも家來の役目だ。まづ仕方がない。かけ合つて見よう。』と、しぶ〳〵山根の村へ出かけました。

そして、まづいひつかつた通り、名主の富衛門の家へ行つて、自分の主人が、評判のお槇といふ娘を是非お嫁に貰ひたいことをくはしく話しました。そして、最後にこの縁談がうまく行かないと自分が、えらい迷惑をすること、またさうなればお前のためにも、その娘のためにもならないから、是非骨を折つて貰ひたいと、前に自分が主人から言付かつた通りを、今度は名主の富衛門にぬりつけるやうに、いひました。

その時分、名主といふものは百姓仲間ではかなり威張つたものでしたが、その代り上役の武家に對しては、普通の百姓達よりも一そう怖れたものでした。それは上役の氣持一つで、役の付いた家柄を取りあげられるやうなことが珍らしくなかつたからです。

ですから富衛門は、『これはとんだ災難が降つて來たものだ。あのお槇は前々から、隣村の與作といふ若者の嫁になるやうに約束があるのに……』と思ひましたが、滅多なことを云つては大變だと考へまし

たので、

『承知いたしました。あのお槇は隣村の與作といふ若者の嫁になる約束があるのですが、大島の旦那樣の思召しですか、向うの方は隣村の名主に談判して斷らせませう。』と、答へました。

そこで名主の富衛門は、早速隣村の名主の家へ出かけて行つて、與作を呼んで、二人の名主がいろいろ嚇したり、すかしたりして、與作の方はお槇を嫁に貰ふ約束を取消しにさせました。

で今度は、與作から取つたその約束取消の證文を持つて、名主の富衛門はお槇の家へ行きました。

名主からの話をきいたお槇の親達は、大層嘆き哀しみました。お槇は殊にびつくりして、血の氣を失せてしまふ程でした。

『與作の方との約束の取消はようございますが、お武家樣へのお話はどうぞご勘辨ねがひたいものでございます。不釣合は不緣の基と昔から申します。一人しかないこの優しい娘をそんな所へやつて、苦勞させたくはありません。平に御勘辨を……』

と親達も賴みますし、娘のお槇も、

『どうぞこのことばかりはお許し下さい。』と額を土にすりつけるやうにして賴みました。

けれども、名主の富衛門は聞き入れません。

『お前達がそんな料簡ならよろしい。こちらにも考へがある。第一、これを承知してくれなかつたら、この私やお前達ばかりに災難がかゝつて來るばかりでなく、この村全體にとりかへしのつかない災難が來るのだ。地頭と長いものには卷かれろといふことは、昔の人が敎へた尤もな言葉ではないか。』

かう言つて名主から攻めつけられたので、お槇の兩親も、『それでは名主樣に萬事お委せいたします。』といふことになりました。

富衛門は大そう喜んで、早速家に歸つて來て、朝から待ちかねてゐた次郎作に、事のうまく運んだことを話しましたから、次郎作も大喜びで直ぐに城下の町へ立歸りました。

それを聞いた大島榮之進の喜びは一通りではありません。では祝言の支度といつても、先方は水呑百姓も同樣な家だから、お金をかけさせるのも氣の毒だ。萬事こちらへ來てから、衣類や調度のすべての支度は調へるとして、先づ〳〵嫁を早く迎へようと、

いふことになりました。

『それでは仕度は一切いらぬから、明後日祝言することに取り決めよう。その積りで用意をしろ。』

榮之進は次郎作をはじめ、他の家來や多くの下男や下女にいひつけました。

そこで次郎作は、第一に名主の富衛門のところへ再び飛んで行つて、その次第を傳へました。で名主

の富衛門はまた、早速お槇の家へ行つて、その事を話しました。

お槇の一家では何といつても、もう仕樣がないと諦めてをりましたが、明後日といふことを聞いては驚いて、流れてゐた涙が止まつてしまふ程でした。けれども、嘆いてばかりも居られないので、直ぐに近所や親類などにその譯を話して『山の神樣にでも攫はれたと思つてやりますから、名殘りを惜しみに來てやつて下さい。別れの酒盛でもして悲しみを忘れませうから。』と、ふれ廻りました。

いよ〳〵その當日がまゐりますと、親類や近所の人々はいふに及ばず、平生は姿を見せないやうな人達までも集つてまゐりました。そして、お酒を飲みながら、『どうぞこの村一番の評判娘が長く幸福であるやうに——』と祈りました。

中にも若衆達は、『こんな優しい娘を城下の武骨な武士に奪られてしまふのは殘念だ。與作はどんなに

か口惜しがつてゐよう。』など、罵り合ひ、怒り合ひながら盃を重ねました。また娘達は娘達で、『お武士樣の奥樣になつたら、私どものやうな百姓などは、振りむいても見なくなるだらうが、時々は在所へ歸つて來て、城下のお話も聞かせて下さい。』など、流石に娘らしい名殘りの言葉をかけ合ひながら、手拍子をとり、鄙唄を唄つて、酒盛の興を助けました。それはこの村では滅多にない程の盛んな酒盛でしたが、それが本當に哀しいのか喜ばしいのかわからないのでした。

そんな工合で、人々は幾らお酒を飲んでも醉つたやうな氣持がしません。知らず〳〵に夕方まで、自棄になつて酒を飲み續けました

お槇に付添て祝言の場席　臨む名主を初め、親類の人々もすつかり醉つぱらつてしまひました。それぱかりでなく肝心な花嫁のお槇まで、生れてこの方飲んだことのない辛い酒を飲んだので、へろ〳〵に醉つてしまひました。それでも一番の晴着を着て、お化粧もして、お槇だけは駕籠に乗せられて城下の町へ、故郷の村に名殘りを惜しみ乍ら出かけました。

かつたのですが、そちらへよろ〳〵、こちらへよろよろと、それは本當に危つかしい行列でした。その上、その邊の道は山根の坂道で、大石小石がごろごろしてをりますし、松の根や杉の根が凸凹してゐたりして、なか〳〵道がはかどりません。

村を出はづれると日がとつぷり暮れました。人々は用意の松火を點けて、それを振りかざしながら歩

その時はもう日暮方でした。二人の駕籠舁も村の人でしたから、矢張り十分に醉つてゐました。行列を作つたお嫁の一行は、駕籠を眞中にしたまではよ

きました。隣村に入ると興作の朋輩の若衆らをはじめ、村人が大勢道端に出て來て、いろ〳〵と噂をしながら眺め送りましたが、若衆らは餘りに行列の人人が醉つてゐるのを見ると、少し癪にさはりました。

『興作の悲しみを知らないこともないだらう。それにあの醉つぱらひ方は何うだい。お槇や、お槇の村では、却てお槇の出世だとか、名譽だとか思つて、喜んでゐやがるんだな。』と、一人の若者が怒鳴り出した。

『あの行列を泥田の中へ叩き込んでしまへ。』

『いや、そんな事をしたら、後で大變な事になるから止せ。』

など〵言ひ爭ふ者もあります。すると、惡戯にかけては村一番だと自分から威張つてゐる多平といふ若者が、突然怒鳴り出しました。

『おい、あいつらは皆醉つぱらつてゐて、物の白黑もわからないらしいから、鍋墨を持つて來て、彼奴らの顏へ塗つてやらうではないか。』

『それがよい〳〵』

若衆は忽ち近所の家に飛びこんで、大鍋小鍋を引つくりかへして、兩手にべた〳〵と鍋墨をなすり着け、行列に追ひついて、

『遠方のところを御苦勞ぢやな。危い〳〵、それそれ、ほら〳〵……』

など〵、恰度醉つぱらひを介抱するやうに見せかけながら、皆の顏から手足まで眞黑々に塗りこくつてしまひました。

『これで興作の讐がとれた。』

かう言ひながら引きあげてしまひました。でもお槇だけは、駕籠の中にゐたので塗られずにすみました。

行列は松火を振りかざしながら、相變らずそちらへふら〳〵、こちらへふら〳〵で、他人の顏などの

見さかひもなく進みました。

それが、丘の背や、松林の間や、田圃の道に見えたりかくれたりするので、遠くから眺めると、恰度その頃よく噂された狐火のやうに思はれました。

しまひました。

大島榮之進の屋敷では、城下の知合や親類を招いて朝から酒盛りをはじめ、評判の娘の到着を待ちました。けれどもなか〳〵やつて來ません。日が暮れてから一時も過ぎても未だ來ないので、待ちかねて町端れまで人をやつて見張らせましたが、

『山根の村の方に狐火が燃えて氣味が惡い。』といふ

城下の町では早くから、それを見つけて、

『今夜は狐の御祝儀だ。』と、囃し立てながら氣味惡るがつて、何處の家でも早くから戸を下ろして寢て

知らせだけもかありません。

『これは狐にでも馬鹿にされて、花嫁達の行列が野山を引きまはされてゐるのではあるまいか。』と、人人は心配をしはじめました。

さうしてゐる中に、見張りの者から、怪しい狐火が、だん〳〵近づいて來たといふ知らせがありました。間もなく、顏の怪しい一行が松火を振り〳〵、よろ〳〵、ひよろ〳〵、ふら〳〵と、大島家に這入り込んで參りました。

此方の人々は皆武士ばかりですが、矢張り朝からの酒にもういゝ加減醉ひが廻つてゐました。

次郎作が門口に出迎へて、人々の顏を見ると、びつくりしてしまひました。でも腰の刀に手をかけながら、眞先の名主に聲をかけました。

『其方は富衞門に相違ないか。』

『はい〳〵、たしかに左樣でございます。』

たしかに富衞門の聲に相違ありませんが、次郎作は他の人々が妙な恰好をして畏まつてゐる樣子を見ると、餘計氣味が惡くなつて來ましたので、直ぐに座敷の方に駈け戻つて來ました。

『御主人、たしかに曲者どもに相違ございません。正しく變化の者と見受けましてございます。』と、臆病な男でしたから、顫へ聲で怒鳴りました。

一座の人々は、、、すわとばかり立上りました。

『各々御油斷なさるな。』

大島榮之進は、障子の隙間に駈け寄りながら叫びました。生醉の武士達は相談して、花嫁の一行を庭の隅の物置に入れて戸を閉めさせました。そして『狐なら生松葉を燻べて見れば正體を現はすといふから。』といつて、そこの戸を少し開けて生松葉を燃し、煙をどん〳〵團扇で煽ぎ込ませました。

百姓達は、物置などに入れてはひどい事をすると思ひましたが、『われ〳〵は身分が違ふから仕方がない。』と言ひ合つて我慢してをりました。その中にひどい松脂臭い煙が入つて來て、呼吸がつまつてしまひさうになりました。だん〳〵苦しくなると、むせ返つて皆が變な手つきをして、口を押へながら、ケホン、コン〳〵と咳をし出し、兩眼からはぼろ〳〵と雨のやう　涙を流しました。

この有樣を隙間から覗いてゐた一人の武士が、駈け戻つて來て、

『各々、たしかに、狐狸の類に相違ありません。初めわれ〳〵は身分が違ふと言ひ、生松葉の燻しに會つては忽ち本性を現し、妙な恰好をしてコン〳〵と鳴きはじめました。』と、知らせました。

武士達は『それッ。』とばかり十四五人がばら〳〵と駈け出して、物置の中に躍り込みました。そして、『ばさり、ばさり』と日頃鍛えた手並で、十人許りの者を一人殘らず斬つて捨てました。最後に駕籠から出ようとしたお槇も、大島榮之進が　此奴が親狐だ。』と言ひながら斬つてしまひました。

けれどもその死骸は何時までたつても狐の姿にはなりませんでした。武士達は燈火でよく調べて見ると、それは疑ひもなく待つてゐた百姓達や花嫁のお槇でしたから、酒の醉も全く醒めてしまひました。

幾ら後悔しても、もう間に合ひません。死骸はすぐ〳〵とその夜の中に駕籠に乘せて、そつと山根の村へ送りかへしました。

大島榮之進は自分の輕はずみな行を恥ぢて、其夜の中に切腹して死んでしまひましたが、大勢の武士達は知らぬ振りをしてゐました。

殺された百姓達の村人の嘆き悲しみは、言葉には盡せません。

『その晩に立會つて手を下した武士達は皆罰して貰ひたい。』と百姓達は殿樣に願ひましたが、許されませんでした。

それから後は、その村の百姓達は武士を見ることを、人を喰ふ鬼のやうに忌み嫌つたといふことです。

ソロモン王の姫君

永橋卓介

ソロモン王には、それはそれは美しい一人の姫君がありました。恰度その姫君の十五の誕生日の夜、ソロモン王は、自分の可愛い姫の運勢はどんなであらう、と思つて星を仰ぎました。天に輝やいてゐる星をじつと見てゐると、姫君は貧しい一人の乞食と結婚すると言ふ運勢が、ありありと讀まれました。王様は大層嫌な惡くしました。自分の大事な姫が乞食と結婚しやうなどとは、夢にも思はなかつたのですから。

『なぜあんな事をしたらう。』と、王様は獨語をいひました。『運勢など見なければよかつた。姫の運勢が惡いと俺まで不幸だ。そんなみじめな結婚はさせたくない。どうかして止めさせたいものだ。』

それから王様は書齋に引こもつて、神様の名の彫んである魔法の指環をはめました。すると忽ちアシモダイといふ名の惡魔がそこに現はれました。

『大王、何か御用でございますか。』

『うむ、アシモダイ。ヨッパの港の沖合に一つの小さな岩の島があるな。その岩の上に高い塔を建てくれ。岩の根が少しも見えなくなるやうに、その塔で岩を覆ひかくしてくれ。』

『大王、では明日の夜明け前迄に、御言葉通りにいたしませう。』

惡魔はかう答へて消えてしまひました。

その翌日、ソロモン王は美くしい姫君をよびよせて、二三日中に海の城へ行つて、しばらく滯在しようではないかと言ひました。

『お父さま、よろこんでお供いたしませう。』

姫君は王様の言葉をきくと、うれしさうに答へました。

やがてその日がやつてまゐりました。王様と姫君とは、七十人のお供を連れて、ヨッパの港をさして出發いたしました。一行は、ヨッパに着くと、すぐ王様の船にのつて、かの高い塔の建てられてある岩に向ひました。

その塔の中の部屋は、どれもこれも大層美くしく飾られ　あつて、欲しいと思ふものは何でもありました。

王様はお供の者たちに向つて、誰もこの塔の中へ這入つて來ないやう、夜となく晝となく嚴重に見張つてゐるやうに言ひつけました。そして、

『姫とお前達が、この塔の中に這入つてしまつたら、たつた一つの出入口を煉瓦で閉ぢてしまつて外と交通の出來ないやうにせよ。もしお前達が姫のところへ、誰れか外の者を入れたら、お前達の命はないぞ。』

と嚴しく命令しました。王様は姫君に接吻して、こゝから逃げ出したりなんかしないやうに言ひきかせました。

『いゝ時分には又お父さんが迎へに來るからね。そしたら又あのレバノン山の上の宮殿で面白く暮さうね。』

姫君は王様の言ふ事をすなほに聞いてゐました。

そして王様の船の出て行くのを塔の上から眺めて、手を振りながら悲しげな聲で、さようならと云ひました。姫君は淋しいこの塔の中に閉ぢ込められるのが、何より辛かつたのです。

ソロモン王は自分の宮殿に歸る途すがら、獨語をいひました。

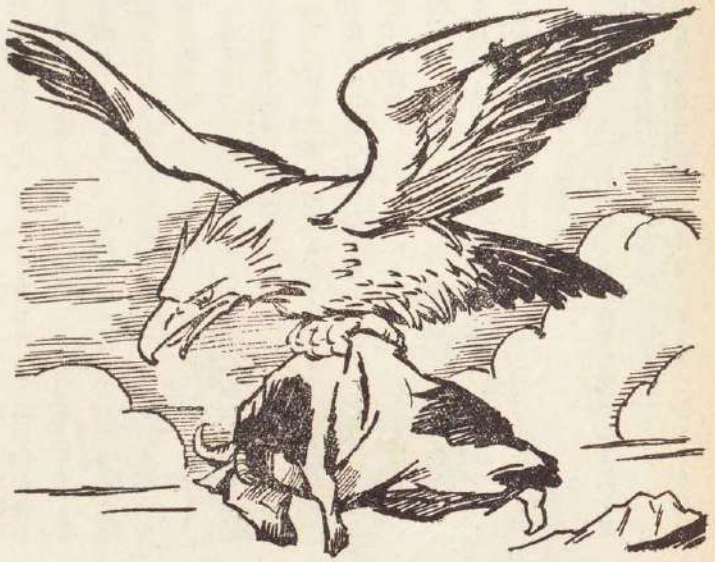
『これで自分の計畫もうまく行くだらう。何としても、姫は自分の娘であるから、自分の好いたやうに結婚させるのだ。わしは星などによつて決められた婿は氣に喰はぬ。乞食は乞食同志結婚するがいゝ。王の姫などと結婚の出來る身分ぢやない。どんな事になるか、まあ見てゐよう。』

それから三年もたつてからの事、ある日一人の乞食がアッコオといふ町の家を出ました。アッコオの町では、ひからびたパンの屑にさへありつけないので、神様の導びきのまゝに旅することになつたのです。この乞食は、幼い時分から神様の律法を勉強しゐました。彼の服はボロボロにやぶれてゐて、餓じさと喉の渴きをこらへこらへ、歩いて行きました。彼には、今夜どこで泊るかと言ふあてもなかつたのです。

『世の中といふものは妙なものだ。』と乞食は歎息して言ひました。『お金持ちと貧乏人と、賢い人と馬鹿者と、幸福な人と不幸な人が、それぞれ神様のみ心のまゝに生きてゐる。身分の高くなるのも低くなるのも、又お金持ちになるのも貧乏人になるのも、皆神様のみ心一つだ。一體自分の運勢はどうだらう、神様だけが知つてゐらつしやるのだ。』

その内に日が暮れて、寒くなつて來ました。するとその時、野原の中に何か落ちてゐるのがフト眼に止まりました。何だらうと思つて行つて見ると、それは一匹の牛の毛皮でした。

『これは有難い。なんて喜ばしいことだらう。神様



は私に、一夜の宿を與へて下すつたのだ。今晩はこの毛皮にくるまつて、暖かく寢るとしよう。』と、乞食はよろこびました。

乞食は、どうか今夜一晩安らかに眠らせて下さい、と神様にお祈りして、毛皮にくるまつて寢ました。

月は美しく野原に照り渡つてゐました　やがて夜も更けました。すると大きな山鷲がスーッとこの野原に舞ひ降りて來たのです。そして、毛皮にくるまつてゐる乞食を牛の屍と間違へて、大きな爪でつかんで空高く舞ひ上りました。

丘を越え谷を越え、川を越え海を越えて、高く高く飛んで、とう〳〵ヨッパの海の中の、あの塔のところ迄持つて行きました。鷲はこの重い荷物を夜の明ける頃、塔の屋根の上に落しました。そして、お午頃に家族中の鷲を連れて來て食べようと思つて、そのまゝ山の巣へ飛んで歸りました。

さて毛皮の中の乞食は、今まで何事も知らずに眠

つてゐましたが、ドシンと落されると共に眼を覺しました。一體どうしたのだらうと思つて、そつと首を出してみますと、見渡す限り青々とした海にとり圍まれた塔の屋根に、自分がのつてゐるではありませんか！』

『おやッ、一體どうしてこんな所に來たんだらう。』

と乞食は獨語を言ひました。

『ア、誰か天窓を開けるやうだ。オヤオヤ變だぞ。未だこんな處は見た事らない。あそこに立つてゐるのは天女かしら？　なんといふ美くしい人だらう。眼の色は青空のやうだし、髪の毛は黄金のやうだ。あれはきつと天女に違ひない。それとも自分はまだ夢を見てゐるのかしら。おや、こつちへやつて來る。何か言つてゐる』

ソロモン王の姫君は、見なれない男がゐるのを見て尋ねました。

『私は毎朝食事前に、此處へ來る事にしてゐるのです。今まで誰れも、此處へ這入つて來やうとは想ひませんでした。こゝは私の家です。こゝへ這入つて來られた人には、お名前をたづねなければなりません。あなたは一體どなたですか。』

『お姫さま、私はユダヤ人です。イスラエルの律法を學んでゐる學生です。私の故郷はソロモン王の領地のアッコオです。私の父も母もとうに死んでしまひました。私は大層貧乏してをりますので、食物を求めて昨日家を出たのです。日が沈んでから、私は牛の毛皮にくるまつて野原にやすみました。そしていろいろ樂しい夢を見てゐる中に、突然この屋根の上に落ちたのです。毛皮の中から首を出してみると、大きな大きな鷲が海の上を舞つてをりました。私はこの鷲にさらはれて此處へ來たのです。お姫さま、御招待も受けずにこゝへ來た事をお赦し下さい。そして、どうぞ私を他所へ行かせて下さい。』

『そんな事は出來ません。』

『なぜでございます。』

『この塔には一つも出口が無いのです。』

『私は何かに化されてをるのでせうか。』

いゝえ、そんな事はありません。』

『では、あなたは、天女ですか。』

『いゝえ。』

『なぜこの塔には出口が無いのでせう。』

『誰れも這入つたり出たりする事が出來ないのです。たとへ出口があつても出られないのです。此處は廣い海の岩の上です。どんな船でも王の許しがなくては、此處へ近づく事は出來ません。』

『お姫様、どうぞ私を御覽にならないで下さい。私はこのボロ〳〵の服が恥かしいのでございます。』

『そんな御心配はしないで私についていらつしやい。あなたによく似合ふ服のある部屋へ御案内しませう。そこでお顔をお洗ひなさい。それから朝ご飯を食べる事にいたしませう。』

姫君は乞食を部屋へ通しました。乞食はそこで着物を更へて、顔を洗つて、そして姫君のところへ來ました。姫君は乞食を見てびつくりしました。これまでこんな立派な若者を見た事がなかつたからです。

姫君はこの若者が大層好きになりました。

それから暫くの間、姫君は乞食の若者と一しょに暮してゐりましたが、すつかりこの若者が氣に入つてしまつて、とう〳〵若者と結婚したいと思ふ程になりました。そこで、その事を話しますと、乞食の若者も夢かとよろこんで、早速承知いたしました。

『では私が結婚の證書を書きませう。』と乞食の若者が言ひました。そこで姫君　羊皮紙と鵝ペンをそこへ出しましたが、インキがありませんでした。

『どうしませう、インキがあ　ません。』と姫君がいふと、

『差支へありません。私かい〻代用品を作りますから。』

と乞食はいつて、自分の腕をナイフで突いて血を出しました。そして姫君の右手をとつて、指に黄金の指環をはめました。この指環は乞食のお母さんが死ぬ時、乞食に與れたもので、いつもはなさず小指にはめてゐたものでした。

『この指環をしるしとして、モーゼの律法によつて、私たち二人は結婚いたしませう。神樣と天使とが私たちの結婚の證人です。』と乞食の若者がいひました

二人が結婚してから、しばらくの後、二人の間には可愛い赤ん坊が生れました。

すると、惡魔のアシモダイがこの事をソロモン王に傳へましたから、ソロモン王は驚いて、すぐに姫君のところへ行く事になりました

ソロモン王は、海の中の岩に着くと、すぐ塔の出入口の閉ぢた煉瓦を檢査しましたが、別に手を觸れた跡は見えませんでした　で王は、家來のものに命じて、煉瓦をとり除かせて、そこから塔の中へ這入つて行きました。

王樣はすぐさま塔を守つてゐた家來を殘らず呼び集めました。家來たちは、死刑にされるかもしれないと思つて、皆な青くなつてしまひました。

『お前達は姫の結婚について何か知つてゐるか。お前達は結婚式に出席したのか。』

王樣は一目見廻して尋ねました。

『いゝえ、何にも存じません。

『よし、それに相違ないかどうか、姫のところへ行つて聞いて來る。それ迄そこを動くな。』

王樣はかう言つて姫君の部屋へ這入つて行きました。そして姫君に尋ねました。

『姫、お前が結婚したと言ふのはほんとかの。』

『お父さま、その通りです。』

『お前の良人といふは一體何者だ。』

『貴いユダヤ人です。神樣がおつかはしになつたのです。あの人はこの國中で一番立派な若者です。』

『お前はその男を愛してゐるのか。』

『愛してをります。』

『彼を呼べ、會つて見よう。』

姫君は良人を王樣のところへ連れて來ました。姫君の良人は、王樣の顏を見て、驚いて、

『おゝソロモン大王樣！』と、恐る〳〵叫びました。

『うむ、お前が姫の良人か。』

『さやうでございます。』

『お前は結婚の證書を持つてゐるだらうな。』

『はい、こゝにございます。』

『それから、お前の身の上をきかせてくれ。』

そこで姫君の良人は自分の身の上を話しました。話が終つた時には、王樣は彼をしかと抱いて祝福しました。

王樣は、この貧しい乞食こそ姫君の良人となるやうに決つてゐた人であることを初めて知りました。王樣はこの若者が、世界で一番美くしい姫君の良人として、はづかしくない程の學問もあり、立派な人であるのをよろこびました。

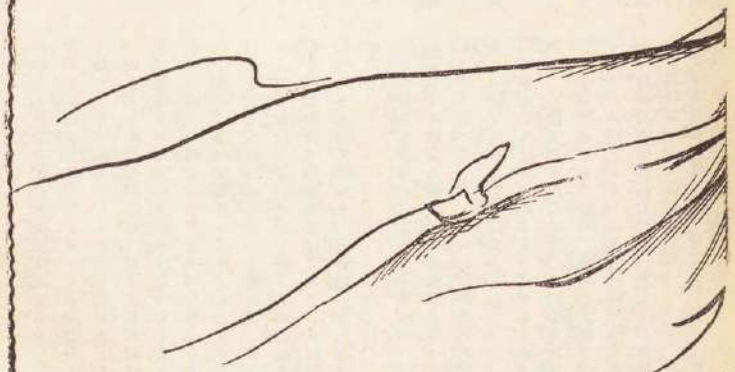
姫君と若者とは、それから死ぬ迄仲よく暮しました。（をはり）

蚊帳つり

若山牧水

蚊帳つろ蚊帳つろ蚊張をつろ
蚊が鳴く蚊が鳴く蚊帳をつろ

かかさま蚊帳つろ蚊が鳴くに
あれあれあんなに蚊が鳴くに
蚊張つろ蚊帳つろ蚊帳をつろ
今年初めての蚊帳をつろ



世界名作童話物語

乞食の騎士

森川一郎

昔、フランスにアミスとアミールといふ大層仲のよい二人の友達がありました。この二人は心持も同じやうだつたし、その上顔や姿まで一寸見分が付かぬ位よく似てゐました。

仲よい二人のことですから、一緒にローマのお寺へ行つて洗禮を受けました。その時お寺の坊さんは金や寶石で美しく鏤めてある二つのお盃を下さいました。そのお盃は二つとも形も飾りも同じこしらへでしたから、仲のよい二人にとつてはどんなに嬉しかつたことでせう。それから云ふものは二人は互に自分達の心をこのお盃が暴ぎ合せて與れるほどに思つて、大切にして、決して手放したことはありませんでした。

大きくなりますと、アミスもアミールも勇ましい立派な騎士になりました。そして戰さに出る時はもちろんのこと、平常でも互に助け合つていつも仲よく暮してゐました。

やがて二人はそれ〴〵お姫さんを貰はなければならぬやうになりました。アミスはフランスの王樣の姪にあたる方を貰ふことになりましたし、アミールは王樣のお姫さまを貰ふことになりました。

ところが同じ騎士のアルドレスと云ふ人がお姫さまを貰ひたいと王樣に願ひ出ましたので、王樣は止むなくアミールと勝負をさせて勝つた方へ姫をやらうと云ひ出しました。

いよ〴〵その決鬪の日になりましたけれども、運惡くアミールは病氣になつてしまつてとても勝負に出ることが出來なくなりました。無理に出れば負けるに決つてゐます。それかと云つて斷つて出ないでゐれば、アミールは卑怯者だ、意氣地なしだ、と深山の人に嘲られる上に、お姫さまはアルドレスに貰はれてしまふのですから、大變困つてしまひました。

その時平常から仲のよいアミスが、

『よし、それなら僕が君の身代りになつてやらう。』と云つて、アミールの紋の付いた鎧や兜をつけて決鬪の場所に行きました。

工合のいゝことにはアミスはアミールと顔容がよく似てゐましたので、それを見た王樣や相手のアルドレス始め、見物の人達まで誰一人アミスがアミールの身代りになつてゐるとは氣が付きませんでした。そして、首尾よく決鬪に勝つてしまひました。

アミスは勝つてそのことをアミールに話すと、

『あゝ有難う、アミス君、この御恩は一生忘れないよ。』と云つて、アミールはアミスの手を堅く握りました。

『なんの、君、お互ひさまじやないか。』とアミスは云ひました。

アミスが命がけで盡して與れました爲めにアミールは目出度く王樣のお姫さまをお嫁さんに迎へることが出來ました。

アミスもまた王樣の姪にあたる方を貰つて二人とも幸福に暮すやうになりました。

ところが、暫くたつてから可哀さうにアミスは人のいやがる癩病にとりつかれましたので、その幸せも忽ち癩病の體と同じ樣に頽れてしまつたのです。その頃癩病と云ふ病ひは、神さまのお咎めを受けた人だけがかゝる病のやうに云はれてゐました。もと〴〵アミスは友達を思ふ情け心からとは云ひながら、その身代りになつて、アミールの名をかたつてアルドレスを殺したのですから、神樣のお咎めを受けたものでせう。

癩病になつては世間の人達と交際をする事も出來ませんし、それかと云つて家にばかり引き籠つてゐる譯にもゆきませんので、アミスは乞食をして國々を渡り歩くより外に仕方がありませんでした。或日のこと仲よしのアミールにも知らせず、そつと家を抜け出して、頭には頭巾をすつぽり被り坊さんのやうな衣を着て、鈴を鳴らしながら町から町、村から村へときまよひ歩きました。かうして鈴を鳴らして歩いてゐれば癩病だと云ふことがすぐ判るのですから、誰も彼もその鈴の音を聞いて氣味惡がつて、中々近づきませんでした。たまに可哀さうだと施しのお金をくれる人でも、遠くからこはく投げるのですから、アミスの心持の淋しいこと、悲しいことは例へやうもありませんでした。

こんな風ですから、アミスはほかの乞食よりずつと貰ひも少ないので、涙の出し切れないほどつらい旅を續けてゐました。一日歩いてへと〳〵に疲れても、食べることも出來ない日が幾日あつたでせうか。ですから月日のたつにつれてアミスの體はよくなるどころかだん〴〵と惡くなつて、今は見る影もないほどやつれてしまひました。

かうして長い間、辛い旅を續けてゐました

が、アミスは或日のこと、大きなお城の門にさしかゝりました。このお城は昔伸よしであつたアミールが、その後出世してお大名になつて棲んでゐるお城でした。アミスはそれとは知らずに、何か施しを貰はうと思ひまして、門番にいつものやうにお盃を出しました。このお盃は昔アミールと二人でローマのお寺の坊さんから揃つて戴いたものです。それをアミスは今何持つてゐて、物を貰ふ時に受ける道具に使つたり、咽喉が喝いた時、小川へ行つて水か飲むのに使つたりしてゐたのです。

ところがお城の門番はそのお盃を一寸見て吃驚してしまひました。と云ふのはこれは嚴様のお持ちになつてゐるお盃と寸分違はなかつたからであります。門番が、『この乞食め、ひよつとしたら殿様のお盃を盗み出したのではないか知ら』と思つたのも無理はありません。そこで門番は早速このことを殿様のアミールに申上げました處、アミールは不思議に思つて乞食を連れて來させて、そのお盃を持つてゐる譯から、その身の上なぞを聞きたゞして見ますと、確かに昔の伸よしで、大恩人のアミスに違ひありませんでしたから、躍り上るほど喜んで、

『あゝ有難い。これは吃度神さまのお引合せに違ひない。アミス君、僕はアミールだよ。』と云ひましたので、アミスもどんなに驚き、そしてどんなに喜んだことでせう。

アミールの奥方も、アミスのことは兼々聞いてゐましたので、自分のお部屋から駆け出して、涙をぽろ〳〵こぼしながら喜びました。

そして體の癒るまで家にゐてくれと、しきりに親切に云つて奥れますので、アミスも斷り切れないで、この城に厄介になることになりました。

アミールと奥方とは、人の厭がるアミスの病氣にも少し厭な顔をしないで、立派なお部屋へ入れて、毎日手厚い介抱や、もてなしをしました。

神様のお告げを受けて、癲病になつたやうな者を家へ置くと、その身も神様から罰を受けると云はれてゐましたけれど、アミールはたとへ神様から罰を受けても、恩人で伸よしの昔の友達の爲めに盡さうと思つたのであります。

ある晩、アミスとアミールとは同じ部屋に寝てゐました。夜が更けた時、アミスの鼾で、

『もう眠つたのか。』と云ふ鼾がしました。

アミスは、アミールが睡藥をかけたものと思つて、

『いや、まだ眠つちやゐないよ。』と答へました。すると、

『おゝ、よく返事をした。實は私はラフアエルだよ。神様のお使ひだよ。お前のお祈りの立派なことや、お前の心が天國にゐる人達のやうに淳らかなことも神様がよく御存じだから、私はお前の病氣を治す方法を教へに來たのだよ。若しお前がその病氣から癒りたいと思ふなら、アミールに二人の子供を殺して貰つて、その血で體を洗へばいゝのだよ。』

アミスは大層驚きました。

『アミールに子供を殺させるなんて、そんなことが私に出來るものですか。』と云つてきつぱり斷りました。すると天使は、

『アミールは吃度それをするだらうよ。』と云つて出てゆきました。

アミールはその時眠つてゐましたが、どうだ不審が解けないで、しきりにアミスにその譯を訊ねましたので、たうとうアミスが隠し切れなくなつて、ありのまゝをお話してしまひました。

アミールは遂にその事を聞いて、顔が眞青になるほど苦しみました。然し、昔自分の爲めに命までも捨てる覺悟で身代りになつて決闘をして奥れたことを考へたり、またアミスの病氣も、もとはと云へばその事から來てゐるのですから、今、神様のお云ひ付けだとあればさうしなければならないと決心しました。

アミールは、アミスが決してそんなことはして奥れるなと云ふ言葉には、別にするともしないとも答へないで、その儘部屋を出てゆきました。そして、奥方のところへ行つて、今からお説教を聞きに行つて來るがよいと云ひましたので、奥方は何も知らずに出てゆきました。

その後でアミールは寢臺の上にすや〳〵と眠つてゐる可愛い二人の子供を殺さうと劍を拔いて近づきました。しかし、いくら友達への御恩返しだからと云つて、中々可愛いわが子を殺せるものではありません。

やら人殺がしたやうなので、誰と話をしてゐたのかとアミスに訊れました。

『なアに、誰とも話なんかしてゐやしなかつたよ。僕はいつものやうにひとりでお祈りをあげてゐたのさ。』と云ひました。

然し、アミールは不思議に思つたと見えて、わざ〳〵戸のそばへ行つて見ましたが、誰も來たやうな樣子も見えませんでした。でもま

『可愛いわが子を殺さなければならないなんて、おゝ私は何んと云ふ情けない父親だらう。』

かう思へば、アミールははら〳〵と涙の落ちるのを止めることが出來ませんでした。その涙の滴りは、寝てゐた子供達の顔の上にかかりましたから、子供達はふと眼を覺ましました。見るとお父さんが眼の前に立つてゐますから、にこ〳〵と笑ひました。

『あゝ堪まらない、そんなに可愛らしい顔で笑つて奥れるな。私はもうお前達のお父さんぢやないのだ。神様のお云ひ付けで、お前達の血を流さなければならないのだ。』

アミールはさう云ひながら、心を鬼にして二人の子供の首を劍れました。そして斬つた首を胴に繼ぎ合して、その上からそつと布團をかけて、眠つてゐるやうに見せかけました。

さうしてからすぐにアミスの寝てゐる部屋へ來て、アミスを揺り起しました。

『アミス君、起きて奥れ給へ、私は神様の思召し通りにした。』

アミスは吃驚して起き上りました。

『えッ、では君はたうとう子供さん達を殺し

たのか、あゝ情けないことになつた。』と云つてアミスは兩手で顏を蔽うて泣き出しました。『あゝ、神樣、私はあなたさまのお言葉通りにいたしました。どうぞ親しい友達の病氣を癒して下さいまし。』と祈りながら、アミールは、靜かに友達の體を子供の血で洗つてやりました。すると、不思議にも、見る〳〵アミスの體は元通りの立派なものになつて、一時に癒れ變つたやうになりました。

夜の明けるのを待つて　アミールは自分の立派な着物をアミス　着せました。そして、神樣にお禮を申し上げるために、揃つて町の教會へ參りました。教會の鐘は神樣の思召しによつて誰も叩かないのに、ひとりで鳴りました。その音は如何にも神々しい音でしたから、町の人達はそれ〳〵聞いて驚いて教會の方へ馳せ集りました。

やがて、二人は神樣に御禮を申し上げてから揃つてお城へ歸りました。それを見た奥方は二人ともまるで顏が同じですし、それに着物もどちらにも見覺えがあるものですからどれが自分の夫だか判らなくなりました。奥方が不思議さうな顏をしてぼんやりしてゐるのを見て、アミールは、

『私がアミールだよ、こちらがアミス君だ。もうすつかり病氣が癒つてしまつたよ』と申しました。

奥方は大層喜びましたが、一體どうしてそんなに急に癒つたのかと、聞きましたけれども、アミールはその譯が云へませんでした。

『何も彼も神樣の思召なんだ。癒つた譯なんか聞かぬ方がよい。それよりもお前もお禮のお祈りを上げなさい。

奥方はまだ子供達の殺されたことは知りませんから　夫の云ふ通りに膝まづいて恩人の病氣を癒して下すつたお禮のお祈りを神樣に申し上げました。奥方がさうしてゐる間　アミールは溜息ばかりついてゐました。

お祈りをすませて　まふと、奥方はこの喜ばしいことを、子供達にも見せてやりたいと思つて、召使に云ひつけて、子供達をつれて來させようとしました。

するとアミールは、

『まだ早いからそつと寢かしておくがいゝ。』

といつてそれを止めました。

やがてアミールは自分獨りで思ふ存分泣かうと思つて、子供達の部屋にそつと入つて行きました。するとアミールは吃驚してしまひました。死んだと思つた子供達は、寢臺の上で樂しさうに遊んでゐるではありませんか。劍の跟ば首筋のところに、ほんのすこし、赤くなつて殘つてゐるばかりでした。

アミールは氣が狂ふほど喜んで夢中で、二人の子供を抱き上げ、奥方のところへ連れてゆきました。

『おゝ、見て奥れ、喜んで奥れ。子供はこんなに壯健だ。』と云ひました。

奥方は子供の壯健なことを何故そんなに喜ぶのかと、不思議さうにしてゐました。

それから、アミールは昨夜天使が來て、子供を殺してその血でアミスが洗つてやれば病氣が癒ると云つたことや、自分が心を鬼にして恩人の爲めにその通にしたことを話しました。

奥方は始めてその譯を知つて、これも夢でないかと喜びました。

『みんな神樣のお惠みだ、お祈りを上げよう』

と云つて二人は嬉し泣きに泣きながら、お禮のお祈りを上げました。（なばり）

金の星誌上講演

どちらが偉い？

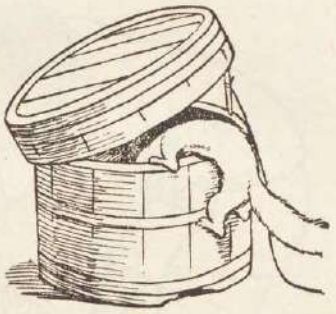
沖野岩三郎

こんな話があります。或所に大へん物事の實驗をする事に興味をもつてゐる老人がありました。其老人、或日の事川原で遊んでゐた子供から、一疋の小い龜の子を貰つて來て、金盥の中に入れて飼ひました。そして毎日熱心に其の龜ばかり眺めてゐますので、お隣りの人が、『お爺さん、あなたは其の龜を眺めてばかり居なさるがどうするつもりです？』

と訊きますと、老人は平氣で、『昔から鶴は千年生き、龜は萬年生きるといふ事だから、私は此の龜が本當に萬年生きるか、實驗してみるんだ。』と答へたさうです。所が其の老人は其の時恰度七十五歳でしたから、七十七の喜の字の祝ひをして、程なく死んだといふ事です。で、お隣の人が來て、『お爺さんも可哀さうに、もう九千九百九十八年生きてゐたなら、あの龜が萬年生きてゐるのを見屆けられるのであつたが……』と云つて泣いたといふお話があります。これは人間が、どんなに偉さうな事を言つても、鶴の十分の一も龜の百分の一も生きられないといふ事を笑つたお話でせう。成程さう言へば、八幡太郎義家は雁に伏兵のある事を敎へて貰ひ、源頼朝は水鳥のお蔭で、平の維盛の大軍を追拂つて貰つたのですから、人間よりも鳥や獸の方が遙かに偉いと云ふべきかも知れません。人間には博士といふものがあつて、いろ〳〵な理窟を申します。けれども『天氣豫報』などに、當らない事が度々あります。今日は晴だといふので、新聞を見て安心して出て行つて、一枚しか無い羽織をぐしよ〳〵にしたり、今日は雨降りだといふので、厄介な傘をもつたり、レインコートを着込んだりして出かけると、かんからかんの晴天であつたりする事が度々あります。けれども蟻や鳥は、一日前から、すつかり明日の雨降りだといふ事を知つてゐるらしいです。博士達が考へて作つた地震計といふものがあります。それによると、地震が少うし搖れても、直ぐわかるのださうですが、

狐や雉子は、地震計も何にももつてゐませんが、人間よりも先に、小さい〳〵地震が搖れても、直ぐケンケン、コン〳〵と鳴きます。田舍の山の中に居ると、狐や雉子の聲を聞いて、『あ、地震だ。』といふ事を人間が敎へられるのです。

歐洲戰爭では、鐵砲、飛行機の外に、毒瓦斯といふ恐ろしい武器（？）を獨逸軍が盛んに使ひました。それは近來の大發明だといつてゐましたが、動物の中の鼬といふ獸は、もう何千年何萬年前から、此の毒瓦斯を使つてゐました。私が十五六歳の頃、紀州の山奥の村役場で小使をしてゐる時でした。度々炊いた御飯が何物かに盗んで食べられるので、乞食か猫か、犬か……と考へて注意してゐますと、或日の事一疋の鼬が、床下から出て來て、巧みにお櫃の蓋を開けて、御飯を食べてゐるのを見ました。それを見た私は、同じ小使の串といふ子供と二人で、鼬を捕る相談をしました。そして二人はお櫃の蓋とお櫃



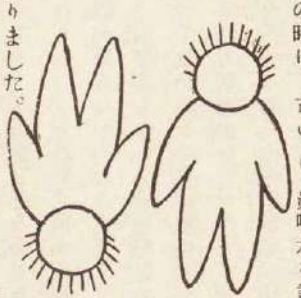
との間へ三寸ばかりの箸の折れを立てゝ、其の箸に紐をつけて事務室の中へ引いて置いて、隠れて見てゐるとすると、鮪は人間がそんな事をしてゐるとは夢にも知らず又たお櫃の中へ入つて御飯を食べようとしました。其時私は『今だ！』と思つて紐を引きますと、お櫃の蓋はコトリと落ちて、うまく鮪をお櫃の中へ閉ぢ込めました。串といふ子供は、矢庭に飛んで行つてお櫃の蓋を堅く押へて、『大丈夫、大丈夫、い、、、、いたちは此中に入つてゐる！』と叫んで、私を招きました。私ゝ走つて行つて、『どうして殺す？　水へつけてやらうか。』と言ひました。串は其時、お櫃の底と蓋とを兩手で、しかと押へたまゝ其のお櫃を上に下に振りました。お櫃の中では鮪が御飯と一緒に、ことんこつんと鳴つて、鮪は隨分頭を打つたやうでした。

『チャッ、チャッ、チャッ。』

と三聲鳴く聲が聞えたと思ふと、串は『あッ！』と言つて、お櫃を一間ばかり前の方へ投げ出しました。私も『うーん：』と言つて倒れ乍ら、表の方へのたり出ました。さア大變です、鮪は自分の生命が危いと思つたので、豫てから用意してゐた毒瓦斯をうんと放つたのです。すると室中が毒瓦斯の香ひで、とても人間は居るに堪へられませんでした。私は其のお櫃を川へもつて行つて二日の間水の中へ浸けて置きましたが、どうしてもそれを使ふ氣になれませんので、たうとうそれを植本鉢にしてしまつたのでした。そんな經驗のある私は、先年の歐洲戰爭の時、獨逸の軍人さんよりも、鮪の方がずつと早くから、其の毒瓦斯の事を知つてゐたのだと思ひました。

私がかう申しますと、皆さんは『人間と動物と較べてみて、智慧でも道德でも、動物の方が遙かに偉い、人間よりも動物の方が上だといふ事を一通り承認しませう。しかし世界には、動物の外に、植物といふものがある。これは矢張り吾々と同じ生命のあるものだが、まさか、植物と人間とを比較して、人間は植物より駄目だなどといふ事は出來まい？』と仰しやるかも知れません。待つて下さい。私は今一度人間と植物とを比較して、どちらが偉いかを研究して見ませう。

アール・エッチ・フランセといふ人は『植物の心の芽生え』といふ書物を著はしました。其人の説によりますと、植物の根にある『毛根』は人間の腦髓と同じ働きをするものだといふ事です。毛根には『向水性』があつて、自分の生えてゐる、どつちの方に水が流れてゐるかといふ事をよく知つて、水のある方へある方へ根を伸ばして行くのださうです。草や木は、ぼかんと土に立つてゐるのではなく、やつぱり頻りに考へてゐるのです。唯面白い事には、人間の腦髓は頭の上にあつて、腦髓が空中にふらふらしてゐるのに引易へて、植物の腦髓は土の中に隠れてゐて手や足が空中にふら〳〵してゐるのです。私は子供の時に、古い〳〵蟲喰本を讀みました。其本の中に、日本の太古の言葉『トホ、カミ、エミ、タミ』といふやうな言葉があつて、それを説明した言葉に面白い事が書いてありました。



それを畫で説明しますと、捕畫のやうな形になるので、人間の髪は植物の毛根で、人間の頭は植物の根(芋)に當り、人間の手と足は植物の葉に當るのです。つまり人間は神樣の子で、天の方から產れて來、植物は地の子で土の中から產れて來たのであ

る。だから人間は死んだ時、土ゝ中へ入つて了ひ、植物は空氣に曝され乍ら枯れ死ぬのだといふやうな理窟です。私は時々此の繪の事ゝ思ひ出します。そして此の繪を『サ、ポテン』の繪だと思ひます。だから人間があまり偉さうな事を言つて威張りますと、『サ、ポテン』がえらい元氣だなアと思ひます。そして可笑しくてたまらない事が度々あります。皆さんは、瓜や絲瓜、西瓜などの蔓に、卷鬚といふのがある事を御承知でせう。あれは人間の手と同じ働きをします。あの卷鬚が物に觸ると直ぐ其の鬚の縮れた部分を、廿秒間に延ばして、一時間の後には完全に卷きつきます。しかもそれは理化學の法則に從つて、螺旋狀に鬚を縮ませて、蔓を引上げて行きますので、少々の風が吹いても、あの細い卷鬚は切れません。

植物の葉に就いて面白い話があります。あの『クローバア』や『片ばみ草』は、夜になると、三枚四枚の葉を、ぴつたりと疊み合せてしまひます。あれは葉に小い孔があつて、そこから滋養分を吸ひ込むのです。つまり葉は人間の顔の役目をするのです。所が夜になると、露が葉面に溜ると、其の呼吸が出來ないから、ぴつたりと疊み合つてゐるのです。

ダアウヰンといふ學者は、クローバアの葉が、夜になつても、其の葉を疊み合せないのを見て不思議に思ひました。それから段々研究しますと、すつと長く雨が降らなかつたさうです　つまり、クローバアは、雨が降らないで土地が乾くから、露は置かない、隨つて葉を疊む必要が無いといふ事を知つてゐたのです。天氣豫報をしたのです。

今から二百八十年程前に、伊太利のピザといふ所で死んだガリレオといふ學者は、此の地球が毎日廻轉するといふ説を唱へて、監獄へ入れられた人です。ガリレオは監獄へ入る時、『だつて地球は廻轉してゐるぢやないですか。』と言ひ乍ら、監獄の中へ入りましたが、其時獄中に敷いてあつた麥藁を一本引拔いてみて、大へんな事を發見したのです。それは麥藁の中が眞空であるといふ事でした。

麥や米が、あの重い穗を頭に戴いて、風に吹かれ乍ら折れないのは、其の藁が眞空だからです。五寸周圍の竹で二十貫目のものを荷つても折れないが、六寸周圍の杉や檜で二十貫目のものを荷へば、直ぐぽつきりと折れて了ひます。それは竹の中が眞空であるからです。蝙蝠傘の鐵柄が、中が空虛であつたなら、少々の風にも曲らないが、空虛でなかつたなら、直ぐ、ぐにやりと曲ります。そんな理窟をガリレオのやうな大學者でも、其時まで知りませんでした。けれども麥藁は、もう何十萬年も前から、其の理窟をちやんと知つて、實地に應用してゐました。

西洋のお話に、こんな事があります。或人が神樣を罵つて、『神樣は馬鹿だ。僕が若し神樣だつたら、あんな大きな椎の木には、西瓜のやうな大きな實を結ばせる。そして西瓜のやうな細い蔓には椎の實のや

うな、小い實を結ばせてやる。』と言ひました。恰度其時可なり強い風が吹いて來て、椎の木が搖れますと、ばら〳〵と頭の上から十も十五も椎の實が落ちて來て、其の人の頭に當りました。すると其人は、始めて『俺は馬鹿だつた、若し此の椎の木に、西瓜のやうな大きな實が結んでゐたなら、今、僕の頭は粉微塵に碎けて了つたに相違ない。』と云つて、神樣を賞めたといふ事です。こんな事を言つて來ますと、どうも人間と植物とを比較しても、人間より植物の方が、偉いやうに思はれます。

偖、此の人間と動物と植物と、今一つの鑛物とが存在してゐる場所は、どんな所かといふに、それは地球といふ光りのない一つの星だといふ事は皆さんも御承知でせう。月のない晴れた晩に外へ出て、天を御覽なさい。あなた方の肉眼で見える星が五六千もあります。一等星から六等星まで見えます。望遠鏡では十六等星まで見えます。其の星と此の地球とは、全體どれだけの距離があるかといふに、太陽まで三千七百萬里あるのです。御承知の通り、光線は一秒時間に七萬五千里の遠さまで照します。それだけ光線の放射は早いものですが、それでも太陽の光が地球へ屆くには八分間の時間が、かゝります。しかし一番遠い所にある星から、此の地球まで、其の光りが落ちて來るのに、一秒時間に七萬五千里づゝ流れ走つて、そして六年半かゝらなければ光りが屆かない程遠い所にある星があります。そんな遠い遠い所にある星に神樣が居ると假定して、其の神樣が頗る精巧な望遠鏡で此の地球を見下してゐるとしたなら、何と云ふでせう。

『何千萬の星の中に、光りの無い、小ッぽけな星がある。胡麻粒よりも、もつと小いが、其の粒の上に小さい〳〵埃のやうなものが、うよ〳〵してゐる。あれは全體何といふ黴菌だい。』

『あの胡麻の上に、うよ〳〵してゐる黴菌は、あれは動物です。百千億兆倍の顯微鏡でごらんなさい。其の黴菌の中で、二本の足で歩くのが「人間」で、四本の足で歩くのが「動物」です。動かないのが「木」です。』

『其の二本足の人間といふ埃のやうなものが、白い小さい〳〵ものを動かしてゐるよ。』

『それは金の星といふ雜誌を讀んでゐるのでせう。』

こんな會話が星の世界で演じられてゐるとしたならどうでせう。

偖、私の講演は大變長びきました。四ヶ月もかゝつて、隨分いろ〳〵のお話を致しましたが、私にはやッぱり『どちらが偉い？』といふ事は、はッきり解りません。『どうしても人間は萬物の靈長だ。』といふ證據を握る事は出事ませんでしたね。

今後も誌上講演會は、時々開會致します。入場無料ですから、開會の節は、どし〳〵お出かけ下さい『どちらが偉い？』といふ講演は、ワザと結論をつけないでどちらへも勝負をつけないで置きますから、この問題を皆さんが死ぬまで御研究下さる事を望みます。さやうなら……（をはり）

猿になつた王子の話（つゞき）

中島孤島

（一）

『奥さま。』と呼びかけて、旅僧はなほも自分の身の上話をつゞけるのでした。『わたくしは自分の醜い姿になつたのを見て、しばらくは泣いてをりましたが、そのうちにやう〳〵あきらめて、涙をふきながら山を下つて、平地へおり立ちました。そして一月ばかり歩くうちに、とある海邊へ出ましたので、しばらく岸へ立つて眺めてゐると、半哩ばかりの沖に一艘の船がとまつてゐるのが見えました。

恰度いゝ凪の日でしたから、こんな機會はないと思つて、太い木の枝を一本折つて、濱邊へ引いて來て、それへのつて二本の棒を櫂につかつて船の方へ漕ぎ出しました。

かうして、だん〳〵船の方へ漕ぎよせてゆくと、船の上では、水夫や、旅客などが、みんな甲板へ出て珍しいものでも見物するやうに、わたくしを見て、びつくりしてをります。

そのうちにわたくしはやう〳〵船のそばまで漕ぎつけたので、綱へ手をかけて、甲板へとびあがりました。

けれどもわたくしはもう人間の言葉がつかへなくなつてをりましたので、どうしたらいゝかと當惑してしまひました。また實際わたくしは前に魔の手につかまれた時に劣らないほどの危險に臨んでゐたのです。

迷信が深くつて、つまらないことを氣にする商人らは、その迷信の上から、猿を船へのせれば、航海中にきつとわるい事があると考へたのでした。ですからわたくしが甲板へとびあがつたのを見ると、そのうちの一人がいきなりかう叫びました。

『いけない〳〵、その縁起のわるい畜生をはふり出しちまへ！』

『金挺でぶち殺しちまへ！』と、ほかの一人がいひました。

『なに、弓をもつて來て射殺した方がいゝ！』

といふものもありました。

ぐづ〳〵してゐたら、本當に殺しかねない樣子でしたから、わたくしはいきなり船長の前へとんで行つて、足もとへすり寄つて、着物の裾をつかみながら、ぽろ〳〵と涙を流して、慈悲を乞ふやうに手を合せて拜んで見せました。この仕打が船長の同情をひいたと見えて、船長はすぐにわたくしを庇つてくれて、甲板の人々にかういひました。

『みなさん、この猿はわたくしに助けてくれといつてをりますから、助けてやりたいと思ひます。かうしてわたくしが保護してやりますからは、どなたにも手出しをなさらないやうに願つておきます。』

かういつて、船長はわたくしの頭を撫でてくれました。

口こそきけませんが、わたくしには船長のいふことがなんでもわかるので、それからはいつも船長のそばについてゐて、いろ〳〵な用をしました。

それからわれ〳〵はまた航海をつゞけましたが、始終順風がつゞいて、五十日ばかりして一つの港へ着きました。そこはある大國の首都として、人口も多ければ、商業も盛んな大都會の入口になつてをりましたので、われ〳〵の船はこの港へはひつて、碇をおろしました。

船が着くと、もうぢきに澤山の小船が漕ぎよせて來ました。小船の中には、無事に到着した友人を出迎へに來た人や、故郷のたよりを聞きに來た人や、たゞ長い航海をつゞけて來た異國の船を見物に來た人なぞが、一ぱいのつてをりました。その中にこの國の王から派遣された四五人の役人がまじつてをりました。役人らは甲板へのぼると、船中の商人らに向つて、かういひました。

『わたくしどもは主君の命を受けて、一つにはあなた方の無事な到着を祝ふため、また一つには、この卷物へ一二行づゝの文字を書いていただくことをおねがひするためにまゐつたのです。これにはすこし譯のあることで、實はこの國の宰相は、政治上の手腕ばかりでなく、書法にかけても非凡な技能をもつた人でしたが、この宰相がつひ四五日前になくなりました。王には非常にお歎きになつて、日頃宰相の能書に心から敬服してゐられたところから、故人にも劣らないほどの能書家でなくては、宰相の地位をつがせまいといふ誓ひを立てられたのです。ところが國中をさがしても、一人として、なくなつた宰相のあとをつぐだけの技能をもつたものがありません。それであなた方にまでこんなおねがひをいたすわけなのです。』

この話を聞いて、商人のうちで、われこそ達筆をふるつて、宰相の地位を占めようといふ自信をもつたものは、思ひ〳〵にその卷物へ何か少しづゝ書きつけました。みんなが書いてしまふと、わたくしは進み出て、いきなり役人の手から卷物をひつたくりました。

それを見ると、一同がびつくりしましたが、中にも商人らは仰山な聲を立てて、

『あれ、早くとらないと、引裂いて、海へ投げこんでしまふだらう。』

と騒ぎ立てました。

けれどもわたくしが卷物を兩手でちやんと持つて『今度はわたくしの番です。』といふ風をして見せるとみんながやつと安心して、感服したやうにじつとわたくしの方を眺めてをりました。

その時、船長はふたたびわたくしを庇つて、かういつてくれました。

『かまはずに書かせて見させう。もし紙を汚すだけでしたら、わたくしがきつと罰を加へてやります。その代りもしわたくしの見込通り、立派に書けましたら――いや、實際こんな利口な、はしつこい、物わかりのいゝ猿はまだ見たことがありませんから、多分出來るだらうと思ふのですが――わたくしはきつと子にして養つてやります。わたくしの死んだ伜はこれのすることの半分も出來ませんでしたよ。』

これでもうだれも何ともいはなくなつたので、わたくしは筆をとりあげて、墨をどつぷりとひたし、アラビヤ人の用ひてゐる六種の字體で、それ〴〵に王の德をほめた二行から四行の詩句を書きつけました。

わたくしの筆蹟は、商人らの書とはくらべものにならなかつたばかりでなく、實際のところこの國にはこれまで見たこともなかつたほど立派なものでした。

わたくしは書いてしまふとすぐに、卷物を役人にかへしました。役人はそれを受取つて、王のところへ持つてかへりました。

（二）

王はわたくしの書を見ると、ほかのものはもう目にはひらないくらゐに氣に入つてしまつて、役人に向つて、かういひました。

『わしの厩のうちで、一番いゝ馬に、一番いゝ馬具をつけ、そしてこの六通りの書體を書いた者に似あひさうな錦の上衣をもつて行つて、すぐにその者をこゝへつれてまゐれ。』

この命令をきくと、役人は思はずふき出してしまつたので、王は顏色をかへて、役人らの無禮をお怒りになりました。

『わしがいひつける事をきいて、なんで笑ふのか？』

『陛下。』と役人らは答へました。『失禮の段は幾重にもおゆるしをねがひます。が、この文字を書きましたものは、人間ではございません。猿でございます。』

『なんと申す？』と王は自分の耳を疑ふやうにかうきゝかへしました。『こんな美しい文字を書いたものが人間でないといふのか？』

『はい、陛下。』と役人らは答へました。『わたくしどもの目の前で、一匹の猿の書きましたものに相違ございません。』

かうきくと、王は大へんにびつくりした樣子でしたが、もうその上、なにもきゝたくないといつたやうにかういひつけました。

『わしが申しつけた通りにして、その不思議の猿をつれてまゐれ。』

役人らはまた船へ引きかへして來て、王の命令を船長に傳へると、船長はかう答へました。

『王樣の御命令とあれば、わたくしに異存はございません。』

そこで役人らは立派な錦の上衣をわたくしに着せて、岸へ漕ぎもどると、用意の馬にのせて、王宮をさして進みました。そこでは王が大勢の廷臣を集めて、わたくしの到着を待ちかまへてゐたのです。

いよ〳〵われ〳〵の行列がくり出しますと、港でも、町でも、廣場でも道筋にあたるところは、窓にも、物見にも、宮殿にも、民家にも、一ぱいの人だかりでした。みんな王が猿を大宰相に選んだといふ噂をきいて、わたくしを見物するために町中から集まつて來た人たちでした。

わたくしはいゝ觀世物にされて、これらの人々の口から洩れる喝采の聲をあびながら王の宮殿へ着きました。

その時、王は大勢の貴人にとりまかれて、玉座に着いてゐましたが、わたくしは王の前へ進んで、三たびおじぎをして、そこへ膝まづいて、地に口をつ

けた後、自分の席へ着きました。

並みゐる人々は、いかにも感心して見てをりましたが、どうして猿がこれほどまでに王に對する禮のしかたを心得てゐるか、不思議だといつた樣子でした。王自身はほかの人々よりも一層びつくりしたやうでした。つまりわたくしはたゞ口をきかないばかりで、謁見の儀式には、一つも缺けたところがなかつたからでした。

王は侍從長と少年の奴隷とわたくしだけをのこして、廷臣一同をさがらせた後、謁見の室から自分の居間へ移つて、そこで食事の支度をいひつけました。

食事の用意が出來ると、王は手まねでわたくしに、『こゝへ來て一しよに食事をしろ。』といひつけました。で、わたくしは幾たびも地へ口をつけた後、立ちあがつて食卓に向ひ、禮儀作法を守つて食事をすませました。

食卓の上がまだ片づかないうちに、わたくしは寫字臺をとりよせて、一つの桃の實へ、王に感謝の意をこめた短い詩を書いて差出しますと、王はそれを讀んで、いよ〳〵驚いた樣子でした。そのうちに人人は皿を殘らずさげてしまふと、その後へ王の飲料の酒を運んで來たので、王はわたくしにも盃をやれといひつけました。わたくしは盃を乾して、またそれへ、自分が樣々な辛苦を重ねて、とう〳〵今の有樣にまで落ちて來た次第を述べた詩を書きました。

王はそれを讀むとひとりでかういつて感歎しました。

『人間にしてもこれほどの才能があれば、千萬人の上に立てるであらう。』

そのあとで王は將棋盤をとりよせて、また手まねで、かうたづねました。

『將棋がさせるなら、わしと一番さして見ない

か？』

わたくしは地へ口をつけて、手を頭へのせて、『仰せにしたがひませう。』といふ意味をあらはしました。

第一番は王の勝になりました。しかし二番と三番はわたくしが勝ちました。すると王は幾分か機嫌を損じたやうに見えたので、わたくしは王をなだめるために、また四行の詩を作つて見せました。

かうしたいろ〳〵な事が、これまで見たり聞いたりした猿の智恵からはとびはなれてゐるので、王はこの不思議を自分だけで見てゐるのが、惜しいやうな氣になりました。王には一人の王女があつて、ここにゐる侍從長が、この王女の御用係を兼ねてをりました。そこで王は侍從長に向つてかう命じました。

『ちよつと行つて、王女を呼んで來てもらひたい。わしが見せたいものがあるからといつて。』

侍從長はすぐに王女をつれてかへつて來ました。

その時王女はヴェールをはづして、顏をあらはしたまゝはひつて來ましたが、部屋の入口まで來ると、大いそぎでヴェールを被つて、王にかういひました。

『陛下、どうなすつたのでございます。男の方のゐらつしやるところへ、わたくしをお召しになるなんて、あんまりではございませんか？』

『はて、お前はなにをいふのか？』といつて王はびつくりしたやうに王女の方をながめました『こゝには年のゆかない奴隷と侍從長とわしのほかにはだれもゐないではないか？　みんなお前の顏を見ても差支へのないものばかりだのに、なんでヴェールをおろして、呼びにやつたわたしを責めるのか？』

『陛下。』と王女は答へました。『わたくしの申すことに間違ひのないことは、すぐにおわかりになりませう。その猿の姿をしてをりますのは、ある大國の王を父にもつた若い王子ですが、魔術の力で猿に變形されたのでございます。魔王エブリスの娘の子にあたるヤリアリスが、自分の妻としてゐた黑檀島の王女を殺して、この王子を猿にいたしましたのです。』

この言葉にびつくりした王は、急にわたくしの方を見かへつて、もう手まねでいはずに、言葉にあらはして、王女の言ふことが、本當か、どうか、とたづねました。

わたくしには口はきけませんから、手を頭へのせて王女の言ふ通りだといふ意味を示しました。

そこで王はまた王女に向つて、かういひました。

『どうして、お前には、これが魔術の力で猿に變形されてゐる王子だとわかつたのか？』

『陛下。』と王女は答へました。『おぼえてゐらつしやるかどうか存じませんが、わたくしのやつと物心のついた時分に、わたくしについてをりました老女がございました。これが魔術の名人でございまして、その術を七十ばかりも教へてくれました。それをつかへば、瞬くうちにこの都をコーカサス山のむかうへ移して、この地を大海の底へ沈めて、この都の住民を悉く魚にすることも、何でもありません。その術によつて、わたくしには一目見れば魔術にかけられてゐる人がすぐにわかるのです。ですから、今こゝでこの王子の魔術をといて、本來の姿にかへしてあげたからといつて、少しも不思議なことはございません。』

『姫よ』と王はいよ〳〵驚いたやうにいひました。

『わしはお前がそんなことまでも知つてゐやうとは夢にも思はなかつた。』

『陛下。』と王女が答へました。『どれもみんな不思議な術で、習ふだけのねうちはございますが、といつてそれを自慢にしてはならないと思ふのです。』

『それならば。』と王は王女の顏を見つめながら力を入れていひました。『お前にはこの王子の魔術を解い

てあげることが出來るのだね？』

『はい、元の姿にしてあげらゝます。』と王女はきつぱりと答へまた。

『では、さうしてもらひたいね。』と王は熱心に望みました。『さう出來れば、こんな喜ばしいことはない。

わしはあれを宰相にして、お前と結婚させたいと思ふのだから。』

『陛下、何事も仰せに從ひます。』

かういつて、王女はしづかにこの部屋を出てゆきました。

（三）

間もなく女王は一つの小刀をもつて、戻つてまゐりました。その小刀の刃にはヘブライ文字でなにか呪文のやうなものが彫つてありました。

その時、王女は王と侍從長と小さな奴隷とわたくしを王宮の中庭へおろして、それをとりまいてゐる廻廊の下へ立たせ、自分でお庭の眞中へ立つて、地上に大きな圏をかき、その中へアラビヤ文字で、いくつかの言葉を書きました。

それがすむと、王女は圏の眞中へ立つて、呪文を唱へ、聖經の中にある句を口の中で繰返しました。

するとこの時まで晴てゐた空が、次第に暗くなつて、世界の終りが來たかと思はれるばかりの物凄い光景になつたので、一同は思はず顔色をかへました。

その時、忽然として、エブリスの娘の子にあたる魔が、大山の動き出したやうな姿をあらはして、炬火のやうな二つの眼でわれ〳〵をにらみつけたので一同はちゞみあがつてしまひました。

それを見ると、王女は聲を張りあげて叱りつけました

『だれもお前によく來たとはいはないよ。』

すると魔は怖ろしく大きな獅子の姿にかはつて、王女に跳びかゝらうとする勢を示しました。

『だめ〳〵！』と王女はまた叫びました。『わたしの前へ這ひつくばはうとはせずに、そんな姿になつて、わたしをおどさうとするのか？』

『この謀叛人め！』と獅子が哮り立てました。『よくもあれほど嚴重な誓ひを立てゝ、互に邪魔をすまいと約束した言葉を破つたな！』

『畜生！　お前こそ誓ひを破つたではないか？』

『あゝ、おれが苦しめた報いを受けろ！』

いふや否や、獅子はくわつと口をあいて、王女を

めがけて跳びかゝりました。

けれども王女は、その時、ひらりと身をかはしながら、一本のかみの毛を抜いて、二言三言、何か呪文を唱へると、毛は鋭利な劍になつたので、それでもつて獅子を三つに切りました。

するとまつ二つになつた獅子の胴體は、どこへか飛んで行つて、頭だけがあとにのこつたと思ふうちに、それが大きな蠍になりました。王女はすばやく蛇にかはつて、蠍に向つてゆく、蠍はかなはないと見ると、鷲になつて飛んで行く。それを見た蛇は、一層大きな鷲になつて、あとを追つたが、ちきに二つとも見えなくなつてしまひました。

しばらくすると、目の前の地がぱつと裂けて、白と黑の斑の猫が跳び出して、全身の毛を逆立てながら、氣味のわるい鳴聲を立てた、と思ふうちに、まつ黑な狼がつゞいてあとからおつかけて來ました。猫はおひつめられたと見ると、忽ち地蟲に變じて、その時恰度溝のそばにある柘榴の木から落ちた實の中へもぐりこんで、かくれてしまひました。

柘榴の實は見る間にふくれ出して、瓢ぐらゐな大きさになると、自然に廻廊の屋根へ飛び上つて、しばらくはごろ〳〵とあつちこつちへころがつてゐたが、そのうちにまた中庭へおちて、微塵に碎けて、種子を八方へまきちらしました。

狼はそれを見ると、すぐに雄鷄になつて、柘榴の種子を、一粒づゝ拾ひはじめたが、一つのこらず拾つてしまふと、急にわれ〳〵のゐるところへ來てもう一粒ものこつてゐないか？　とたづねるやうに羽搏きをしたり、鬨をつくつたり、大變な騒ぎをして、さがしまはるのでした。

すると溝のふちに、たつた一つ落ちてゐた種子があつたが、鷄が目早くそれを見つけて、走りよつて拾はうとすると、種子はひとりでに溝の中へころげ落ちて、小さな魚になつて泳いで行きました。雄鷄

もすぐあとから飛びこんで、梭魚になつて、その魚のあとをおつて行きました。

それから二時間あまりも、ふたりは水の中へもぐつてゐたので、どうなつたことかと思つてゐると、ふいに怖ろしい叫聲が聞えて、魔も王女も、全身焔に包まれながら、水からあがつて來ました。ふたりは、口からも、目鼻からも火焔を吐きながら、追ひつ追はれつ、中庭を駈け廻つてゐたが、立のぼる焔のすさまじさは、今にもこの宮殿に燃えうつるかと危ぶまれるばかりでした。

そのうちに魔はいきなり怖ろしい叫聲をあげて、われ〳〵の立つてゐる廻廊の方へ駈けよると、われわれに向つて火をふきかけました。この時、もし王女がすばやく駈けつけて來て、魔をかけ隔てゝくれなかつたら、われ〳〵はひとりのこらず燒き殺されるところでした。

王女はすぐにわれ〳〵の前に立ちふさがつて、魔の顏をめがけて、盛んな焔を吐きかけたので、魔も餘儀なくあとへさがつたのですが、それでもこの時魔の口から吐いた火焔のために、王は髯を燒かれて顏の半分を焦がし、侍從長は火花に打たれて、黑焦になつて死んでしまひました。その時、わたくしはまだ猿の姿でをりましたが、小さな火花が右の眼へはひつて、片目をつぶされてしまつたのでした。

われ〳〵はもう助からないものと覺悟をきめた時ふいに火焔の中から、

『偉大なる神よ！　偉大なる神よ！　信仰の敵は倒れた！』

と叫ぶ聲が聞えて、王女は元の姿で烟の中に立ちあらはれたが、魔はもううづ高い灰となつて、王女の足許にころがつてをりました。

王女はすぐにわれ〳〵のそばへ駈けよつて、大急ぎで水をもつて來るやうにと命じたので、すこしの巫我もしなかつた若い奴隷がコップへ水を汲んでゐりました。王女はそれを受取つて、なにか呪文を唱へながら、その水をわたくしにふりかけて、

『魔術で猿になつてゐるなら、姿をかへて、もとの人間におかへりなさい！』といひました。

その言葉の終らないうちに、わたくしは片目をつぶしたほかには、以前とすこしもかはりのない人間にかへりました。わたくしが王女に向つてお禮の言葉をのべようとすると、王女は手で制しながら王の方へ向いてかういひました。

『おとうさま、わたくしはごらんの通り魔を退治しましたが、しかしこの勝利には貴い價を拂ひました。わたくしの命はもう數分間しかありません。怖ろしい戰ひの間に、火がはひつて、わたくしのからだは今じり〳〵と燒けてをりますから、お望みの緣談はもう思ひ切つていたゞかなくてはなりません。わたくしが鷄になりました時、あの一番おしまひの柘榴の種子を早く見つけて、ほかの種子と同じやうに、のみこんでしまつたら、こんなことにはならなかつたのです。魔は最後の城廓として、あの柘榴の中へ逃げこんだので、戰爭の勝敗はあそこできまるのでしたが、あの種子の見つからなかつたのは、やつぱりかうなる運命なのでした。魔は地上でも、空中でも、水の底でも、あらゆる秘術をつくして戰ひましたが、わたくしはいつもその上手を用ひて、攻め立てましたのでとう〳〵敵は火焔の術を出しました。この術にかゝつては、大抵のものは勝ち身はないのですが、天の助けで、わたくしが勝つて、魔を燒き殺すことが出來ました。けれどもわたくしの命ももうすぐに終ります。』

王女が話を終ると、王は悲歎に堪へないやうな調子で、かう叫び出しました。

『姫よ、まあ、わしの身になつて考へておくれ！　あゝ、あゝ！　わしはかうして生きてゐるのが不思議でならない！　お前の用人は死んでしまつたし、

お前が折角魔術を解いてくれたこの王子は、この通り片目を失なつてしまつた……』

その時王女はふいにけたゝましい聲を立てゝ叫び出しました。

『あゝ、燃える！　燃える！』

かういつて苦しさうに胸をおさへました。火はもう王女の胸を燒きはじめたのでした。火は見る間に面へのぼつて來たが、その間も、王女は怖ろしい苦しみの中で、神の名を叫びつゞけました。

王女の聲がやんだ時、そこにはもう魔の灰とならんで、一塊の灰があるばかりでした。

（四）

王は王女を失つた悲みの餘り、どつと床についてしまつた。

一月あまり引籠つておいでになりましたが、やつと床を離れると、わたくしを呼んでかういひました。

『王子よ、わしが今申し出すことを、よくきいてもらひたい――もし用ひてくれなければ、お前の命にかゝはることなのだから。』

『はい、どういふおほせでございませうと、わたくしはきつと服從いたします。』

わたくしがかう答へるのをきいて、王はうなづいてかういひました。

『お前がこゝへ來るまでは、わしは一點のくもりもない幸福な日をつゞけてゐたが、お前が來た日からわしの幸福は一時に消えてしまつた。王女も死ねば侍從長も死ぬ。わしがかうして生きてゐることを思へば、本當に不思議でたまらないくらゐだ。この不幸はみんなお前から出てゐるのだ。だからお前のゐる間は、わしはこの歎きを忘れることは出來まいと思ふ。そこでお前に、今すぐに、だまつてこゝを立ちのいてもらひたいのだ。この上お前がこゝにいたら、わしはきつと死んでしまふ。わしにはお前がこの不幸をもつて來たやうに思はれてならない。わしのいふことはこれだけだ。こゝを立ちのいて、もう二度とわしの領分へはひらないやうにしてもらひたい。もしこの命令にそむいたら、その時はどんなことがあつても容赦はしないから。』

わたくしが何か言はうとすると、王は手で制してかういひました。

『もういゝ、何も言はずにすぐ立ちのいてくれ！』

わたくしは王の前に頭をさげて、だまつてその場をさがりました。

かうしたわけでわたくしは再び世の中からも人からも棄てられて、身のおきどころのない追放者として、王宮を立去りました。それからこの都を出る前に、町の浴場へとびこんで、そこで髭と眉毛を剃り、黑い僧衣を着て、ごらんの通りの托鉢僧の姿になりました。それは全くわたくしの身に染みこんだ罪を懺悔するためでした。わたくしのために二人迄も美しい王女に悲慘な最期をとげさせた事を考へて見ると、わたくしは怖ろしくつて堪らない樣な氣がいたしました。それを思ふと、自分の一身の不幸などはもう歎くにもあたらないやうに思はれるのでした。

わたくしはそれから長い旅をつゞけて、いろいろな國を通り、多くの都を過ぎて、このバグダッドへまゐりました。それはわれ〳〵信徒の長である教王ハルン、アルランド陛下に拜謁して、わたくしの不思議な身の上話をおきゝに入れ、わたくしの罪をすつかり懺悔したいと思つたからでした。で、先ほど恰度この都の門へ着きましたので、石に腰かけて、一休みしてをりますと、わたくしとは別な方角から、一人の旅僧がまゐり、また殆んど同時に、もう一つの道から、別な旅僧がまゐりました。そして三人が一どにこの都の門で落合つたのでございます。』

かういつて、旅僧の一人はその長い不思議な身の上話を終つて身分の席へ退きました。

（をはり）

童謡

野口雨情選

（大人篇）

かまきり

奈良縣辰市村　平野千史夫

かまきり朝から
一草かつた
小笹の露も
搖れゆれ落ちた
かまきり默つて

ひと籠刈つた
一籠刈つたら月が出た

閑呼鳥

横濱市本牧町　佐藤よしみ

下駄はいて
かつぽん閑呼鳥
お山の奥には
雨がふる
橋は唐橋
かつぽんぽん
下駄はいて
渡る閑呼鳥

こほろぎ

濱松市田町　松井　多門

かがしの着物が
やぶれたね
おはりの先生
よんで來い
おはりの先生
今るすだ
そんならお山の
こほろぎや來い
糸もつて針もつて
こほろぎや來い

けんくわ

東京市西江戸川　湊　一訓

二人で歸へる此の途は
今日も目高が泳いでる
けんくわをしちやつた
ばつかりに
ひとりで歸へる
つまらなさ
話しながら歸へる時
何日もお家が近かつた
ひとりぼつちで歸つてく
今日のお家の遠いこと

子守歌

京都府立第一高女　岡本しな子

青い葉つばが
だつこして

赤いつぼみが
夢みてねます
青い葉つばの子守歌
どんな歌だろ
きゝたいな

土産

福岡市西唐人町　石橋　宗雄

田舍の伯父さん
太郎兵衛さん
大きな土産を
くれました
お芋が五つ
つるし柿
草靴一足
乾大根
竹で作つた
豆鐵砲

風の色

東京府南品川　林　帆夢

麥の穗並を梳　風は
綠の風ではないかしら
海で白帆を追ふ風は
青い風ではないかしら
夜明けと日暮に吹く風は
淡紫に　茜色
虹の掛橋渡る風は
七色模樣の風であろ

牧場の仔牛

熊本縣川上村　田尻ゆきを

牧場の仔牛は
日暮になつた
赤い入陽を
ながめこないた
草を食べずに
ぼんやりと
時々もうと
ないてゐた
牧場の仔牛は
親なし仔牛

げんげ草

臺北市見玉町　野村　詩樓

チロ／＼野中の
げんげ草
お里の　にも
あつたつけ
まゝごと遊びに
げんげ草
毎日　毎日
つんだつけ
いまごろお里の
げんげ草
みーんな　かあれて
ゐるだらう

柳の芽

福岡市鳥飼　野坂　治

柳の芽が出た
あをい芽だ
糸につないだ
柳の芽
風に吹かれた
あをい芽だ

童謡

野口雨情選

（子供篇）

ほほじろ

京都市小川通　伊藤富士雄

ほほじろ、小白、
お庭の、小じろ、
仲よく、あそべ、
はこべが青い、
つんでつんで、
たべよ、
仲よく、たべよ、
ほほじろ、小じろ。

日暮れ

横濱市本牧町　福田ハツ子

日が暮れた
日が暮れた
鳥が啼いて日が暮れた
空に光つた
一ツ星
光つた
光つた屋根の上

夜の道

秋田市柿山裏町　毋間瀬ふさほ子

淋しい淋しい
夜の道
誰も通らぬ
夜の道
一つながれた
ながれ星

けむり

臺北市南門校　高嶺　芳雄

けむり、けむり
くすぶつたい煙
なぜ〳〵黒い
はよ川へ行つて
黒いからだを
洗つてこい

炭燒爺さん

札幌市南七條　齋藤　榮二

今日も山から煙が上る
炭燒爺さん炭燒だ
谷間の中で炭を燒く
炭燒爺さん淋しかろ

ポスト

臺北市南門校　水木　輝重

ポストハホントニ
エエライナ
雨ガ降ル日モ風ノ日モ
赤イべべ着テ立ツテキル
御上ノ御用デタツテキル
大事ナ〳〵オ手紙ヲ
オナカノ中ヘシマツテル
ホントニポストハ
エエライナー

どんくり

東京豐島師範附屬校　田代　三郎

かつさんこつそん
お山の中で
どんぐり木の實が
月夜に落ちる

いてふの木

山口縣麻里布校　村上　春子

いてふの木
冬は葉がない
さむからう
雪がふる時
さむからう
いてふの冬は
えだばかり

おうち

大阪府庄内校　北中　清

かへるのおうちは
ちめたいな
かへるのおうちは
水のふち
ちめたい〳〵
水のふち
蛙はちめたく
くらしてる

ハサミ

東京市上根岸　鈴木　武男

何でも出しな
チョキ〳〵切つてやる
鼠のしつぽでも
チョキ〳〵
切つてやる
うそつき舌でも
チョキ〳〵
切つてやる
何んでも出しな
チョキ〳〵
切つてやる

秋のする

横濱市東神奈川　金子　多代

山の木のはは
さーむい風にちつて行く
淋しいころになりました
たんぼの稻にはがたれて
黄ろく黄ろくなつて來た
かられる頃になりました
お百姓さんいそがしさう
朝からばんまで田の中で
しやつきりしやつきり
しやつきりこ
稻かるころになりました
山では木葉がちーらちら
たんぼでいねかり
しやつきりこ

夕とんぼ

岐阜市金山町　萩原　勉

赤い夕日を背にうけて
はるばるここまで
きましたが
父さまゐない日がくれる
泣く泣くかへる
夕とんぼ

幼年詩

若山牧水選

春の雪（賞）

香川縣木田郡水田校尋五　石丸　滿行

春になつて雪が
降つた
白く〳〵降つた
冬の事が思ひ出された

評、美しく、上品で、重味がある。（牧水）

つばめ（賞）

香川縣木田郡氷上校高一　上髙　五夫

ポプラの横をぬけ
い瓦の上を
矢のやうに

綴方

齋藤佐次郎選

芋ほり（賞）

東京市麹町區中六番町尋五　井關正子

嬉しい。嬉しい。

私達はシャベルだの竹べらだのをもつて芋畑に向つた。鈴のもものだちを取つたり、たすきをかけたり、みんな異樣ないでたちをして居る。まるで敵打の出發の樣だ。皆は指定された畑をわれがちにほりこんだ。葉だけをかりとられた畑には「こゝからほりなさい」と云やうにみんな二葉をつけた莖が、うねにそつと一列並んでゐる。私は、手早くしやがんでほりだした。はね返された土は四方にとび八方からとんでくる。顏にかかる、體にかゝる。人に土をかけたり、かけられたり、大さわぎ。夢中になつてほるうちに、赤いお芋がポツチリとあらはれる。大急ぎでとらうとすれば、お芋は中々とられまいと土にかぢりつく。今度こそはとひつぱると、中程からポキリと音をたてておれてしまつた。「しまつた」と思ひながら、なほ外のを探す。けれども一つも見えない。どうしたのだらうと思ふと、後の方で「おちよやま達や、この芋かつてくんなせい。そんな所にないはだ。お芋ぽつちりおいとくだもの。なあ買つておくんなはれ」と村の娘たちがしやべつてゐる。あまりに殘念なので、一袋買はうとさい布をだしてふと西を見ると、日にかすか向ふに見える

渡つていつたつばめ

評、燕、燕、すばしこい燕（牧水）

泳ぎたい（賞）

福岡縣企救郡東谷一校尋六　大村　一天

泳ぎたい
早く夏が
來ればよい

評、小氣味のいい歌、大好き。（牧水）

足跡

東京市牛込區原町　寺本　彌市

涸れ涸れになつた
冬の沼を見たら水鳥の足跡が・
澤山ついてゐた

評、こまかな所をよく歌ひました。（牧水）

河の中の岩

東京市本郷區元町　中坂　藻舟

河の中の岩
小さな岩
ヂーッと見てると
山におちかゝつてゐた。

めじろとり（賞）

長崎縣立佐世保高女二年　七種　カネヲ

朝起きてごはんを食べてゐると隣のあつちやんが「かねをさーん」と言つて來た。私は「はーい、ごはん食べてゐるから」と言つて、そいで御飯を食べて外に出て見た。あつちやんは私を見ると「めじろ捕らんね」と言つたので「捕らう」と言つて木にとりもちを附け、めじろかごをさげてすぐ下の畠のすみに籠をおいた。そして私共はこちらの石垣のかげから見てゐた。始めは中々きさうにもなかつたが、しばらくすると二匹も來た。「ほら來たよ だまつてゐよう」と言つてほく〳〵よろこんでゐると、後の方で足音がきこえた「誰か來てゐる。せつかくめじろが來てゐるのに」と言つてゐると、その人は辻さんのおばあさんであつた。ざるを一つ持つて來てゐたが私共を見ると「めじろを捕つてゐるな。そりやあ、おもしろかろだい」と私共が靜かに〳〵と思つてゐる事はしらず、大きな聲で言つたので、めじろがにげないだらうかとはら〳〵した。おばあさんはかごのそばを通る時も大きな足音をさせて行つたので、たうとうめじろはにげてしまつた。また來るだらうと思つて、先つきのやうにだまつてゐたが、少しもこないのでこんどはわき道を少しばかり上つた所にお た。すぐそばの枝までは來るが、そのとりもちの木にはとまらないので、がつかりしてしまつた。いつかはとまるだらう

走つて居るやうだ

評、惜しい事に水の上に出てゐる岩か、沈んでる岩かよく解らない。（牧水）

足袋の看板

岡山縣都鶴郡倉前町戎町　後藤　静夫（十五才）

おむかひの
のきばにつるした赤色の
まアーるい〳〵看板に
福助足袋と
書いてある

評、何でもない樣だが、あつさりしてていゝ。（牧水）

雪の朝

横濱市東神奈川齋藤分中川　金子　多代（十三才）

學校へ行く道
前に行く人のくつのあとを
ふんで見た
私のくつが二つ
は入りさうだつた

評、驚いて笑つたあなたの顔。（牧水）

月

千葉縣安房郡北三原校高一　鈴木　隆治

人が通る
かへる田に
とびこむ
うつる月うごく

評、君、幼年詩、面白い。（牧水）

蛙の世界

茨城縣那珂郡川田校尋四　軍司　昌三

春が深くなつて
静かな夜も
蛙の聲で騒がしく
夜も短くなつて
ねむたい

評、と云つて、朝寝みしてはいけない。（牧水）

木

千葉縣北三原校尋四　結縄　春治

と思つて氣を長くしてかげから見てゐたが、しまひには少しねむくなつたので「あつちやんもう捕らんたい」と言つてやめた。晝頃までかかつたが一匹も捕れなかつた。

僕の家の牛（賞）

香川縣木田郡氷上校尋六　鍛治　繁雄

僕の家の牛は今年六才にもなる大牛である。其の牛を近所の竹内さん所と組んで居たのだが、近頃はどうしたのか子供等が行くとすぐ突くので、僕の弟などはこはがつて居た。

或日河島の牛市場へ追つて行つたが、うまく賣れないので重本まで追つて歸つて重本で賣かへた。表まで歸ると「ドッコ〳〵」と云ふ音がするので、叔母さんや弟が「ほーら、牛が歸つた」と云つて表へかけ出た。僕も出て見ると小さな若牛である。僕「爺さん、此の牛またいなー」と聞くと、爺さん「此の牛は本當にまたい牛だ」とおつしやつた。やがての事に竹内さん所の叔父さんも來た。爺さんは「どうな此の牛でもうこらへますか」と叔父さんに云つた。叔父さん「へえ、角が長いから氣に入らんのだが、まあ〳〵こらへまほう」と云つた。爺さんが話して居る中に、牛をかいたり角をにぎつたりしたが、牛はどうもしないでまぐさを喰つて居る。僕は夏であつたので池のつゝみへ追つて行つて、青々とした草を喰はしてやるのにと思つた。爺さんは歸りがけに買つた肉をにて、「まあ、庄太郎さん一ぱいやりまへんか」とおつしやつた。

牛のおしようばんならしませうかと云つて上がつて來た。爺さんとヒソ〳〵話して居たが、しばらくすると、庄太郎さんの大きな聲がした。

恥をかいたこと

新潟縣西頸城郡南能生校　池田　登

二十五日の卒業式の日に式が終つた後で、先生が『三月三十一日に本屋が學校へ來て教科書を賣るから買ふ人は其の日學校へ來なさい。』といはれた。三十一日の日が來た。僕は弟の本も買つて來るやうにいひつかつて學校へ行つた。最初一年生から賣り始めた。僕等高等科は一番あとからだといふ。六年生の番が來たので僕が一番眞先に一圓出して、『あの、歴史と地理と圖畫を除いて後全部。』といふと、本屋はその金を返しながら、『全部買ふ人から順々にならんで下さい。』と叫んだ。僕は『おやおや』と思ひながら後の方へひつこんだ。全部買ふ人がみんな買ひ終つたので、僕は早速本屋の居る前へ行つて、前と同じやうに『歴史と地理、圖畫を除いて全部。』といふと、本屋が『かふのをいへ、買ふのを。』といつたので、僕は『えゝと讀方、理科、書方、それから修身、地理附圖。』とやつと言ひ終つて一圓出した。本屋は一々教科書の表紙裏の定價の所を見てはソロバンをはぢいてゐたが、やがて『みんなで八十五錢か。』と獨り言を言ひながら僕のやつた一圓を金箱の中へ入れて、代りに剩錢を探して僕の所へ渡した。僕が受取つてひよいと見ると十五錢しかない。そこで

えのみの木
さくらの木
いろ〳〵の木に
春が來た
みどりいろして
はがでてゐる

赤ちやん

新潟市西堀町　瀧澤タネエ（十五才）

つん〳〵椿の
咲く頃にや
母さん赤ちやん
生むのです
つん〳〵椿の
ちる頃にや
赤ちやんニコ〳〵
笑ひます

一年生

千葉縣北三原校高二　黒川增太郎

可愛いい可愛いい
一年生
先生の後から
二列になつて
橋のたもとで
お別する
なんと可愛いい
一年生

さくらのみ

千葉縣北三原校尋四　鈴木　吉治

私は
あのちるのを
見ると
かはいさう
さくらさくら
はやくちれ
私のたべる
みがなれ

月夜

東京市牛込區市谷校尋五　淺井　正雄

直ぐ僕は本屋に向つて、『あのう、剩錢が足りません。二十五錢の筈なんに、十五錢しかありません。』さう言ひながら僕は手のひらを出して釣錢を見せた。すると本屋は『足りない』とさもいぶかしさうな顔をして僕を見つめる。僕は、はつと思つた。釣錢に十五錢でよいのだ。自分が思ひ違ひしてゐるのだといふことを。僕にきまりの悪いおもひをしてかういつた『あの：私の方が間違つてゐました。つりは確にあります。』さういつて逃げる樣に運動場の方へ駈け出した。後で高等科二年生の教科書を買ふ時になつて、僕の順が來た時本屋が僕の顔を見て笑つてゐた。

父樣の留守の日

長野縣東筑摩郡片丘校高二　竹淵　喜代春

父樣が三峰神社へ行つて了ふと僕は急に寂しくなつて、机にもたれて只ぼんやりと襖の繪を見詰めてゐた。急に悄氣てしまつたのでお父樣の出かけの時あれ程元氣がよかつたにと笑はれるかと思つて、無理に勇ましい軍艦マーチを歌つたが、それも何時の間にか止めて、獨り汽車に乘つて行くお父樣の淋しさうな姿を思ひ浮かべた。

ハーモニカでも吹いて聞かせて呉れと姉樣に云はれても其氣になれない。姉樣は僕を慰めて下さる爲だつたのだらう。慰めて呉れれば呉れる程一人ぼつちになつた樣な氣がする。僕は誰にも聞えぬ樣に「お父樣」と口の中で二度　んで見た。廣い家の中は靜かで何となく物淋しい。

父の代理

香川縣綾歌郡美谷村中通　兼若　竹肘

戸を開くと明るいランプの下に澤山な赤い顔が動いて居るのが目にうつつた。續いて膳の前に通された。大人ばかりの中へすわつたが何だか生意氣の樣に思はれて恥かしかつた。隣の叔父樣が「先づ御近づきに」と盃をさゝれてまごまごする。仕方なしに飲むと又「これから時々御父樣のおかはりにこなければならぬから其の練習に」と差す。胸がやけつく樣にあつい。彼方でも此方でも賑やかな笑聲が起る。早く歸りたいが何といつて行つたらよいだらう等と思つて居ると、いつのまにかあせがにじんでた。僕はほてつた顔をむやみにこすつた。

小鳥

東京市本郷區高等校一年　吉田　寛

僕は今、三匹の文鳥を飼つて居る。あの眞白なからだ。赤い啄、パッチリとした黒い眼、か弱い細い足。あゝ此の可愛い小鳥こそ、何處に居ようか。そして何時も透き通つた、やさしい聲で鳴いては、籠の中を元氣よく身輕に飛び廻つてゐる。去年の春、お母さんに買つて頂た時は、未だほんの赤兒であつたが、僕は毎日、水をやり餌をやつて、隨分、可愛がつて育てたので、すつかり大人になつた。雨の降る日や、冷たい風の吹く日なぞに、文鳥は圓子の樣に丸くなつて、ぢつとじまり木にとまつてゐるのを見ると、僕までゾク〳〵寒くなつて可愛さうになつて來る。

月夜に
電とうが消えた
すると
お庭の松が
障子に
はつきりうつつた

とんぼ

千葉縣北三原校高二　關本　信藏

竿の中ほど
とんぼとまつた
だんだん
羽つぼめていく
うきピクピク
やつと
竿あげたら
とんぼ驚いて
とび上つた
竿置いたら
おなじ所に

又僕の籠に入れた清く澄んだ水を
のんで、胸を風にそよがせてムク
〳〵と照る日の光を受けながら嬉
しさうにチョ〳〵鳴いてゐた。

小春

埼玉縣北埼玉郡七越村　腰塚　まさ緒

蔭をつくつてゐた木の葉が大方
落ちて、廣々とした庭には籾が一
ぱい干してある。秋の陽は萬々んな
く照つて、耳をそばだてると籾
のかわいてゆく音がみちり、みち
りと聞える。さつきから雜莚のへ
りに小さい羽根を尖らして蠅が一
匹、手を合せたり頭を捻つたりし
てる。ズドーンと獵銃の音がした。
田圃を隔てた向ふの紅葉しきつた
雜木林の上に白い煙が立上つて間
もなく消えた。家の中でボンボン
時計がものうげに三時をうつた。

夕方

山梨縣北巨摩郡江草校尋五　掛川　代志美

「あゝ寒い」さう思ひながら車屋
を出た。あたりは雪で眞白であつ
た。お母さんは「今夜は、大變に
しみる」と言ひながら、私のあと
からこぬかを持つて來た。家に近
くなると、妹は大きな聲で唱歌を
歌ひ出した。家へ歸へると、姉さ
んは夕飯の支度をしてゐた。私は
炬燵にあたつて、妹と一しょに雜
誌を見て居ると、お母さんが「夕
飯だよ」と言つたので、炬燵から
出て夕飯をたべて、隣のお湯借り
に行つた。

品評會に行くまで

香川縣木田郡氷上校尋六　白井　巖

明日は野菜品評會の月だから、

犬

京都府船井郡園部校高一　西浦　孝一

背の低い
いなきの横に
まつくろの犬が
うずくまつて
ふるへてゐた
北風のきつい日だつた
犬の體は
少しぬれてゐた

風吹く夜

山梨縣北巨摩郡江草校尋六　輿水　滿子

風吹けば竹の葉
うらがへりする
葉の蔭に
星きら〳〵と
光る

大根の善いのを三本拔いて學校に
持つて行かうと畠へ行つた。初め
青々した大きな葉の大根を拔くと
なか〳〵拔けない。拔いて見ると
大きなまたであつた。

二番三番と拔いて四番目はかな
り太い大きなやつを拔いてそれか
らだん〴〵拔いて三本善いのが出
來たので、持つて歸らうと思つた
が重いので弟に二本だけ持たせて
家へ歸つた。歸つて一番大きい良
いぶんをながめてゐると、しりの
方に大きな割目があつたので、又
拔いてかうかと父にいふと、父は
そんなに多く拔いてはだめだと言
はれたので、しかたなく其所此所
を見廻つてゐると、弟の持つて來
た中に一つ善い分があつたので、
それと合せてちやうど三本出來
た。弟のは長大根。妹はしやうど
いんで圓形のを拔いて洗つてある
ので、僕は弟と洗つて涼み臺の上
に置いた。妹は圓形のをすかんの
で持つて行かんと言ふので、僕は
妹の分をもらつて兄さんが弟の分
を束にして其の夜を明した。朝に
なつて皆がさそいに來たので急い
で大根をしばつて持つて行かうと
思つたが、なか〳〵重いので兄さ
んにたのんで持つて來てもらつ
た。

學校に行つてゐると兄さんが自
轉車にのせて持つて來たので、す
ぐ兄さんにもらつて教室へ持つて
來た。皆が大きいのーといつた。
先生が理科室へ持つて行けとおつ
しやつたのですぐ持つて行つた。
室内にはたくさん大根やかぶ、
蜜柑、だい〳〵等がならんでゐ
た。

通信

幼年詩選評

若山牧水

地方々々の詩のそのまゝ使はれてあるのは至極面白いものだが、ただ、少し解りにくい種類の言葉には一寸註釋を加へておいてほしいものである。例へば今度見た中でも次の樣なのがあつた。

鶯

うぐひす
ぐみの木に
とまつて
おつぽや見て
ホヽホケキヨと
鳴いた。

面白さうだが、「おつぽや」が解らない。これは山梨縣からの投稿であつた。

千葉縣から來たのに、

けむり

山のかげから
出て來るけむり
もくもく出てくる
ふるみどの方に
けむりはゆく

「ふるみど」が解らない。なほ、他にも二三かうしたのがあつて、惜しいとおもつた。今度は一體に出來がよくなかつた。この次ぎは勉强して下さい。

童話選評

齋藤佐次郎

▽前月號のこの欄で、成るべく創作を主にして貰ひたい事を述べましたが、今月の應募童話を讀んで、次第に私の要求が容れられて行くことを感じて喜びました。

▽從つて、作の傾向が、廣くいへば日本的、狹くいへば鄕土的の色彩を帶びて來て、親しみ深く讀めるやうになつたのは愉快です。

▽そして、又、所謂童話の型にとらはれない自由な童話がだん〳〵に現れるやうになつたのは、これ又うれしいことです。どうも童話といふと、きまつたものゝやうになつて了つて、お爺さん婆アさんの話や、狐や狸の話しか出ないのは殘念です。あらゆる世界を童話の領分にとり入れて、もつと〳〵豐富な面白いものにしたいではありませんか。

▽この意味に於て、今月集つた中で坂井羊子さんの「夜・繪は何をするでせう？」は面白いと思ひました。大變に新鮮な感じがしました。しんみりとした、女の人でなければ書けない、やさしい情緒が出てゐました。お話の構想上にも、新味があつて結構です。でも、西洋のお話にこれに類したものを讀んだ記憶がありますが、或はそれなどからヒントを得られたと假定しても、これだけすつかり自分のものとして、自分の氣持ちを吹き込むことが出來れば偉い事です。又これが全部坂井さんの創作になつたものとすれば、一層大したものと思ひます。

▽次いで面白いと思つたのは、坂井雅夫さんの「こいくりよ谷」でした。これは町の狐の話ですが、それに、大層創作味を持つたもので、作者のわらひ處の妙味を感じます。紀野な筆つきも面白いと思ひました。讀むだけでも人をひつぱるだけの力があります。尙それに盛られた內容も十分敬意に値します。

▽早田啓次郎さんの「仙人になつた鳴江」は、話は實に面白い。これで筆の方が、これだけの話を活すに足りだけにいつてゐたら、すばらしいものだと思ひました。題材に筆の方が負けてゐる。だが、話が面白いので、表現の足りない處を補つてゐる位である。いゝ題材をつかまへた德はこゝにあるのを思はせる。

▽金澤貫一さんの「夢の目鏡」は創作味の豐かないゝ話である。かういふ態度で進んで行くことは實に結構だと思ひます。このお話ももう一ときは表現力があつたら、とおしまれます。だが、兎に角いゝものゝ一つです。

▽坂田鮑瓜さんの「二人の樵夫」は作者が文をかきなれた人だと見えて、非常になだらかで、氣持ちよく讀ませるのが先づ氣に入りました。しかし、「青い着物を着た樵夫」と「赤い着物を着た樵夫」といふやうな名のつけ方は、どうもパタ臭くて、親しく讀めない處のあるのに一考を願ひたいです。何か遠い國の話を聞いてゐるやうで、しみ〴〵と話に親しめないのです。もし、遠い國の話なら、もつと遠い國らしい異國情緒があると、また面白いと思ひますが、どつちつかずなのではどうも面白くありません。

▽寺島貞次郎さんの「正直爺さんと慾張爺さん」はよくある筋の話であるが、さら〳〵と苦もなく書き流してあるので、味がある。話の結末はかうなるんだらうと思ひながらもおしまひまで讀ませられて了ふ。

▽久米敏一さんの「只四郎と、お嫁さん」は例によつて手に入つたものだ。殊に前半の書方は巧いものだ。この人は投書される人々の中で傑出してゐるので、普通の扱ひをしたくない。材料のよし、惡しに拘らず、必ず人をひきつけるだけの魅力のあるのは、この人を十分に信頼していゝ證據だと思ふ。で、私は同氏を今後一級作家と同樣の取扱ひをして優遇する事にします。久米さんも、その積りで、これからの作には一層の努力をおしまずにやつていたゞきたいと思ふ。

▽三井牧朗さんの「牧場まで」は題材に新味はないが、筆に妙味があるので、氣持ちよく讀ませます。

▽尙、この外にも注目された作はなか〳〵あり ましたが、一々の評はこれでお止めにして置きます。たゞその名だけを擧げますと、青柳一雄さんの「淡路ちどり」横井國雄さんの「子雀」福田ハツ子さんの「昔吉と狐」宍戸功夫さんの「暖い日」吉田正三さんの「或日の出來事」三瀨眞弓さんの「フクロとミミヅク」兼若竹雄さんの「銀の簪」大場四郎さんの「おさよ池」瀧沼タネエさんの「一寸法師のハンス」などでした。

▽で、本月は、次號推薦候補作として、坂井羊子さんの「夜、繪は何をするでせう」と早田啓次郎さんの「仙人になつた鳴江」と坂井雅夫さんの「こいくりよ谷」の三篇を擧げます。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

▽近頃は各學校で童話を盛んに奬勵するやうになつた爲めに、綴方の方は幾分下火になつた傾向が見える。そーは、これまで學校に取入れられてゐなかつた童話が、盛んになるために當然の犧牲になつて行く譯で、決して惡いことではないが、しかし、といつて綴方をいゝ加減にするやうでは、却つてへんぱな教育になつて、これもまた困つた結果になるのであるから、十分にこの點に注意して貰ひたいと思ひます。

▽本月は成績が惡かつた。いゝ作が非常に少かつた。井關正子さんの「芋ほり」と七種カネヲさんの「めじろとり」がよかつた位である。

▽「芋ほり」は畑の芋をひつぱる處がよかつた。なか〳〵とれないで、くやしがつたり、騷いだりするところは本當に上出來でした。

▽七種カネヲさんの「めじろとり」も、その時の氣持をよくあらはしてゐます。事柄たゞだけを書いたのでは面白くない。その時の氣持ちまで出なければいゝ作とはいへません。

▽穀治繁雄さんの「僕の家の牛」では牛を買ひ代へて來て歸つたのを、家の人たちが、それ牛が來たといつてこれを見るところが、大層よく出來ました。

▽また河田登さんの「恥をかいたこと」では、後半の自分の間違ひを知つて、おど〳〵するあたり眞にせまつてゐます。

▽竹淵喜代泰さんの「父樣の留守の日」は、上手なことは非常に上手な作であるが、それだけカブなところがなく大人びた感じを與へます。これは年齡の關係上、物の見方も自然に違つて行くので、止むを得ないとは思ひますが、氣をつけたいことです。

▽兼若竹肘さんの「父の代理」純でいゝ。

幼年詩掲載外佳作

羽山　正（千葉）　清水初太郎（山梨）
豐島　泰（山梨）　藤原　斌（山梨）
赤萩　和夫（茨城）　結縄　春治（千葉）
椎本　近治（千葉）　横田　政治（茨城）
宮武　德義（香川）　内山　義郎（東京）
羽山　五郎（千葉）　鳴海まさ子（青森）
高橋　德義（香川）　高橋　武德（北海道）
篠原　貞山（梨）

綴方掲載外佳作

吉田　寛（東京）　伊藤　威（京都）
掛川代志美（山梨）　下平しづ子（不明）
櫻塚まさ緒（埼玉）　後藤　静夫（岡山）
白井　巖（香川）　吉田止女子（不明）
三浦　繁雄（香川）　渡邊　吾朗（長野）
黒田　一三（愛知）　湊見松三郎（埼玉）
若林　義時（長野）　藤原　正泉（山梨）
森田　修二（和歌山）　永井よし江（京都）

童話掲載外佳作

（大人篇）

相川　幸雄（東京）　堀越　文七（栃木）
近藤　貫作（名古屋）　後藤　静夫（岡山）
楠　正信（高松）　竹崎あつし（熊本）
山田　緹子（東京）　山本　松子（石川）
寓山　誠一（東京）　西川　正世（東京）
三須　英三（京都）　上田　勝（滋賀）
西東十四春（佐賀）　早田啓次郎（和歌山）
青柳　亘（新潟）　金子　政保（東京）
石光　敬臣（東京）　中村　政一（京都）
小山えうじ（神奈川）　豐島　泰（山梨）
山川　秋子（熊本）　飯田　みえ（熊本）
金子　芳子（栃木）　後藤順四郎（新潟）
吉田　正三（東京）　湊見松三郎（埼玉）
武田　義雄（秋田）　海邊　文子（熊本）
岡田　義祐（横濱）　名方まさる（大阪）
仙波しげる（愛媛）　小泉　玉枝（不明）
井上のぶ（京都）　福井　藤夫（百濟）
田中　富重（山梨）　田口　クラ（栃木）
横田新六郎（茨城）　高田　徹風（岡山）
今泉　仁藏（福島）　倉田眞一郎（三重）
横井　岡雄（愛知）　有馬　八郎（仙臺）
和田　弘（福岡）　瀧澤タネエ（新潟）
田中　武（東京）　森野　勉（岐阜）
河田　節雄（岡山）　蓮見　宏男（埼玉）
内田　美知（茨城）　日向　桃子（東京）
德永　武通（福山）　井關　正子（東京）
松永　喬（神戸）　渡邊　吉治（臺北）
堀　正美（長野）　齋藤　光雄（山形）
用崎　夜雨（茨城）　秋葉　孝義（樺太）
小澤しげる（名古屋）　加藤　勝（臺北）
吉田　正三（東京）　齋藤　清（東京）
正木　陽利（福岡）　ヤマモトヨシコ（不明）
神代　好美（茨城）　津田　恒（長野）
西浦　孝一（京都）　小林　俊郎（東京）
早矢仕節子（東京）　島　テル子（廣島）
酒井眞知子（千葉）　島田　勇（茨城）

（子供篇）

軍司　鷲水（茨城）　谷本　政雄（東京）
永井よし江（京都）　大倉　輝夫（東京）
宍戸　功夫（朝鮮）　山本　春枝（宮城）

童話佳作

（大人篇）

久米　藍一（茨城）　坂井　羊子（東京）
松井　雅夫（福岡）　横井　國雄（愛知）
寺島貞次郎（東京）　青柳　一雄（神奈川）
坂田　鮑瓜（福岡）　宍戸　功夫（朝鮮）
川井　牧郎（秋田）　吉田　正三（東京）
福田ハツ子（神奈川）　三瀧　眞弓（埼玉）
山川　憐熊（本）　中村　惣一（大阪）

（子供篇）

金澤　貫一（東京）　早田啓次郎（和歌山）
大場　四郎（名古屋）　瀧澤タネエ（新潟）
鈴若　竹雄（香川）　高田　徹風（岡山）
菅野　四郎（宮城）　堀　正美（長野）
吉田　龜吉（埼玉）　軍司　鷲水（茨城）
淺見松三郎（埼玉）　村上　博（東京）
土屋虻太郎（山梨）　港野　三郎（新潟）
齋藤　光雄（山形）　打道　柾俊（大阪）
高野　辰夫（福岡）　田中　きよ（廣島）
原　弘（岡山）　鶴岡登美子（三重）
渡部　一郎（兵庫）　田中　敏子（山口）
川上淳太郎（福島）　田村　保三（大阪）
森　ひろ子（千葉）　原　武雄（茨城）
角國泰之助（熊本）　久保田英子（東京）
武内　武平（愛知）　齋藤　雪子（東京）
松浦　九一（北海道）　辻　寛（千葉）
川崎　弘二（島根）　山澤　俊夫（神奈川）
鞍谷　清子（茨城）　北村　仁吉（山梨）
小川　泰子（東京）　蓮沼　春二（東京）
有田一二三（長野）　山本　弘（朝鮮）
伊藤　吉三（岡山）　菊地　光（京都）
小田　春子（東京）　三坂　徹之（熊本）
吉野榮子（和歌山）　渡邊　逢一（東京）
龍田　逢一（宮城）　館山　鐵藏（秋田）
馬場　英子（東京）　柳井行子（北海道）
野田佐夜吉（大阪）　藤田　元作（富山）
大山安夫郎（東京）　馬場　英三（東京）
瀧川　良夫（東京）　川本　三郎（栃木）
橋本　弘（上海）　鈴木　とし（長野）
印牧　順作（朝鮮）　伊藤　春子（群馬）
金錫　麟（朝鮮）　菅沼　畜一（京都）
廣井　一（富山）　舜吉（岐阜）
賢二（愛媛）　山内　舟橋　關谷　重子（秋田）
稗田　三平（三重）　岡田　節子（福岡）
田手　信市（高知）　藤田　逢一（京都）
山室　榮作（香川）　山田　英三（山梨）
吉岡　助一（愛媛）　岡本けい子（石川）
長井とした（熊本）　大野健次（北海道）
伊藤　清（東京）　齋藤　勝（臺北）
加藤　秋葉　孝義（樺太）　光雄（山形）
金子　政保（東京）　中村　政一（京都）
豐島　泰（山梨）　飯田　みえ（熊本）
後藤順四郎（新潟）　湊見松三郎（埼玉）
海邊　文子（熊本）　名方まさる（大阪）
小泉　玉枝（不明）　福井　藤夫（百濟）
田口　クラ（栃木）　高田　徹風（岡山）
倉田眞一郎（三重）　有馬　八郎（仙臺）
瀧澤タネエ（新潟）　森野　勉（岐阜）
蓮見　宏男（埼玉）　日向　桃子（東京）
井關　正子（東京）　渡邊　吉治（臺北）
齋藤　光雄（山形）　秋葉　孝義（樺太）
加藤　勝（臺北）　齋藤　清（東京）
ヤマモトヨシコ（不明）　津田　恒（長野）
小林　俊郎（東京）　島　テル子（廣島）
島田　勇（茨城）

新しく出た本

◇**悲しき微笑**（蕗谷虹兒先生著）本書は蕗谷先生の第二集譜です。一篇ごとに詩と美しい繪をそへたもの三十二篇を集めた得がたい本です。しかも、三十二篇とも全部未發表のものばかりですから著者の苦心と抱負の程が知れます。當代に於てこの著者ほど少女の心を理解した畫を描く人はありますまい。全篇いづれも少女の夢とあこがれと悲しみとを描き盡してゐます。蕗谷先生の著作中での傑作集として同先生の好きな方には是非おすすめしたい本です。（四六判一三〇頁羽二重表紙箱入美本、定價金一圓九十錢、神田表神保町十六　交蘭社發行）

◇**メヱテルリンク童話集**（西川勉先生編）メルギーの文豪として世界的にその名を知られてゐるメエテルリンクの「青い鳥」「尼の身替り」「犬」「青鬚爺さん」「十二人の盲人」を譯述したものです。メエテルリンクの作はいづれも劇として書かれてゐますので、それを少年少女たちの讀みやすいやうに童話に書き變へたもので、編者の苦心が察せられます。五篇の中では最も「青い鳥」が有名なだけに讀んでも實に面白く感ぜられます。チルチルとミチルの兄妹が青い鳥を探づれて、いろいろの不思議な國へ行くこの物語りは、ありふれた童話には見られない優れた面白味を持つてゐます。その外の四篇もいづれも面白いものぞろひですが、かういつためづらしいお話が日本、少年少女に紹介されたことは實にうれしい事です。（四六判三〇九頁　定價金一圓五十錢　神田錦町一ノ一　米本書店發行）

◇**青い眼の人形**（野口雨情先生著）本書は本社の出版續りで紹介したことがありますから、くはしい紹介はぶきます。しかし、何といつても童謡詩人の第一人者野口雨情先生の傑作著作集だけに、すばらしい本です。蕗谷虹兒先生の挿畫にかざられてゐるので、童謡書中で最も立派な本と推奨する事が出來るでせう。（四六判二四〇頁　羽二重表紙箱入美本、定價金壹圓八十錢　金の星社發行）

◇**ブウ太郎鍛冶屋**（武井武雄先生作並に畫）武井先生でなければ書けないお話と畫を集めたものです。十數篇の奇拔なお話ばかりですから、實に愉快です。先生のお話は人から聞いたお話や、何かの本に出てゐる話なんぞを書いたのではなく、全くの先生獨特のお話で、そこらのハキダメの隅や道バタなんぞから拾つて來るのだといつてをられますが、實に面白いもの揃ひです。（四六判三〇〇頁　定價金一圓六十錢　金の星社發行）

金の星新誌友名簿

武部　政一君（鳥取）　白南君（靜岡）
堀井　靜子君（神戸）　高橋　一郎君（新潟）
末武　利男君（新潟）　小學校（朝鮮）
佐々木武雄君（島根）　三坂　徹之君（熊本）
柳井行子君（北海道）　渡邊　鐵藏君（秋田）
館山

大阪と神戸の本社童謡童話大會

◇五月四日午後一時半よりの二回

神戸市青年會館に於て。

『金の星』と姉妹雜誌程の深い關係ある高級繪雜誌ミソラ一二合しての會を開くことになりましたので、東京から沖野岩三郎先生、野口雨情先生、本居長世先生、本居みどり孃、貴美子孃、中村寒子孃（民謡歌ひ手）それから金の星主幹の齋藤佐次郎先生や記者の達崎龍氏などが、前日に出發されて大會に出席いたしました。

午後一時の會の方は少年少女の方々を主にした會でありましたので、正午頃から可愛い〻方たちがぞく〳〵開場の時刻になつて表ドアを開いた時には、なだれのやうに入つて來られたので、その騷ぎつたらありませんでした。神戸市と、附近の諸學校からは、わざ〳〵先生が生徒さん達をつれて幾組も〳〵お出でになるといふ有樣で、廣い會場も忽ち埋つてしまひました。齋藤主幹の開會の辭にはじまつて、沖野先生のお得意の童話「八太郎小太郎」や、野口雨情先生の「朝鮮の童謡」のお話があつて大喝采でしたが、やがて、本居長世先生の伴奏で、みどり孃、貴美子孃が幾度か童謡を唄はれ、また童謡舞踊を實演されたので、その度にアンコールを受けて會衆に非常な滿足を與へました。

また、その晩七時半からは大人のために童謡、童話及の音樂會を同じ會場で開きました。この會もまた非常な大成功で、沖野先生や野口先生の講演は會衆に深い感銘を與へました。その後で本居先生一行の童謡音樂と舞踊があつて會ををはりました。

◇五月五日午後一時より　大阪市公會堂に於て。

この日はあひにくと雨天でありましたが、中の島のあの廣大な建物の前には、開場前から既に大勢の少年少女がつめかけてゐました。三千人以上を入れる事の出來る公會堂ですから會は實に愉快に進行しました。童話と童謡が一つ終るごとに破れるやうな喝采です。その間に新聞社の寫眞班が來て寫眞をとる爲めにポーン〳〵マグネシウムをたいたりして、實にすばらしい會でありました。

また、その日午後七時半からは天神橋際の大阪市民館で、前日の夜神戸でやつたと同じやうに、大人の爲めの童謡童話音樂の研究的講演會を開きましたが、これ又大成功で會ををはりました。

編輯室より

▽五月は一年中で一番いゝ節だといはれてゐますが、青葉の五月はまつたくいゝ氣持ちです。編輯室の庭の樹も青々と綠を繁らせました。ブドウ棚では、もうブドウの蔓が芽を出してゐます。今年もおいしいブドウが食べられるなア、なんて慾張つた事をいつてゐる惡記者もゐます。

▽七月號の編輯も今日でをはりを告げましたが、次號の八月號には一大努力の號を作る決心で一同大に力んでをります。私どもは常に日本の童話と童謡のために專心努力をしてをりますが、併し、これまで位ではまだ足りないやうな氣がしますから、今後はもつと〳〵働きます。決死的奮鬪です。こんな文句を並べると、活動寫眞の廣告のやうだなんて笑ふ人があるかも知れませんが、本當にわれ〳〵の心持はそれなんです。

▽どうぞ皆樣、私どもを大にべんたつして下さいませ。雜誌のことに就てお氣つきの事がありましたら、どし〳〵おつしやつて下さい。皆さんが、何か言つて下さるのを私どもは非常に有難く聞きます。皆さんが、注意して下さる事が多ければ多い程、元氣が出ます。

▽さて、本月號で皆さんにおことわりして置かなければならない事は、自由畫の選が一回お休みになつたことです。選者の山本鼎先生が蒙古へ旅行中で、そのために遂に締切りまでに還が間に合はなかつたのです。そのため殘念ながら一回だけ發表をお休にして次回の分と一しよに選ぶする事にしました。

▽また、長い間連續して掲載してゐる西條八十先生の長篇童話「決死の使者」は作者の西條先生がフランスへ旅行された爲めに、上海から送つて來る筆の原稿が、遂に締切りまでに間に合ひませんので、止むなく一回だけお休みにしました。

▽この頃編輯部は單行本の出版と兩方のために非常に忙しくなつてゐます。編輯者も大勢になつて、日夜奮鬪をつゞけてゐます。その忙しさつたら、全く皆さんにお目にかけたいやうです。次號にこの頃の編輯部の光景を寫眞にとつて御覽に入れたいと思つてゐます。

▽終りに愛讀者の皆さんの御健康を祝してペンをおきます。（一記者）

講演部より

◇講演部は例によつて大多忙です。本社主催の大阪と神戸の大會を終ると間もなく、沖野先生は廣島の各地へ御招待を受けて出發なさいます。野口先生は仙臺の大會へお出かけになるといふ有樣で、全く講演部は大活動をいたしてをります。本月に先生方の御都合で講演會を開きます事が出來ませんでしたが、何れ次號に精しく報道いたします。

讀者だより

▼記者樣六月號有難度御ざいました。青葉若葉の茂げってゐる、田舍の御社はどんなに美しいでございませう。太陽の光が日に增し、暑くなつて來ました。もうすぐ、入梅になります。あのしとゝ〳〵と降りそゝぐ五月雨、じめ〳〵とする氣持は大變いやなものです。毎年の例として又惡い病氣が流行する事でせう。皆樣、今から御氣をつけ下さいませ。（東京　佐藤百代）

▼やうやく奈も逃かうとして居ります。この四五日と云ふものの降りつ止みつして奈雨がつゞいてゐます。此の間の神戸青年會館での御社童謡童話大會には招待券をお送り下さいまして誠に有難うございました。前日とゞきましたのでほんとに思ひまうけぬことでした。お友達を誘つたところ三人出來ました沖野先生にも本居先生にもお目にかゝるのはほじめてでした。階下は小學校の圓體で一ぱいでしたが階上は子供が連れた大人の方でもいてすつかり埋められて非常な盛況でした。沖野先生の童話はそれこそ子供達の心を有頂天にさせられた樣でした。「考」の教調は何より子供の心に深く刻みこまれずにはおかれなかつたでせう。可愛らしい本居さん御姉妹の童謡及舞踊には誰れもが皆うつとりとさせられました。幾度かアンコールがくりかへされた程でした。これによつて子供等の心にどんなにか美しい花が見出されたことでせう。かくして子供等は童謡に對して根强いしたしみを持ち眞に理解を持つのです。そしてはじめて童謡の普及は遂せられるのです。何にしても今度の會が有意義だつたことは疑ふ餘地も有りません。其上御社の美しい繪葉書及畫帳をお土產にされたことは子供さん達の心をいやが上にも喜ばせたことゝ思ひます。終りにかくまですばらしい御社の發展の爲心からおよろこび申し上げます。（神戸　安田敏敬）

▼私等の住む片田舍にも童謡の偉大なる感化を受ける兒童の多くなつたのを心から喜んで居ります。或は講演會に、或は音樂會に、廣い野に咲く純な兒童に、心はより以上伸ばされて行きます。學校へ行つて兒童の歌を聽く時は限り知れない喜びをおぼえます。今後は童謡教育に全力を盡してみたいと思つて居ります。野口先生並に金の星に據る諸先生、何も分からない若輩の手を取つて御指導下さい。（大阪府田邊町　池上建次）

▼五月五日の日大阪で童話童謡大會があると云ふことを新聞で見たのは午まへでした。晚の御講演の方が是非拜聽したかつたのですが時間の都合から行くことが出來ずせめて豊の部にでもと急いでとび出してしまひました。野口先生にはじめて御目にかゝれて、私はどんなにうれしかつたでせう。短くはありましたけれど、私の樣なものにとつてはほんとうに爲になる御話でございました。夜の會に行けないことをつくづく殘念に思ひました。（京都　三須英三）

▼先日はお忙がしい所を、伺ひまして、ことに失禮致しました。又寺内先生のお描きになつた、きれいな繪葉書を戴いたりして有難う存じました。下手な童話が出來ましたからお送り致しました。どうぞよろしく。（東京　青柳幸路）

▼御禮が遲くなりましてすみません。先日御送り下さいました「童話童謡大會」の招待券で仲のよい友達と二人で五日市民館の大會に參りました。沖野先生、野口先生の有益な御講話や本居みどり孃きみ子孃の可愛らしい童謡舞踊を見せていたゞきまして、私共二人は樂しい數時間を過しました。金の星誌がこになつてまだ日も淺い私は斯樣な樂しい御手厚い御招きを受けました事を誠に有難く嬉しく御禮申します。當夜頂戴いたしました此美しい繪葉書で簡單ながら右御禮迄。（大阪市梅田町　山口利庄）

▼先生方には御變りはありませんか。私等の小さな雜誌も御陰で益々盛んになつて行きます。私も親友の大澤君、新井君を讀者にしましたからよろしく。どうぞ小學生又そのほか大人の玉稿を御待ちしてをります。又五月號の會費六錢は會計部の係りまちがひで十五錢です。よろしく御願ひします。

（埼玉縣大越局區内ゴンドラ社、腰塚まさ緒、軍司麗水、竹村政雄、平井鶴、新井新吉）

▼記者樣、永い事ごぶさたいたしました。おかはり御座いませんですか？　金の星四月五月六月號は買ふ事が出來ませんでした。これには苦しい事情があつたのです。父は會社からひまを出されましたし、母は赤十字病院に入院しましたし、それで私もいろ〳〵と職をかへまして今ではある貝細工工場の職工となりまして働いてゐます。それで今は家の生活は非常に苦しいのです。五月五日の晚大阪市民館で金の星の主催で童話、童話、音樂會がありました。友人松井錠太郎君が入場料を出してくれましたので行く事が出來ました。兩情先生にお目にかゝるのはこれで三回です。記者樣、私はどんな苦しい事にでくぢけつして、金の星からはなれまいときめましたが、今度はほんとに苦しかつたのです。七月號あたりからまた今までのやうに金の星をよむ事が出來ると思つてゐます　今日古い金の星をみてゐますとずつと前にはさんでをつた切手が出てきましたので投書としつしよにこの手紙を出したわけです。讀者の皆樣どうかよろしくお願いたします。（大阪市外　阪野潤）

▼長い間御無沙汰致しました。六月號讀後の感想を申しますと、「どろ坊學校」は面白い讀物でしたが、「巢狙ひの事なんか感心しませんね。「虎になつた兒」の所で李徵の虎になつた理由がよく書けてゐないやうに思ひました。それから「猛獸童話」にはよく動物が出てきますね。動物の出る事が童話の要素の一つですか。武井先生のは常に話も畫も金の星の王樣ですね。明星です。寺内先生の畫は内地で見られるやうな畫（純日本風俗の畫が寂寞です）がよく書けてるやうに感じます。馬鹿がより以上利口者に向つてとやかく云つた事をお許し下さい。（東京代々木初臺　松村淑郎）

▼一寸投書について、左の事をおたづねします。

一、子供篇と朱で書くのですか。

二、私は讀者だよりを二三回出しましたがまだ一度ものせて呉れません。その理由

三、各種の創作は毎月月ごとに發表になるのですか。（千葉縣平賀村　松本眞砂）

▽一、朱でなくつても構ひません。

二、讀者だよりは澤山皆樣から下さるのでとても全部を載せ切れないのです。それで、かはるがはる載ることにしてあるのです。その證據に今度こそ御覧の通りあなたのが載つたでほありませんか。どうぞどし〳〵面白い讀者だよりを送つて下さい。

三、恰度二月後に發表になります。尙讀者創作（或集）欄をごらん下さい。（記者）

▼野口先生や若山先生のお話はいつも面白く拜讀してをります。これは他の雜誌では見ることの出來ないものです。私は兩先生が永久に私達を導いて下さる樣にいのつてをります。（法本芳吳）

▼初夏の薰風がこきりに吹き出しました。金の星社諸先生には終始御熱誠を以て御傑作を澤山御發表下さいまして有難う御座います。毎月御發行の金の星が待ち遠しくて〳〵たまらなくなります。これは内容のどこ一つとなし充實したしかも或一訓を與へていたゞくこの美しい本は、私達が何時も手になすことの出來ないものだと常に感じるからで御座います。それはおそらく私のみでなく讀者諸兄姉も同じ御考へだと思ひます。次に早速乍ら今度初めて御社に童話（鶴とシバイカ王）を投稿いたしましたから何卒よろしくお願ひします。今まで一度も投稿した事は御座いませんのでよく勝手も存じません　此後尙大いに研究し童話童謡を作り投書さして戴く考へで御ございます。（齋藤先生。野口先生。宜しく御教導をお願ひ致します。投稿の〆切は何時投稿しても差支はないでせうか。　今城恭夫）

▽いつでも差支ございません尙懸賞創作募集欄を御覧下さい。（記者）

▼このたび　貴社主催童話、童謡の會の招待券を御惠與して下さいまして誠に有り難う御座いました厚く御禮申上げます。早速市民館の方へ參上させて頂きました。近頃に珍しい盛んな集りで御座いました。先づは右御禮まで。（大阪豐田次雄）

▼今年の二月から僕の級で（金の星）を買ふやうになりました。僕は童謡が大變すきで野口先生の童謡を見ると氣にいりました。野口先生によろしく。（山梨　豐島泰）

金の星社（七月號）

出版だより

名著大系續々出版!!

金の星社の『世界少年少女名著大系』はその後ぞく〳〵と出版になりまして、第一編の『ロビンソン漂流記』第三の『ドン・キホーテ』の二つが六月はじめに出版になります。尚、第四編の『コロンブス物語』も六月末か七月のはじめには出版になるといふ有樣で、忽ち十册位になつて、出版界の未曾有の、一異采を放つことになります。

今や金の星社の名著大系は各方面から非常に大きな期待と歡迎とを以て迎へられてゐます。『ナポレオン物語』など、發刊以來まだ日が淺いにも拘らず三版を發行し、それも近く盡きて、第四版發行に着手しようとしてゐる有樣です。

近日發行の第一編『ロビンソン漂流記』は世界的に有名なお話ですから、どなたでも名だけは御承知のことゝ思ひます。今年の『金の星』の新年號に双六となつて出たこともありますから、一層皆さんにおなじみの深いことゝ思ひます。海にあこがれてゐたロビンソンが遂に水夫になり、難船して無人島に渡り、かんなん辛苦するこの物語りは、全く世界の珍寶として今後兒童の爲めの讀物のある限り傳るべき尊い物語りです。ただお話が面白いばかりでなく、讀んで眞に爲めになる本としても、此の物語りなどは實にその理想的なものでありませう。

また『ドン・キホーテ』は、スペインの文豪セルバンテスの作として、シエークスピヤよりも以前にこんな立派な作が世界にあつたのかといつて、不思議にされてゐる程の名作です。原作はあまりに長いお話であるために、紹介される機會が少なかつたのですが、今度金の星社は、これを極く面白く讀みやすいお話として出版しました。活動寫眞となつて日本へ來て大歡迎を受けたこともあります。一度讀んだら、終りまで讀まずにはおけない本の一です。

本の内容は、いつか『金の星』の書話として水島先生が前編だけなお書きになつたので、御承知のことゝ思ひますが、實に面白い話です。後編になつてから一層面白味が加つて、全く快哉を叫びたくなる本です。

二書とも賣り切れぬ内にどうぞお求め下さい。

尚、この大系は、世界的名著でありながら日本にあまり知られてゐないものを紹介する計畫で、その方面の書も澤山發行します。

愛讀者通信

▽名著大系の第二編『ナポレオン物語』を讀みました。第一譯のよいことゝ云つたら實にすら〳〵と讀め、初めてナポレオンの一生を完全に知ることが出來、眞に有難いことと思ひました。かうした本が次々に出ることは何と喜ばしいことでせう『ロビンソン漂流記』『ドン・キホーテ』など早く讀みたいものです。（京都　吉田春夫）

▽『ブウ太郎鍛冶屋』つて何てまあ綺麗な本でせう　武井先生獨持のおどけた表紙や口繪にはすつかり感心してしまひました。一つ〳〵のお話、なんてまあ面白い事でせう、武井先生にしか出られないものですわね。（東京　山根百合子）

▽『金の星』に出てゐる鈴田先生譯の『十五少年漂流記』は毎月面白く讀んでなります　十五少年の冒險談は安心して子供達に與へることが出來ると思ひます。早くまとまつた本にして下さることを望みます。（山梨　伊藤芝太郎）

曲譜、第六輯と第七輯

金の星童謡曲譜の第六輯と第七輯には、本居長世先生作曲、野口雨情先生作謡の『子守唄』と『お人形さんの夢』とが發行される事になりました。最初第六輯には、『名所めぐり』が出る筈になつてゐましたが、これは都合上、後に廻る事になりました。第六輯、第七輯共に近刊の準備になつてゐます。

『青い眼の人形』大好評！

野口先生の童謡集　青い眼の人形』はスバラしい好評を以て迎へられてゐます。先づ、出版者の顯ひとして、皆さんに是非この本の裝幀だけでも見ていたゞきたいと思ひます。熊羽二重に美しい金箔を置いた優雅な此本は、皆さんの書棚の珍寶となる價値があります。

『ロビンソン漂流記』の出來た時

『ロビンソン漂流記』の作者は英國の文豪ダニエル・デフホーといふ人で、この作の出來た時に面白い話があるのです。

デフホールは大勢の弟子があつて、毎日先生のデフホーのところへ來て教を受けてゐましたが、『ロビンソン漂流記』の出來たのを見て、皆な一册づつ買つて歸りました。ところが、その翌日から弟子たちが一人も出て來ないのです。どうしたのかと思つてしらべて見ると、漂流記にすつかり感心してしまつて、皆なが本當に無人島へ流れ着いて、そこでロビンソンのやうな生活をし、見たいと思つて、出かけて行つてしまつたといふことがわかりました。

先生のデフホーは、さぞびつくりしたでせうが、また大得意でもあつたでせう。

ところで、無人島探檢に行つた弟子達の連中は、それからどうなかつたといひますと、いづれも、大失敗して閉口して、再び先生のところへ歸つて來たといふことです。めでたし〳〵。

『金の星』の合本第四輯が出來ました！

例によつて美しい装幀に飾られて、合本の第四輯が出來ました。今度は雜誌の定價が高くなつてゐる爲に、本來なら合本の定價も非常に高くなる譯ですが、特に安價にして、金貳圓で發賣になりました。

第一輯		（絶版）
第二輯	（第五卷一號ヨリ六號マデ）	金壹圓八十錢送料十四錢
第三輯	（第五卷七號ヨリ同十一號マデ）	金壹圓五十錢送料十四錢
第四輯	（第六卷一號ヨリ同六號マデ）	金貳圓送料十四錢

◇最近の重版書◇

ブウ太郎鍛冶屋	武井武雄先生著	（第二版）
家なき子	三宅房子先生著	（第五版）
人買船	本居長世先生作曲	（第六版）
一つお星さん	本居長世先生作曲	（第六版）
青い空	本居長世先生作曲	（第四版）
赤い靴	本居長世先生作曲	（第二版）

金の星童謡曲譜集第四輯。

小松耕輔先生作曲
野口雨情先生作謠

最新刊

定價金八十錢
送料金六錢

（目曲）夢とり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り

小松耕輔先生の作曲は日本童謡界の寶玉として尊ばれてゐます。未發表の新曲を加へ、こゝに第四輯として名曲揃ひの『夢とり』が出來ました。

第一輯　人買船（第六版）（目曲）人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん。

第二輯　一つお星さん（第六版）（目曲）一つお星さん、七つの子、鵙と雀、鷄さん、象の鼻、四丁目の犬。

第三輯　青い空（第四版）（目曲）青い空、燕、雨夜の傘、でんぐ虫、雀の酒盛り、呼ぶ子鳥。

第四輯　赤い靴（第三版）（目曲）赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮飴屋、眠り龜の子。

東京市外田端三五一　金の星社　振替口座東京五九五六番　電話小石川五三八七番

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號〆切は六月廿八日（その以後は次號へ廻ろ）發表は九月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◈一般讀者の創作◈

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は、「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢送料壹錢
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四十錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八十錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
振替口座東京五九五九六番

〔送金〕
▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです

〔注意〕
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名はつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年六月九日印刷納本（毎月一回）
大正十三年七月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人　齋藤佐次郎　東京市外田端三百五十一番地
印刷人　大橋光吉　東京市小石川久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所　東京市小石川久堅町百八番地
發行所　金の星社　東京市外田端三百五十一番地
振替口座東京五九五九六番　電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83

沖野岩三郎先生著 長篇童話 父戀し

（七版）定價金壹圓 送料十五錢

紀州の濱邊に伊吹子と明治といふ姉と弟がありました。二人のお父さんはある日、海に出たきり歸つて來ませんでした。二人はなげきかなしんで、母と共に諸々方々と尋ね歩いて遂に滿洲まで行くといふ、沖野先生お得意の涙と教訓とに滿ちた物語りです。

沖野岩三郎先生著 童話讀本 赤い猫

（七版）定價金九十錢 送料十三錢

沖野岩三郎先生のお話は、面白くつて〳〵思はずクス〳〵笑出して了ひます。そして又、どのお話も深い教訓を持つたものばかりです。「赤い猫」は沖野先生の短篇傑作中特に讀本として適したものばかりを集めたものです。歐米の讀本が皆童話讀本であるやうに、「赤い猫」は日本最初の模範的童話讀本です。學校に家庭に或は兒童文庫に是非本書をお備へ下さい。

三宅房子先生譯 家なき子

（五版）定價金壹圓八十錢 送料十五錢

『家なき子』は世界的名作として、世界各國語に飜譯され、如何なる少年少女も是非一度は讀んで置くべき本として推薦されてゐるものです。原作は佛國の文豪エクトル、マーローの作になり、一人の孤兒の生涯を書いたものです。名家の家に生れながら、不思議な運命にもてあそばれて、遂に旅役者に賣られ、村から村へ、さすらひ歩く哀れな物語りです。

東京市外田端三五一 金の星社 振替東京五九五五 電話小石川九五三五 番 九八六七

武井武雄先生著並畫

四六判箱入頗る美本・定價金壹圓六拾錢・本文二度刷三百頁・送料金十五錢

繪入童話集 ブウ太郎鍛冶屋

忽再版

（目次）

ブウ太郎鍛冶屋
蜂の貸間
竹の着物
化けマンドリン
陸軍大將
お嚏の卵
流れ星
眼玉
不朽の花園
世間話
又取つたよう
木魂の靴
其他數篇

武井武雄先生の最初の繪入童話集『ブウ太郎鍛冶屋』は果せる哉、熱狂的大歡迎を受け、出版後數日ならずして初版全部を賣り盡くし忽ち再版を發行するに至りました。

本書を手にした方は、先づ裝幀の獨特の美しさに驚かれる事でせう。箱も表紙も五度刷の武井先生お得意の畫を以て飾られ、口繪には二枚の三色版があり。本文は全部二度刷の優雅極りなきものです。「こんな、、、、せいたくな本はない」と本屋さんが評したのも尤もです。しかも定價が頗る安價であることは、金の星社の誇りとするところです。

東京市外田端三五一 金の星社 振替東京五九五五 電話小石川九五三五 番 九八六七

ライオン歯磨

ライオンはみがきは、子供さんたちの歯をみがくに、ほんとに、良い歯磨です。

やア、いいお月さまだなア、
ぼくが歯をみがくのを見て、
お月さまがわらつてゐるよ。

『金の星』第六巻第七號（大正十二年七月廿三日印刷納本　大正十二年七月廿五日發行）
（定價金四十錢　送料一錢）